

通類櫃



郎治鴈
號作新

号月十輯三十第

光壽正宗
御影正宗

御影酒造株式會社

灘御影東吳田。電御影三益充

御影吟釀酒直賣所

大阪北區中崎町本庄公設前

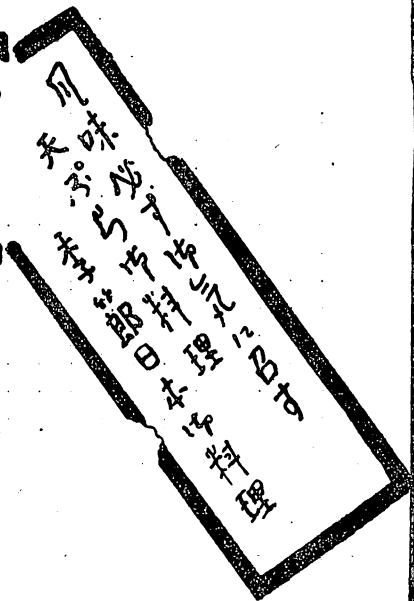
神戸市宇治川公設前

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



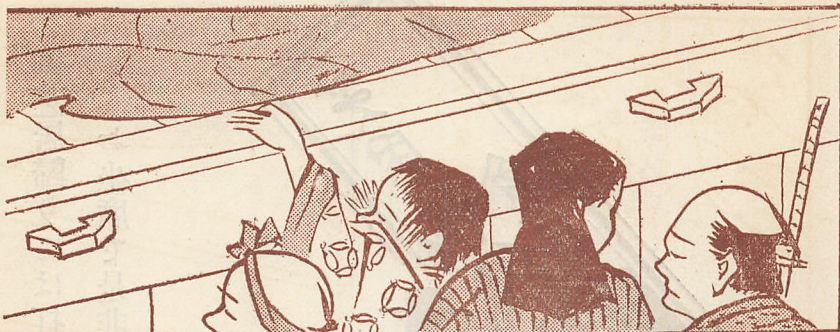
吉屋食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



道 頓 堀

(昭和二年十月號)

第十三輯・鷹治郎新作號

口 繪 寫 眞

◇「明暗縁染附」稽古場に於ける魁車、延若、鷹治郎、福助、澤田正二郎の星亨◇「劍客商賣」の中井の谷田内膳澤田の劍客鬼塚玄蕃◇「髮澤田の上田金吾◇「乳房復」壽三郎の磯貝浪江、延若の下男正助、延若の婢の蝶の三次◇「謎帯一寸徳兵衛」本所崎復讐の場◇「雲仙岳」第一場舞臺面◇「緋鹿の子地獄」築地河岸の場◇「倭日向」五郎の冷胎屋阿部作兵衛「色花緒」大磯の榮吉の妻お久、蝶六のお父片桐徳藏、五郎の下駄商中田榮吉◇「我が家」小磯の石井藤兵衛、加藤の島山源太郎「發端累ヶ淵」梅島の手代新五郎と東榮子の宗悦の娘お園「二人定九郎」小笠の浪人戸野村大吉と梅島の定九郎に扮する中村仲藏◇「坂垣伯遭難實記」小笠の板垣退助山口の相原尙葉「寶を釣る男」小笠原の松並九兵衛山口の和泉屋治良吉◇「文樂人形浄瑠璃」近頃河原の達引「堀川猿廻しの段」碁太平記白石噺」吉原場屋の段◇初代加藤民吉翁の肖像、民吉翁の作品

曲 者 座

■明暗縁染附 (上演脚本)

大西利夫(二)

■女郎蜘蛛 (上演脚本)

坪内士行作(四)

■心中二枚繪草紙 (芝居見たま)

食滿南北改訂(四)

■玩辭樓漫筆

素木宗一(五)

■ガングロサン

中村鷹治郎(四)

■鷹治郎断片

高安吸江(五)

■鷹治郎丈の將來

入江慶三(五)

■民吉劇「上演に就いて」

矢野來布(六)

■瀨戸へ 浪花座

鳥江鏡也(六)

■應援歌を歌つた頃

額田六福(七)

■「新國劇」のその頃

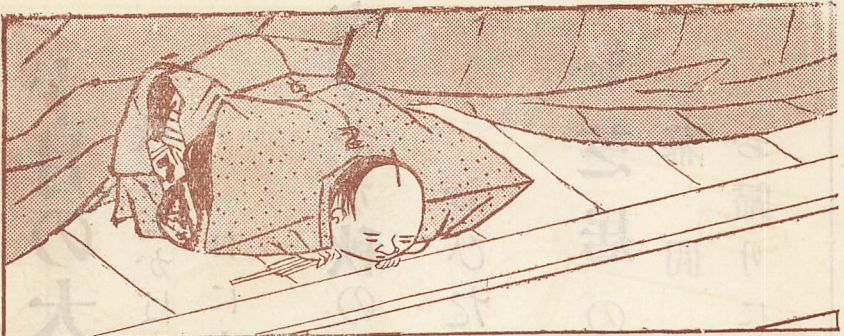
仲木貞一(七)

■努力の人煩悶の人

行友李風(八)

■新劇運動と「新國劇」

津村京村(二五)



□轉戰の跡……………澤田正二郎(六)

■髮……………(芝居物語)
 □星……………山上貞一(七)

□星亨に就いて……………加藤明(五)

■劍客商賣……………(芝居小説)
 □劍客商賣に就いて……………小江戸主水(一〇)

◇角座◇
 □驪赤城の月上演に就いて……………川村花菱(一三)

◇辨天座◇
 ■文樂の十月興行……………(六)

◇
 □一轉期に立つ新派……………平野止夫(一八)

□新橋演舞場九月の印象……………綿貫六助(二三)

■演出上に依る女優讚美……………福隅一孝(八)

◇
 ■京屋十二姿(短歌)……………木村富子(二七)

◇
 ■喫烟室……………高橋蓼雨(九)

■治水記の記録……………(五)

■明暗縁染附に就いて……………(四)

■女郎蜘蛛の連名……………(五)

■澤正の星亨劇は……………(二)

■顔を揃へる大一座……………(八)

■浪花座新國劇の配役……………(五)

■芝居氣分(川柳)……………(八)

■心中二枚繪草紙の命名……………(四)

■讀者俱樂部(原稿募集)……………(二)

■紙子仕立兩面鑑……………(八)

□編輯後記……………朝郎生

■表紙插畫……………大塚克三

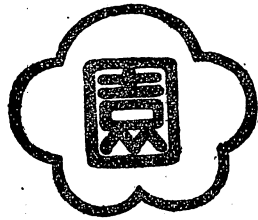
十月の大歌舞伎に梅園のお獻立

秋もなかばして眼に大芝居の觀を盡し

口に定評ある梅園料理の満を喫し

爽やかな秋の氣分に

おひたり下さい



梅園

お芝居の

幕間

お歸りには

お芝居での御食

事は食堂にて

おかへりには白

鷹にて一寸一ぶ

く江戸すしを

中座食堂

本店

太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

優秀の技術と迅速が當館の有つ

唯一の誇りです。

御散索の折にぜひ御立寄りを……

高津郵便局東

山崎寫眞館

電話南四二四四番

スキナ あぶら 脂取紙

菊薫る！

数多い、四季の草花のうちでも菊は、一入の氣高さ、床しさ、美しさを保つて居ります。皆様のお顔の美を保つには、是非此の

スキナあぶら取紙を

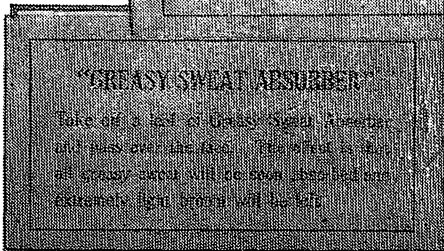
御愛用をお願い申します。

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり。
お買求めの節は「スキナ」と御指定を乞ふ



現品縮圖

スキナあぶら取紙



本 舖
ス キ ナ 屋 號
中 田 大 商 店
大 阪

蒲田撮影所超特作品

海勇姿

原作	菊池 寛
総指揮	近藤 經一
映畫化	村上徳三郎
脚色	城戸 四郎
總監	島津保二郎
監督	鈴木 傳明
主演	松井千枝子

松竹キネマ株式会社

嘗て六代目菊五郎が市村座に上演して、大好評を博せるものなれど、雄大なる海洋を背景とせるこの名作は、舞臺劇よりも遙かに、映畫的なものあり。ベストメムバーの心血凝つてこゝに無比の逸品を生む、御期待の程を。



會旗優勝旗

神戸市楠社西門

劇場幕幟

梅原商店

緞帳フラー

電話元町一六一五番

小 道 具 · 小 裂
貸 衣 裳

素人演藝會
宴會の催物

春秋温習會
婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

本 店

大阪市南區久左衛門町八番地

電 話 南 一 一 八 八 番
四 七 一 一 番

東 京 支 店

東京市淺草區並木町十五番地
電 話 淺 草 五 五 九 九 番



其他一般の衣裳を多少に拘らず御利用下さい
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます

十月一日開館

目覺むるばかりの大菊花園

全館舉げて菊世界

今迄にない大規模な

東西名優の似顔菊人形
四遊廓名妓

御慶事記念

空前の大菊人形

人工の極致を盡した

他で見られぬ大道具使用

八段返しの大偉觀

歴史的參考資料の隨一

天下一品大仕掛大道具の菊人形

千

日

前

樂

天

地

折紙の附贈品は
御贈答品

松竹通観覽切手

お手の近所の賣所

お手の種類の

この切手一枚で全國何處へ往つても
松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

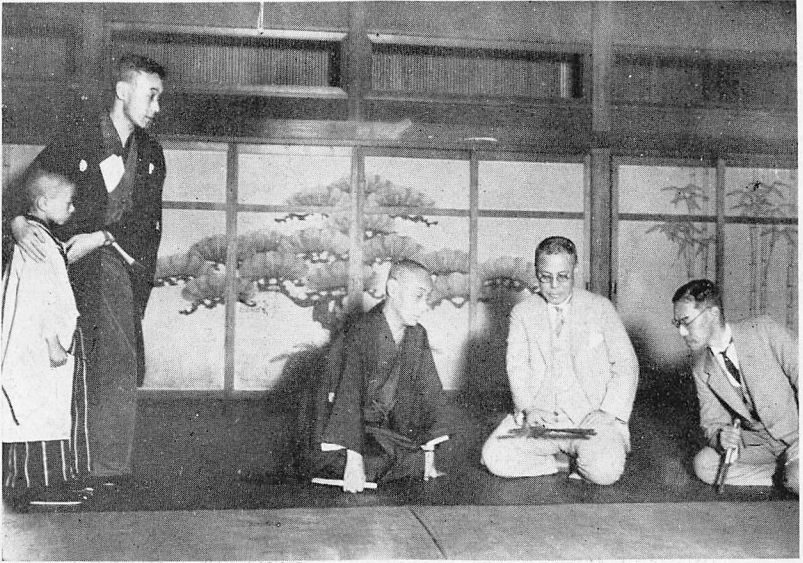
一圓・二圓・三圓・五圓の八種
十圓・十五圓・廿圓・五十圓

御觀劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品
本家茶屋直營の案内所等一切御支拂に通用致します
様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は十二錢券五枚
にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です

大阪南區久左衛門町八
大阪道頓堀
大阪東區高麗橋心齋橋筋
京都市河原町蛸薬師上ル

松竹合名社
角座
プレイガイド
松竹合名社

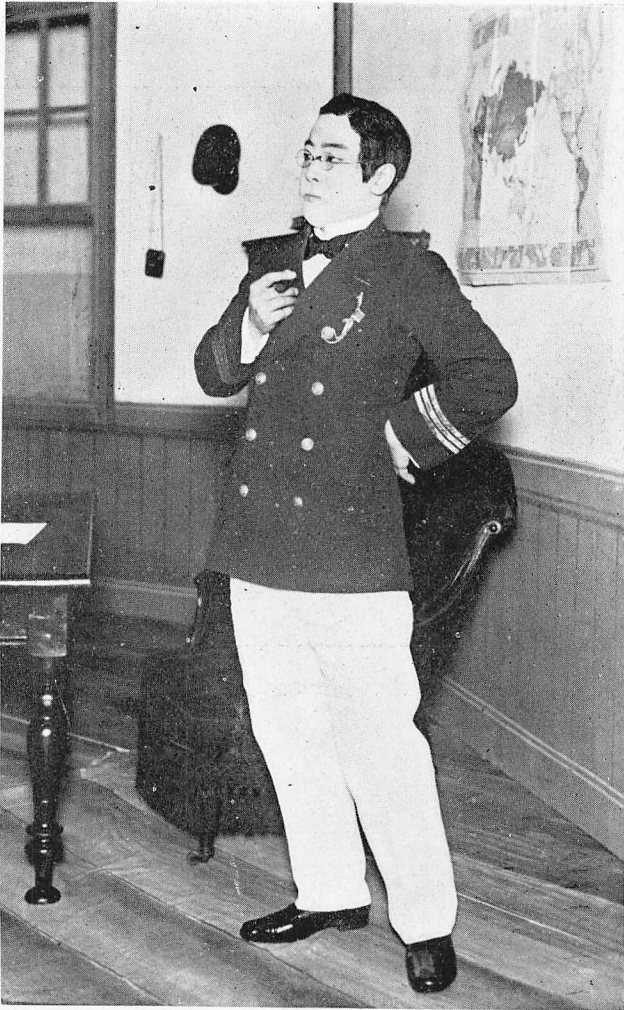
其他各座にては三日前より揚席の取れる
指定番號入前賣切符も發賣してゐます



森 三 附 染 縁 暗 明 作 雪 痴 森 大

振 古 稽 の 座 一 郎 治 鷹 村 中 行 興 月 十 座 中

助 福 ・ 郎 治 郎 ・ 若 延 ・ 車 魁 (りよ右)



蘇 五 亨 星 作 歲 吉 村 中

亨 星 の 郎 二 正 田 澤

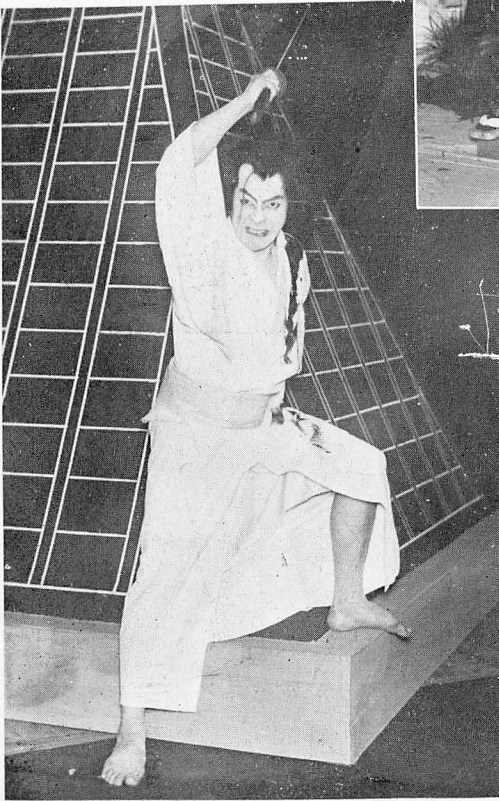
劇 國 新 ・ 月 十 の 塵 花 浪



劍客商賣

中井哲の卷田内膳と
澤田正二郎の劍客鬼塚玄蕃

浪花座十月興行の新團劇



澤田正二郎の上田金吾

浪花座十月興行の新團劇



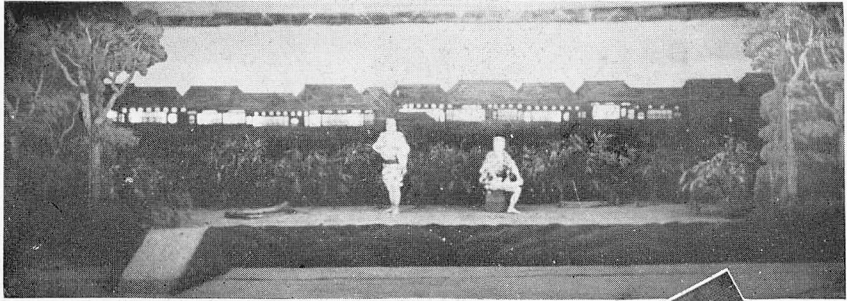
江浪貝磯の郎三壽東阪
助正男下の若延川實



實川延若の鱗の三次

怪談 乳房 榎 五 幕

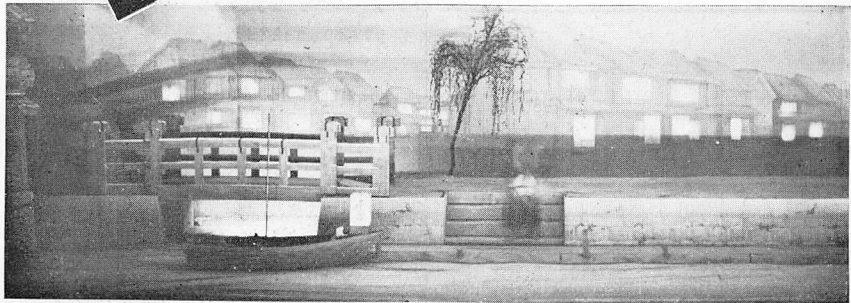
浪花座の九月・關西大歌舞伎



衛兵徳寸一帯謎
 場の讐復崎洲所本
 伎舞歌大西關・月九の塵花浪



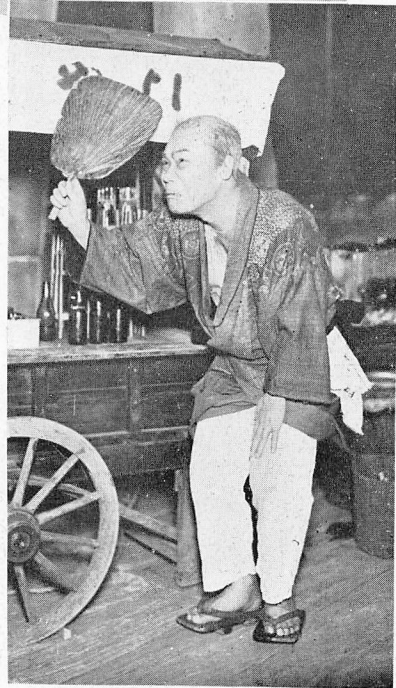
面臺舞の場一第『居仙雲』
 劇團雀雀扇村中・月九の塵中



劇團雀雀扇村中・月九の塵中 場の岸河地築 『獄地子の鹿緋』



第一 緒花色
蝶、久お妻の吉榮の磯大 (りよ右)
、藏徳桐片父の久おの六
吉榮 田中 商駄下の郎五



中座の九月
(曾我廼家五郎歸朝紀念興行)
蔭 日 向 一 場
五郎の冷し 飴屋阿部作兵衛

角座の九月 昭生座



我が家
小織の石井藤兵衛
加藤の鳥山源太郎

發端累ヶ淵
梅島の手代新五郎と
東榮子の
宗悦の娘
お園



二人定九郎
小織の浪人戸野村大吉と
梅島の定九郎に扮する中村仲藏

九月の辨天座 新潮劇

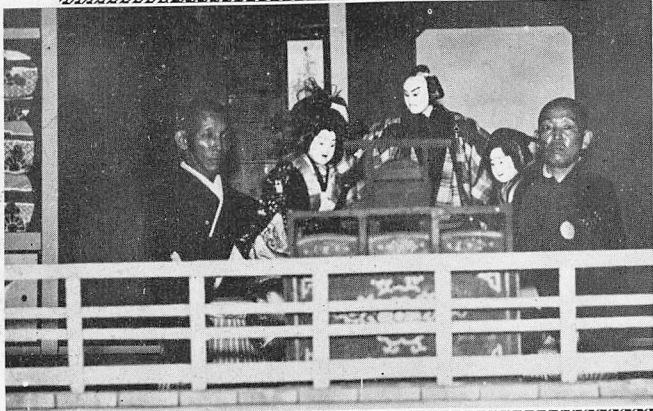
板垣伯遭難實記

小笠原の板垣退助・山口の相原尙聚



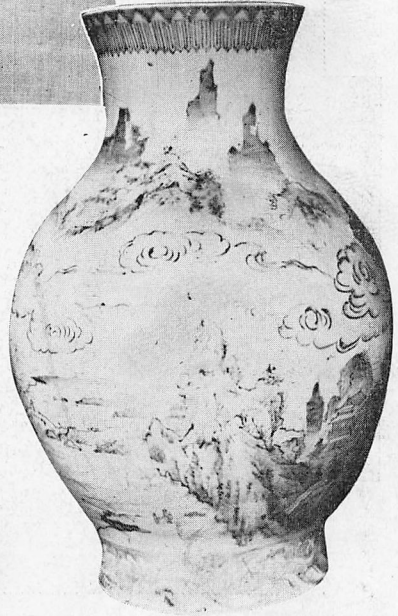
寶を釣る男
小笠原の松並九兵衛・山口の和泉屋治郎吉





十月の辨天座 文樂の人形浄瑠璃
 近頃河原の達引 (鑑川猿廻の母)
 基太平記白石噺 (吉原揚屋の母)

初代加藤民吉翁の肖像



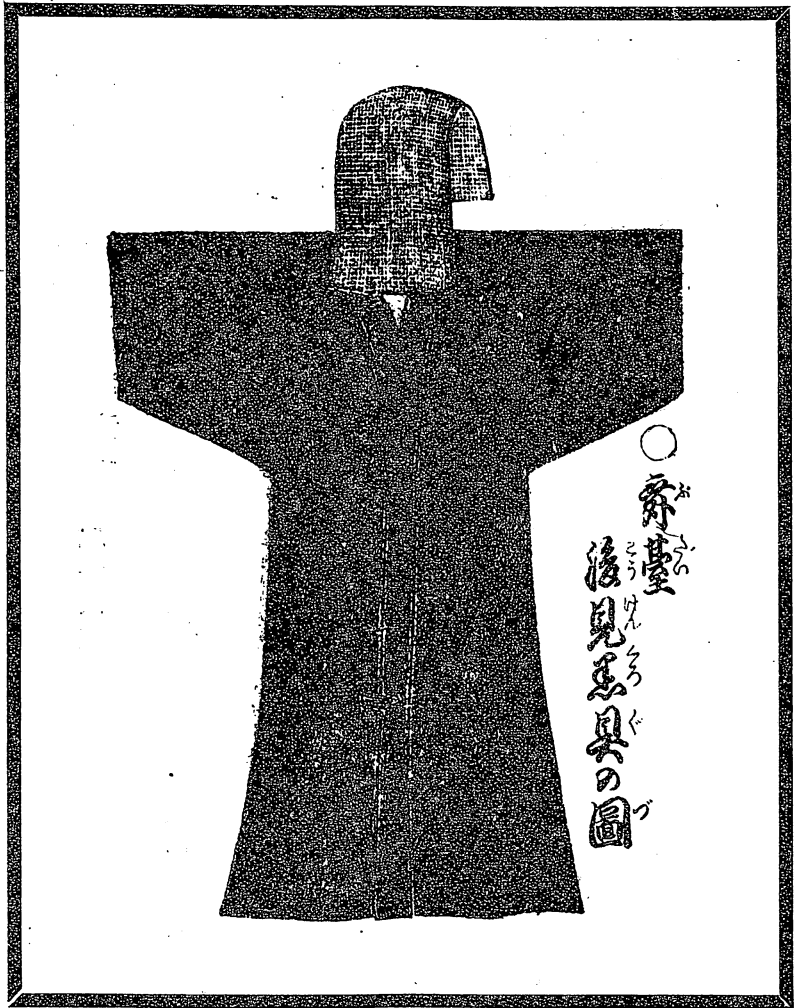
品作の翁吉民

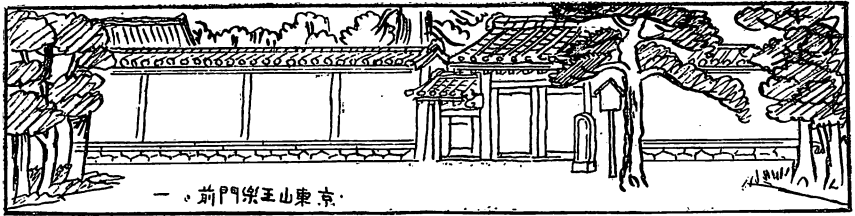
依割歌大西關純・月十の塵中

誌 雜 ・ 究 研 劇 演 ・ 刊 月

堀 頓 道

輯 三 十 第 ・ 號 作 新 郎 治 鴈





中座十月興行上演

曲物くせ もの

語がたり

二幕 三場

大西利夫

場割

序幕 一、京東山大源寺門前

二、大源寺奥書院

二幕目 丹波福住村峠茶屋

登場人物

澤源之丞	(扇雀)
捕手頭 神崎三十郎	(箱登羅)
寺男 重助	(延若)
井筒屋 すすが	(魁車)
狩野 晴信	(福助)
若衆	(吉三郎)
通行人の男女	
捕吏 大勢	

第一幕

第一場 京東山大源寺門前

や、上手よりに寺の門、禪宗、

下手花道筋に建石『右白川口』と記しあり

通行人男女四五名出る、花道より澤源之丞

編笠を被つた若衆姿にて登場。

通行人を氣にしながら門前に至り、ゆきき

の人たえるを待ち、あたりを見まはし門内

へ入る。

つゞいて花道、上手、下手三方より捕吏六

人出る。

門前にて皆ゆきあひ、何か合圖して皆急い

で上手へ入る。

また通行人四五通りすぎる。

暫くして上手、下手より先の捕手皆出る。

捕手一 どうぢや知れぬか。

同二 たしかに、この方へ來のぢやが。

同三 不思議ぢやなア、——寺の中へ

でも逆けんのだのではあるまいか——

同（四）なるほどさうぢや、かうして

八方からせめて來てこの邊で急に姿を

見失うと云ふ譯けがない、たしかにこ

の中ぢや、さあ踏み込め。

同五 まて、減多なことは出來ぬ

ぞ、寺方へ斷りなしに踏み込めば、あ

とでこつちの落度になる、まづお頭に

相談せずばなるまい。

同六 と云うてくづくしてゐたら逆

がしてしまふかも知れぬ、あとの事は

あととして、兎も角く踏みこまう。

同二、三、四 それがよい。

同 一 待て、お頭がむかうから見

たぞ、まづ其由をいふてからにせい。

同五 お、頂度都合がよい、お頭、神

崎様——

神崎 三十郎上手より登場。

神崎 どうぢや見つけたか。

捕二 ヘエ、どうも困りました、せつか

くつけて來たものを、急に姿を見失ふ

たのでござります。

同五 どうやらこの寺の中が怪しいとに

らみましたが、寺方へふみ込むには作

法のあること、あとの落度になりまし

てはと存じまして、お頭のお指圖を待

つて居ります。

神崎 馬鹿、左様なことは一々指圖をま

たずとも取計はぬか、よしんば作法を

破つた所で、おれの知らぬ間にした事

なら何とでも話をつくのぢや。

捕二 それ見い、いはぬ事ぢやない、さ

あ皆行け。

神崎 待て、一旦俺が耳にしたから

には無暗にふみこますわけには行かぬ

先づ身どもから寺へかけあひを致す、

皆ついて來い、——さて、其の方ど

もは血めぐりの悪い奴等ばかりぢや。

ト、寺の門を入らうとする時、寺男重助

登場、少し酔つてゐる。

重助 お、旦那、どちらへお越しでござ

います。

神崎 重助か、和尚はゐるか。

重助 ヘ、和尚さんは昨日から大阪へお

下りなさいましたが、納所坊主一同も

お伴で、寺の中はまるであき家でござ

えます、おかけで、へい私もこの所命

の洗濯とございやす、ハ、ハ、ハ。

神崎 大分よい機嫌だの、しかしそれは

困つた——これ重助、その方今しがた

十七八の前髪姿の武士が一人この寺へ

逆けんのだのを見た事はないか、紫の

羽織を着用致した美しい若衆ぢやが——

重助 ナニ紫の羽織——左様でございま

すなそれなら見たやうでもあり——へ

へ、い、い。

神崎 ナニ見たり？ ふむ、その方それを

どこで見た。

重助 へえ——（と三十郎の顔を見てひやか

すやうに笑ひながら）へ、い、い、その人

なら今奥の狩野先生のところでいぢや

ついてませぬ。

神崎 ナニ狩野と申すと——ふむ、この

寺の奥書院を借りうけて講をかいてる
狩野晴信ちやの、よし皆の者構ふこ
とはない、踏み込め。

捕皆 心得ました。

ト行かうとする。

重助 おつとまつたく、さう眞面目に
出られちや困つてしまふ、旦那さまあ
さう野暮に固くなるものぢやございま
せんよ。

神崎 たはけもの、身共を何と心得る、
今日は役目だぞ。

重助 まあ、さ、役目は役目でも對手が
女の事なら随分お慈悲な神崎のさアは
ん（と肩を叩かうとする）

神崎 無禮者、ぶち斬るぞ。

重助 何のかのと、へ、旦那、あの女
は助けて置く方が都合がようございま
すぜ。

神崎 ナニ女だ、それはちがふ、身ども
の尋ねるは、なる程女に見まがふ美し
い若衆ちやが、もと松前家の家臣にて
澤源八郎と申すもの、弟源之丞と申

すものぢや。

重助 そいつは話がもつれ過ぎる、私の
申すのは同じ美しい若衆姿に相違ござ
いませぬが、それがまた思の外に眞眞
の女でございましてね。

神崎 それは面妖ぢや、してその方それ
を女とどうして知つたな。

重助 それが旦那、最初庭傳ひで先生の
ところへ来たのを見た時には、私も男
だと思つて居りましたが、暫くしてふ
と小用に立つた序に奥をのぞきますと
へ、、狩野先生もうは氣ものでござ
いますぜ、あの美しい井筒やのおすが
さんと云ふ情婦があるのをおいて、あ
たちやらくとした、へ、、。

神崎 これ、そんなことはどうでもよい
その若衆は如何致したと申すのぢや。

重助 それが、お前さん、目のさめるや
うな若い女でございましてね、先だつ
ておすがさんの注文で狩野先生が下繪
をかいて染めにやつたと云ふ日つきの
衣裳が、昨日下仕立あがつて来たばか

りのやつを、惜しげもなうしつけを取
つてその女に着せ、先生御自身襟をな
ほしてやつたり帯を結んでやつたりし
ながらよく似合ふの、美しい女だのつ
て獨り言を云つては涎をたらしておい
でなさいました。

神崎 それはちとおかしい、してその方
その女と物をいふたか。

重助 云ふ段ではございませぬ、私ア見
てゐてあんまりふざけますからへ、お
樂みでございませぬと聲をかける先生
も女もびつくりしたのしなないのでつて
—そこで私がちよいと先生をゆすつて
—當座の口留料小判で一両也、するとそ
の女がまた金の鈴を振るやうな聲でこ
ざいましてね、わちきや禪寺だと思つ
て若衆になつて来たものを、とうとう
見つけられてしまつたとは、ほんとう
におまはんも罪な人だよう——と優し
い手で私の肩をポン——

神崎 これ、其方それは眞面目の話しか。
重助 ナニちつとは嘘がまちつて居りや

ず、ほんとうに左様ならばの屋敷女でございませうが、女に相違ないことは大鼓の判でも押しませう。

神崎 どうも狐につま、れたやうな話ぢや、(捕方に)その方らまさか若衆を見ちがひ致すまいな。

捕一 めつたにない積りでゐいます、何にせよ大津からたしかにそれとにらんでつけて来たのでござります。

同二 然し粟田口で大分人の群集に困つたが、あの時見ちがふたのではあるまいか。

同 一 なる程さう云へば同じやうな若衆がもう一人落ちつかぬ風態で歩いてゐるのがあつたな。

重助 (妻細かまはず話しかける)ところで旦那、私はたつた一両位の口留料で寢がへりをうつやうな男ぢやございませぬ、なあ旦那、旦那には深い御恩がございますねえ。

神崎 何を申して居るのぢや、その方大分酔ふてゐるの、もうよい黙つてゐい

——(と捕方の方)然らばその方らは

重助 まあそんな事はどうでもよい、ぢやございませんか、これからが正念場の話なんで——

神崎 うるさい奴ぢやな。

重助 うるさいどころぢやございませんよ、私は又あの女を見たについてふと思ひついたので、それが旦那に日頃から頼まれてゐる、おすがさんの一件——

神崎 (狼敗へて)こりやたわけめ、何を申すのぢや。

重助 エ、ナニ、それ頼まれてゐた、おすがさんの帯を、狩野先生から貰ふ工夫——

神崎 え、そのやうなことは今日申してゐるところではない、何にしてもその女と云ふのは不審ぢや、身ども自ら檢分にまゐる、重助案内せい——

重助 へえ——なるほど(と獨りのみ込んで)それがよろしうございませう、くはしい事はあちらで申し上げませう。

神崎 (捕手に)その方らはこゝで尙ほ油

斷をせずに見張りをいたし居れ。

神崎、重助退場。

捕皆 かしこまりました。

捕三 やれ、折角追ひ込んで来たのが、人ちがひの女とは草臥儲けぢや。

同 一 めつたに見ちがふ筈はないのぢやが不思議な話ぢやな。

同四 へ、貴様の事ならありさうなことぢや、いつぞやも人ちがひの大騒がせをさせやがつたことがある。

同五 (下手を見て)や!皆一寸むかふを見い、編笠を被つたさつきと同じやうな若衆が来る。

同 一 あ、さうぢや、あれぢや、さつき粟田口を歩いてゐた若衆は——

同二 やあ、なるほどこれは妙ぢや、これはこつちが見ちがふたのかも知れぬ皆忍べ——

他の皆々 合點だ。

寺の門内と上手へ忍ぶ。

むかふより井筒屋おすが登場、下手より編笠の若衆登場。

おすがと出會頭になる。

若衆 あゝの、一寸物をお尋ね申します、
白川口へまゐりますのは、かうまゐり
ますか。

すが はい、左様でございます、あのこ
れこゝに建石が建つてござりますすわい
なあ。

若衆 ほんにこれは粗忽、右、白川――

云ひながらおすがの方へより添ふ。
おすが氣味悪さうに身體をひく。
この時捕手出る。

捕手 御用だ！

ト、かゝる。

若衆 一つ二つ争ふて、捕手一、二、をな
げとばし一散に花道をにげて入る。

捕手 それにがすな！

一同追ふて入る。

おすが え、何ぢやいな、びつくりした
ではないか、人に路をきくのぢやら
くゝと傍へよつて來ると思ふてゐたが

門内へ入らうとする時、神崎、重助登場

重助 おすがさんぢやございませぬか。

すが お、誰かと思へば重助さん、お、
神崎さまも御一緒でこちらへお出かけ
でございます、祇園通ひにはまだ時刻
がお早うござりますすぞへ。

神崎 これくゝ冗談ではない、身どもは
役儀ぢや――配下の者どもはどこへま
ゐつたのであらう。

すが そんなら今こゝにゐたお方々はあ
なた様の御家來衆でござりますか、ど
うりで物騒がしい――それなら唯今怪
しい若衆がひとりまゐりましたので捕方
におむかひなされましたわいなア。

神崎 ナニ怪しい若衆、む、さてはや

つばり見ちがえを致して居たのぢやな
重助 旦那、ちやうどい、所だ、ねエ旦那
（と神崎に目くばせする、神崎承知した

といふこなし）おすがさん、こんな所で
あつて云ふのも變だが、旦那がお前さ
んに話があると仰言るんですが、一寸
むかふの花笠茶屋までつきあつて下さ
いませぬか。

すが それはまあ有り難うござりますすが

今日は一寸心せきでござります故今度
のまゝであづけて置ませうわいなア
重助 これさ、心せきはわかつてゐるが
その心せきの一件についてお前さんの
耳に入れて置きたい事があるのだから
すが へえ――心せきの一件といふてお
前それを知つてかいな。

重助 知らなくてどうするものだ、お前
さんの御注文の衣裳は昨日ちやんと仕
立上つて來て居やす。

すが そんな事はどうでもよいわいなあ
神崎 は、、、、衣裳などはどうでもよ
い、たゞぬしにあいたさ一心とはちと
て強いテ。

すが あれ旦那、きつい御心配でござり
ますなア。

重助 ハテ心配するのは私も同様、おす
がさんはさうして先生に下駄はいて首
だけだが、先やさほどに思やせぬか。
すが さうかいなア。

重助 涼しい顔をしなはん、先生はこ
の頃は外に、のが出來てるんだぜ。

すが 何と云はしやんす。

重助 それ／＼眼の色が變つた。

すが ほゝゝゝ、おいて下さんせ、そんなことにやくのりんきのお思はれては

片腹痛い、どうせ男は浮氣なもの、またその浮氣の出来る程の男なりやこそ

おすがもとんとうち込みました。

神崎 これは手荒い、それでも現在あひ

びきをしてゐる所を見せつけられたら

あんまりよい氣もすまいてや。

すが さアどうでござりませう、一ぺん

そんな所を見たものでござります。

重助 冗談ぢやねえ、大真面な話なんです

すぜ、ちつとは身を入れておきゝな

るが、いゝ。

すが いやもうこの頃は私と先生との仲

を岡やきしていろ／＼なこと云ふもの

が多うて困りますわいな、どうぞそこ

よいやうに——御免なさらませ。

行かうとする。

重助あはてゝとめる。

重助 いけねエ、今お前さんが行つ

ちやいけねえ。

すが あれ、なぜにぢやえ。

重助 なぜもあんまもあるものか、悪い

ことは云はねえから、およしなせえ、

すが おかしなことを云ふ人ぢや、今わ

しが行くといふ先生に都合の悪いこと

でもあるのかえ。

神崎 さあ、どうあらうかな、そなたが

注文とやらの衣裳と云ふのも、誰に

せよとて染めたものやら——

すが え、

重助 旦那、そんなことをいふものぢや

ございませぬ、おすがさん、袴細は花

笠茶屋で話すから、まあ一しよにお

でなせえ——

すが エ、私やいやぢやわいな。

手強くつき放す。

重助よろ／＼として神崎の横腹へ腕をあ

てる。

神崎 あいたゝゝゝ。

すが おゝ、これは御免なさらませ。

寺の門内へ退場。

重助 旦那、御免なさいまし、ひどい事

をする奴だ。

神崎 お、痛い、人もあらうにその方

まで脇鐵砲を喰ふとはいやはや悪い辻

占ぢやわいな。

重助 はゝゝゝ、なアに御心配なさい

な、あれだけ油をかけて置けば、あ

は自然にもえあがります、その上での

細工は流々、私におまかせなさい

神崎 左様か、然らば頼むぞよと懐から

紙入を出し金を出しながら、不思議な

ので、叶はぬとなると意地になるも

のぢや、そちの手前もちと面目ない

——少いが當座の小使——

ト、金を出す。

重助 へゝゝゝ、毎度あり難うござい

す。

ト、とたんに下手より捕手一、走つて出る

捕一 お頭。

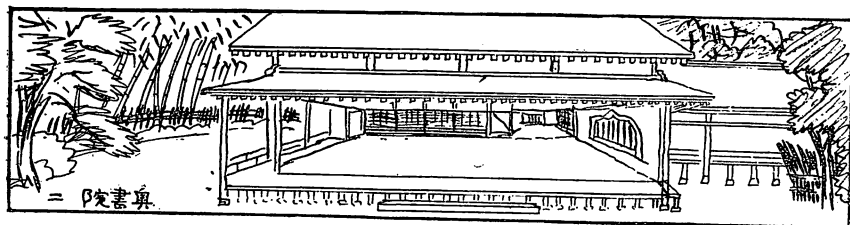
神崎 エとびつくりしてむ、如何致した

捕一 怪しい奴を召とりましてムります

神崎 ナニ召しとつたか、すぐまるらう

では重助。

重助 またお目にかゝりませう。



第二場 大源寺奥書院

正面二重、大きな廣椽、椽つゞきの上手は廊下、他の部屋に通じる。

平舞臺は庭園、

下手に茂つた竹籬あり。

二重の上、正面床並んで大きな押入、畫の道具雜然と置いてある。

半ば描き上つた梓張の三幅對の畫あり

狩野晴信武具を引出し、水色ちりめんのかはをはいで頭巾にきつてゐる。

澤源之亟、女装して控へてゐる。

晴信頭巾のきれをきりしまひ、蒲團を片づけ源之亟にきれを渡す。

晴信 如何でゐる、蒲團の側のよい所とりを致したが中々立派な頭巾でゐる、は、は、これを被つてお越なされたらめつたに男と氣づくものもござるまい。

源之亟 ありがたう存じます。

何から何までお心添、御恩の程は生涯忘却致しませぬ。

晴信 ナニく、左様仰せられては却つて痛み入る、御見かけ通り、私も唯今では見るかゆもない畫かき暮し、おもてだつてのお力になる甲斐性もござらぬが、もとはあなたのお兄上源八郎殿とは同藩同家中もち前の正直潔癖

が身のあだとなり、殿の御勸氣を受け浪々の身となりましたが、その折から蔭になり日なたになつてお世話下されたお兄上の御恩は今に忘れませぬ。

源之亟 さほどのこともござりますまいにお言葉恐れ入りましてござります、さり乍ら、今は何のか、はりあひもなきあなたに、かやうなおしつけたお願まで致し、御迷惑が、らねばとそればかりが心配でなりました。

晴信 何のその辭儀に及びませう、私も昔主家を出る節、佞人ばらの怨受けしかどあつて、既に生命の危い所をお兄上のお力にて無事にぬけ出したことがござります。

この時上手の廊下におすが登場。

忍び足にて座敷の方へゆかうとしてつきづき物音をたてる。

晴信 や、あの物音は――

障子を開き外を見るおすがいち早く物蔭に身をかくす。

晴信 はてな――何やら心が、りぢや。源之亟の方へ眼くばせる。

源之丞心得て頭巾を目ぶかにかぶる。
晴信 なほも外をうかひ誰も居らぬと見て、障子をしめる。

鼠か何ぞでござつたかな、は、は、は、いかさま草木にも心をおくとなれば、窮屈千萬なものでござるテ（と源之丞の姿を見て）いやそのおすがたなれば誰が見ても美しい女性、あでやかなこととでござるぞ、は、は、は、。

この間におすがまた出て座敷に近づく。源之丞 お耻かしうござります、何の因果でやらこのやうな弱い身體に生れまして家門の耻ぢやと常々兄から厭しい小言でござりましたが、それがかうしてお役に立たうとは思も設けませなんだ——

晴信 あ、これ——

急にとめる。

晴信人のけはひをさとした態

源之丞へ目くばせをする。

源之丞心得て奥の押入にかくれる。

晴信何げなき態にて障子をあげる。

おすが惘りする。

すが あれ先生、びつくりしましたわいなア。

晴信 おすがか、びつくりしたのはこの方ぢや、日頃に似合はぬ物辭かな誘れやうぢやな。

すへ（少し狼狽して）いえ、あの、そんな事はござりませぬ、どうやらお客様のあるけはひでござりましたので。

晴信 え、なにそんなことはない、誰も居らぬ、——まあそのやうな所て立つてゐずとこちらへ入るがよい。

すが はい——
屋敷の中へ入る。
晴信少しこれと粹張りの詣をおすがに見せて、

晴信 見てくれ、大分描けたであらうのもうあと三日もすれば出来上らうと思ふのぢやが……

すが（冷然と）それは結構なこととござります。

晴信 随分骨であつた、この夏病ふて以來今一つ身體がはきく致さぬによつ

て當分は筆をとるまいと心をきめて居たに、日頃一方ならぬ世話になる千種屋どのがたつての望み、いやとも云はれず一月足らずでこれだけ書きあけるなどは中々の仕事ぢやわい。

すが 左様でござりまするな。

晴信 これサ、そなただけふはどう致したのぢや、今日はひどうよそくしう致すの——ふむ、何ぞ氣にさはることもあるのか、あるなら申したがよい、さう水くさうするものではないわい。

すが 水臭いのは先生でござります。

晴信 ナニ、身どもが水臭い？

すが 先生、あなたほなぜおかくしなされませぬ、この夏の御病氣あけくでお仕事にも一つ身がいらぬとやら仰つてこのお寺の座敷をおかりなされたのは外にめあてのあつての事でござりましたかいなア。

晴信 なにを申すのぢや、室町の宅は知つての通り街中の手挾、それに人の出入りで事繁い故とこそ辭かな所へまる

りたいと申したら、そなたがこの寺を
借りて呉れたのではないか。

すが その私に借らせた家で、静かも静
か誰憚らぬいちやくし仕事、おいで下
さんせ、知らぬと思ふておいでなされ
ますか。

晴信 これは異なることをきくものぢや、
一體どうしたと云ふのぢや。

すが え、まだぬけくと……先生、
私はちやんと見たわいなア。

晴信 ナニ見た?

すが あいなア、定かには見えねど、た
しかに女の姿つき、さい前門前で重助
や神崎どのが云ふたことはほんまの事
であつたかいなア。

晴信 ナニ、然らば重助や神崎がその方
に——(と押入の中に氣をやる態)

すが ようも私をおもちやにして下さ
した、この間染めた衣裳も誰に着せよ
とておあつらへなされた、え、思へ
ば思へば私は口惜しいわいなア——
晴信 それまで見たからには致し方がな

い、おすが、いかさまその腹立ちば尤
もなれど、これにはいろく仔細のあ
ることぢや、悪う思うてはくれまいぞ
すが 仔細とはどんな仔細でござります
さあ仰つて下さりませ。

晴信 それは申されぬ、狩野晴信今は講
かきなれどもとは武士ぢや、武士を見
込んで頼まれたことは口が、けても申
されぬ。

この間に重助庭へ忍び出て立ち聞く

すが なぜいへませぬ、餘の人ならいざ
知らず、末は夫婦と互に固い約束をし
たこのすがにもあかさぬことがござ
りますか、よい加減なことを云ふてご
まかさうとなされてもあかぬことぢや
私はその女に——
矢庭に立ち上る。

晴信とめる。

晴信 すが！どこへ行く。

すが どこへゆきませう、女房にもあか
せぬ女の顔見てやるのぢやわいなア、
たしかこのあたりに——

晴信をつきのけ、走りよつて押入をあけ
やうとする。

晴信おつとり刀でさへぎる。

晴信 無禮者！たとひ女房が親であらう

と、あかせぬことはあかさぬ、武士に
二言はない、たつてと申さばその分
はすて置かぬぞ(と刀の柄に手をかける)
すが すて置かぬとはどうなさんす、お
前私をきる氣かえ、さめ斬らしやんせ
きつて下さんせ、え、お前に斬られて
死んだら本望ぢやわいなア。

この時押入より源之丞走り出る。

源之丞 まあお待ち下さりませ、その申
譯は私から申しまする。

晴信 や、そなたは——

すが それ、どうぢや、このやうな女が
ゐるではござんせぬか。

源之丞 いえく私女ではござりませ
ぬ、まことは男でござります。

すが エ、な、なんと云はしやんす。

源之丞 私はもと蝦夷松前家の家臣にて
澤源八郎の弟源之丞と申すものでご

ざります。

晴信 あ、これ左様なことをおあかしなされては——

重助ひそかに退場。

源之丞 いえ、先程よりの先生の御迷惑、あまりと申せば心にすみませぬ、殊には末は奥様とおなりなされる、お方と承りますからには何事も包みかくさず申上げませう。

ト、源之丞、晴信あたりに氣をつける。

源之丞 主人松前家の蝦夷の領地、表高無祿なれど内高六十餘萬石にも過ぎたる大々名にござりますを、お家に蔓る佞人ばら、兄源八郎の計らひにて追ひ拂はれたるを遺恨に思ひ、つてを求めて將軍家に様々なるよしなし事を讒言致せし爲め、俄かに領地は召しあけとなり、換地として賜りましたは上州にて僅か六萬餘石、それも表高にて内高はその十分の一にも足らぬひつ息にて、主家は殆ど離散同様、兄はそのため切腹致して果てました、私不肖なが

ら兄の遺言により、日頃格別の御思召を賜りし關白殿下近衛公のお力にすぎり、何卒主家の再興を計らむものと、かくは都へ入り込みました所、早くも捕人にとり圍まれ——

晴信 あいや源之丞殿、さほどまで深い話は御無用でござりませう、おすが、唯今のお話で大概そちも察しがつくであらう、窮鳥懷ろに入れば獵師も之を捕へずとか、まして松前家は身どもの舊主人、澤源八郎殿には一方ならぬ御恩のあることは日頃そちにも話した事ぢや、その弟御なら生命にかへてもかくまひ申さねばならぬ、そちの衣裳をきせてあさまい女姿におさせ申したも皆身共の計ひぢやわい。

すが え、まあ私はどう致しませう、それとも知らず、とり亂した悟氣沙汰私は恥かしくうてなりませぬわいなア。

この時、下手敷の中より捕手二三人忍び這ひ出る。
同時に上手廊下より神崎三十郎捕人四人

忍び出る。
晴信いち早く物音をきつけ、素早く源之丞を押し入れへかくす。
すぐ神崎座敷へ入る。

神崎 晴信殿御意得申す。

晴信 や、御身は神崎殿。

すが どうしてこれへ。

神崎 仔細はその方におほえのある筈、かくまふた仁をこへ出さつしやい。

晴信 は、これは異なることを承はる、かくまふたとは、誰人のこととござりまするな。

神崎 とほげさつしやるな、種はずでにあがつて居るのぢや、者共、それ……
捕方一同 心得ました。

二人は晴信の両手をとる、他の一同押入の方へよる、おすが遮る。

すが あれ、何となされます。

捕方 え、邪摩するな……

おすがを突き退け、押入を開けやうとする晴信手を押へて捕手を突き退けかけより押入の前に立はだかる。

晴信 理不盡なる踏こみ沙汰、容赦は致さぬぞ。

神崎 何が理不盡ぢや、天下のお尋ね者をかくまひだて致す狩野晴信、同罪は免れぬぞ！

晴信 い、や、左様なものをかくまふた

覚えは更らない、またたとひその疑ひあるにもせよ、こゝは寺方ぢや、汝等不淨役人の思ひのまゝになると心得居るか。

神崎 黙れ、左様な役備むきの事にその方の指圖は受けぬ、者共構ふことはない踏み込め。

捕方一同 はつツ……………

なほも押しよせるを晴信、おすが争ふ。そのうち捕人一、二、すきを見て押入をあける。

源之丞既に切腹してことされてゐる態。

捕方一、二 やあ、これは……………

晴信 や(ト驚きかけより) 源之丞殿には早や切腹致されたか。

一同皆驚いて走りより死骸をあらため見

る。

晴信 (方を落し吐息をつき) あゝ、松前家の武運もいよ／＼つきたか。

神崎 え、残念千萬(晴信に)こ奴さへ妨けすば生け捕りに致したものを……………者ども晴信を引つたてい。

捕人 はつ。

ト、晴信の左右に立ちかゝる。すが あれ、どうなされます、先生に何の咎があつて引き立てなされます。

神崎 黙り居れい、澤源之丞をかくまふた罪は重い邪摩立て致すとその方も同罪に落るぞ。

すが はい、私は何ぼ罪になつてもかまひませぬ、先生に罪はござりませぬ、神崎さま、お願ひでござります、先生

だけはどうぞ、大目にお見逃がし下さりませ、お願ひでござります／＼。

晴信 あ、これ、すが、見苦しう取亂すものではない、義は泰山よりも重く死は鴻毛よりも軽し、武士に生れた身には是非もない事ぢや、潔よく罪に落ち

てまゐらう。

すが いやでござります／＼、先生に別れて私はこの先どうなるのぢやいなア

晴信 何事も天命とあきらめい、未練を申すな、そちは身共の女房ではなかつたか。

神崎 え、彼是と面倒な世迷言聞き苦しい、早く引つたてい。

捕人 立ちませい。

すが あれ、まつて、(捕手三にとりつく) 捕人三 え、離し居らう……………

強くふり放す途端脇がおすがの脾腹にあたる。

すが うむ——(と悶絶する)

晴信 や、おすがそちは……………抱き起さうとする。

神崎 え、何をいたす、早く起たぬか！

晴信 あいや、武士の情暫らく御猶豫下されい、拙者唯今こゝに拙き残した書

の事について、一言この女に申し残したい儀がござる。

神崎 え、ならぬわ、早く立てい。

捕方 早く立てい!

晴信 すりや、斯程に申しても、

神崎 黙れ、早う引立てい。

晴信 きつと心を定めた態にて捕吏一、二

三にかこまれ退場。

他の捕吏源之丞の死骸をかつぎ共に退場

神崎一人あとになり、おすがに氣を残す態。

この時下手より重助登場。

重助 旦那!

神崎 重助か。

重助 もう、かうなれば大丈夫、重助が

引うけました。

神崎 うなづいて見せて退場。

あとにて重助、おすがを介抱し活を入れる。

おすが息をふきかへす。

すが お、先生、先生、先生は……

重助 おすがさん。

すが お、お前は重助さん、どうせう

大事になつたわいなあ。

重助 委細は皆見てるやした、先生をあ

んなことにしたのは皆、お前さんでこ

さいますよ。

すが 何といはしやんす。

重助 さうぢやございせんか、お前さん

があんな格氣沙汰さへしなけりや、

源之丞とやらの正體も知れずにすんだ

ものを……

すが 重助さん、私はどうせうく。

重助 どうせうも、かうせうも後の祭さ

先生のお命はとも助かり様はありま

すめえ、とりわけあの神崎といふ奴は

日頃からお前さんに強い執心、それを

お前さんがまた、振つて振つて振りぬ

くものだから、いはゞ先生は神崎の戀

敵、助かるものでも助けちやおくめえ

すが え、そんな無茶なことがあるも

のかいなア、かりそめにも武士たるも

のが、そんな卑怯なまねをして……

重助 はて、それもむかうの勝手なら仕

様がねえ、もう諦らめておしまいなせ

え。

すが いえく、私は諦らめられぬ、何

ほ何でもこんなことで先生を殺しては

私は立つても居ても居られぬ。

重助 そんなら一體、お前さんどうする

つもりだえ。

すが どうすると云ふて……お、さう

ぢや。

立ち上りかけ出さうとする。

重助 あはて、とめる。

重助 これさ、お前さん、どこへゆく。

すが どこへゆくは知れたこと、死んで

この詫をするのぢやわいなア。

重助 ナニ死ぬ、なるほどそいつは一番

い、思案だ、だがねえおすがさん同じ

死ぬ氣なら、生きて居て死んだつもり

にさへお前さんがおなりなさるなら、

先生は助かるのでございませよ。

すが 何と云はしやんす、生て居て死だ

つもりになるとはどうするのぢやえ。

重助 はて、お前さん稼業がらにも似合

はねえ野暮をき、ますねえ、知れた事

だ、日頃の戀の念晴らし、うんと一言

いへばい、のさ。

すが 重助さん、お前そんなら私の身體

を神崎様にまかせといふのかえ。

重助 さあ、まあさういふのが本筋だがちつと疝氣筋へ痛みがまわつた。

すが そんなら一體誰のことぢやえ。

重助 はて知れた事、このおれの事だ。

すが え。

重助 おすがさん、俺の口からこんなことをいふのもおかしいが、お前さんは一年も前からほれてゐやした。

すが え、何をぬけくと、お前ようもそんなことが云へたものぢやなア。

重助 さアそれもほれたが因果なら仕様もあるめえ、今日まであの神崎めの手先になつてお前に彼は云つてゐたのはあいつにはちつと義理もあるから、いやとも云へねえ當座の小遣とり、やがては俺のものにするつもりだつたのさすが、え、けがらははしい、さうたやすくそなたらの自由になるおすがぢやと思ふてか、さらばぢや。

重助 へ、よせ、今更じたばたし

立ち上りかけ出さうとする、重助捉へて

たつておつつくもんぢやねえ、なアおすがさん、いやさおすがこの俺を見損なやがるな。

この以前より次第に日暮れかゝる様子にて、舞臺の光線を落す。

幕切れに至りて暮色蒼然たる趣きを出す事。

重助 今こそ假面をぬいでやらア、寺男重助たア世を忍ぶ假の名、まことは東海道、中仙道かけて誰知らぬものもねえ胡摩の灰の元締、獄門首の勘次とは俺がことだ。

すが そんならお前が胡摩の灰。

重助 やい、大きな聲を出すなえ、しがねえ空葉巾着切りから叩きあけて押込放火人殺と、兇状がだん／＼重なるにつれ、廣い世界にたつた五尺の身の置き所を持たず、この寺へかけこんでからまる二年おさまりけえつた神妙面に免じて兇状を知つてゐる神崎も目をこぼしてくれるを幸ひに野郎が祇園通ひの太鼓とまでとり入つた勘次さま

だ、事と次第によりや、随分力になりやすぜ。

すが え、もうそんなこと聞く耳は持たぬ、そなたに身をまかす位ならいつそ一思ひに殺してたも。

重助 殺してほしけりや、いつでも殺してやるが、そこを思案しねえと云ふのさ、同じことなら殺された氣になつてこの勘次の女房になつてくれりや、俺ア生命にかへても暗信を助け出して見せる、それともお前がどこまでも剛情ばるなら暗信はこのま、見殺し、その上お前もたゞはおかねえ、どつちにころんでもお前からだは勘次が貰つたのだから、とつくりと考へて返事をしなせえ。

すが え、わたしやどうしたらよいのぢやいなア。(と泣く)

重助 なアおすがさん、俺程の悪黨が、こんなことを云ふ柄でもねえが、戀といふ奴はあじなもだぜなア今でこそ本當の事を云ふが俺アお前といふもの

を知つてから、急に後生氣が起きて来たんだぜ、俺だつて何も腹からの兇状持ちやねえ、三河在の百姓の子に生れて、親は相當の田地持だが百姓が嫌で江戸へ出て商買の見習ひに入つたのが身の崩れはじめ、それからけふまで二十年、地みちに働いて居りやあ今頃は押しも押されぬ男になつて居たろうと思つて見ても最う晚いがせめて人間に生れた冥利には三日でもお前のやうなものや女房にもち旦那暮しがして見たくなつたのだ、俺ほどの者にかうまで見込まれたのがお前の不運、晴信をあんな目に落した罪にほしとあきらめて俺のいふことをきいて下せえ……なあおすがさん、……え……おい……どうしたんだ、……なぜ返事をしねえのだ。

すが (決然と) 重助さん、そんならお前きつと先生を助け出せるかえ。

重助 うむ、その事なら心配するな、お前を種にすりや神崎を欺まし込む位は朝飯前の事だわな。

すが え、私を種に神崎をだますとわえ重助 知れた事だ、晴信を助けて下さりや、おすがはお前さんの云ふことをきくと言ひ込めば四の五はねえ、さうしておいて俺ら二人はかけ落ちだ。

すが え、まアそんなことをしたらまたあとで先生の難儀になるではないかいなア。

重助 なアに、大丈夫だ、俺とお前が神崎をだましてにけたとなりや、恨みはお前と俺にかゝつても先生にはお構ひなしぢやねえか、なアにまかりちがへば、行きがけの駄賃に神崎を叩き斬つてしまはアな。

すが おまへ大丈夫かへ。

重助 大丈夫だよ、大船に乗つた氣で居ねえ……といふがお前それぢや俺のいふことが得心なんだな。

すが え、……さア、……それは……

重助 まだ、ぐづく云つてるのか。

すが い、えな、重助さん、そんならお前妾をだますのではあるまいな。

重助 俺も男だ、一旦引うけたからには命がけだ。

すが 證據を見せて下さなせ。

重助 ナニ證據だ?

すが あいなア、その證據にはまづ先生を助け出して下さなせ、その上でならどうなりと……

重助 おつとその手は喰はねえぞ、そいつはおれが神崎に用ひるのだ。

すが おかしやんせ、もし私がお前をだまさうものなら、その時こそは對手は役人と悪黨のお前、先生も妾も無事でゐられやうかいなア。

重助 なる程、それも理屈だ、よしさうきまれば一刻も早く仕事にかゝろう。

そんなら、おすがさん、きつとだせ。(ト手をとる)

すが お前こそ、きつとぢやぞえ。

重助 へ、うれしい言葉をきくものだな

ア、は、は、は。

おすが横をむいて涙をふく。

幕



第二幕目(大詰)

登場人物

- 村の者 一 (右田三郎)
 同 二 (八百藏)
 同 三 (扇若)
 茶店女房おきよ 實ハおすが (魁車)
 村の年寄 新兵衛 (蝦十郎)
 編笠の武士 實ハ前髪の源次 (吉三郎)
 亭主 善吉 實ハ獄門首の勘次(重助)(延若)
 狩野 野晴 信 (福助)

丹波福住村、峠茶屋

上手よりに茶店。

その下に床几二三脚、村の者二人休んでゐる。一人寝てゐる

村の者一 おい作よ、さアゆかうかい、大分長いこと油をうつたぞよ。

村の者二 何ぢや寝てるのか、かぜをひくぞ、さア起きたく。

村の者三 む、(と起きながら)あ、ーあんまり日當りがよいのでよい心持に(うとうと)としてしまふた。もう

何時ぢや。

村の者二 もうおつつけ八つ過であらう秋の日あしは釣べ落しぢや、ぐづぐしてゐると日が暮れるぞ。さあ行かう。

茶店の女房おきよ(實はおすが)登場。

きよ あれ皆さん、もうおいでなされますか、まだお早いではござりませぬかどうぞ御ゆつくりなさりませ。

村の者一 いやアこれはお内儀、相變らぬ美しいことぢやな。

きよ あれまた、そのやうにひやかすものではござりませぬわいなア。

村の者二 いや、お前がこゝへ見えてからといふものは福住の村は大騒動ぢや、天人が山へ下りた、それ見に行け行けで、押すな、の大繁昌でござらうがな。

きよ え、何をじやらくとあほらしいこんな人通りもない山中の一軒屋、たまには村の衆でも来て貰はねば鼠にひかれてしまひますわいなア。

村の者三 さアその鼠においらもなつて

見たい、内儀のやうな美しいのを、こんな所へ置いておくのは、何と思ふても惜しいことぢやなア。

村の者一 これ、そんな事をいふと今に御亭主が歸つて見えたら大騒動ぢやぞよ、(と額に角の眞似をする)

村の者二 ハハ……何の、そんな心配するなえ、作十如きが何を云はうと、石に頭つきもつて行くやうなものぢや、なアお内儀、さうではないか。

きよ ホホ、……またあんなあほ口を云はしやんす。

村の者二 い、や知つてゐるぜ、内儀と御亭主はかけ落者。

きよ エ、

村の者三 ハハ、……そのやうに吃驚せいでよい、村の者は皆さういふてゐる、成る程、竹の柱に茅の屋根、手鍋さけても、とはあの事ぢや、互ひに思ひ思はれてまゝならぬ世をまゝに暮すとは、扱ても羨ましい夫婦仲、村の手本ぢやと申しますわいの。

しま あれまアあほう云はんすないなあ村の者三人 ハハ……さア行かう。

村の者一 お茶代はこゝへ置きます。きよ 有難うござります、どうぞお静かに……

皆々上手へ退場。

下手より、村の年寄り新兵衛登場。

新兵衛 お、内儀。

きよ お、誰かと思へば新兵衛さま、さあどうぞおかけ下さりませ。

新兵衛 はい、ありがたう。

腰をかける。

おしま内へ入り茶をくんでもつて出る。

新兵衛 ときに善吉どのはまだ戻らしやれぬか。

きよ はい戻りませぬが、何ぞ急な用でもござりますか。

新兵衛 いや、そんな用ではない、實はいそがしいのに善吉殿を篠山の城下まで無駄足をふませたのが氣の毒で斷りに來ましたわいの。

きよ へ、無駄足を仰しやりますと。

新兵衛 あの、それ、今朝持たせてやつた手金の十兩、あれはモウいらぬことになつたのぢや、もつと早うわかると善吉どのに辛度い目をさゝずに濟んだものだ。

きよ へえ、さうするとあのお前さまがお金まで出して、こちらの善吉殿にさしてやらうと仰しやつた、花菱屋といふ料理茶屋は、はや餘所へ賣れてしまふたのでござりますか。

新兵衛 何のそんないやな話ぢやない、結構な話ぢや、おしまどのも喜ばしやれ、知つての通りあの家は御亭が死んで賣り物には出してるが、何せよ篠山の御城下で第一の繁昌な料理茶屋ぢや、譲りの金は高いが、善吉があとをすれば損はせまいと私が見込んで、世話したのぢや、何とまあ都合のよい事には、あれがこちらの村の名主殿の分家筋に當る家での、わしが世話すると名主殿がきかしやつた所から今の先、使ひが見えて、善吉がするなら手附は

いらぬ、譲り金は一文もまけぬかはりには、今すぐ金を貰はいでも、商賣始めてから、なし崩しでよいと、まあこの上もないよい話ぢや。

きよ へえ、それはまあ願ふたり叶ふたりでござります、善吉どのも戻つて聞かしたつたら、どのやうに喜ぶことか

知れませぬ、然しそんな話は知らずに行つてゐる事故、お借り申した十兩はむかうへ置いて來るかも知れませぬな

新兵衛 さあ、それが生憎くと、先の家内中、昨夜から名主殿の家へ來てと

つてゐるのぢやといひ、善吉どのが行つても先は不在なら持つて戻りませうこれがほんまの無駄足といふものぢやつたな、もつと早う知れてゐたら、どのやうに助かつたか知ればせぬ。

きよ いえ、こんなまんのよい無駄足なら、何ほふんでもよろしうござります。

新兵衛 ハハ、……ちがひなしぢや、然し、斯うまんよう行くといふのも、

善吉どのが正直で眞面目によう働く故ぢや、その上辯口は立つ、腹はしつかりしてゐる、ほんにこんな山の中に置くのは惜しい男ぢやと、村中の評判ぢやわいの。

きよ あれまあそのやうに仰しやつて下さりますと冷汗が出ますわいなア。

新兵衛 いや、ほんまの事ぢや、さうなればこそ私はじめ名主殿まで、あ、して力を入れて下さるのぢや、

きよ その御親切は死んでも忘れは致しませぬ。

新兵衛 さう云はれると今度はこつちに冷汗が出る、ハハ、……：そんならおしまどの、善吉どのが戻らしやつたらお前からよろしう斷り云ふておいて下され、わしはこれでお暇ませうわいの。

きよ まあ、およろしうござりませぬかお茶でも一ついれませうわいな。

新兵衛 いや、まだ外に用事もあつてさうはして居られぬ、そんならさらば

ぢや。

きよ 左様でござりますか、お忙がしい所を種々有難うござりました。

新兵衛、下手へ退場。

すぐ上手より編笠をかぶつた武士登場。

武士 ゆるせ。

きよ はい、おいでなされませ、どうぞ御一服遊ばしませ。

武士 腰をかける。

おきよ、茶煙草盆など揃へて出す。下手より亭主善吉（實は獄門首勤次）手に大きな栗の籠をさげ登場。

善吉 おしま今戻つた。

きよ お、善吉どの、戻らしやんしたかさぞ辛度かつたでござんせう、今の先新兵衛さまが見へて、お歸りなされたが、お前會ひはせなんだかえ。

善吉 新兵衛さんには今そこでゆきあつて話のあらまはしは聞いた、すぐこれから新兵衛さまの所へ行かなくちやならねエが道でこんなものを貰らつて荷厄介になるから置きに戻つて來た（ト栗

の籠を指す)

きよ まア仰山な栗をどつさしやんした

のぢやえ、

善吉 小野村の太兵衛さんの前を通つたらお前がすきだから持つて歸つてやれ

といつてきかねえのだ、荷物になるから大きに迷わくに思つたが、親切にいふものをたつても斷れず、おかけで大きに汗をかいたぜ。

きよ ほゝゝゝ、それはまた御苦勞な、親切といへば新兵衛さんのお話も此上

もないよい都合になつたさうな、私も

きいて喜んでゐますわいなア。

善吉 さアその話でこれから新兵衛さんと一しよに名主様のところへゆくのだ

一寸顔や手をふきてえのだがお前手拭をしほつて来てくんねえな。

きよ あいゝゝそんなら一寸まつていやしやんせ、栗はあつちへもつて行きませうわいな。

おきよ栗の籠をもつて退場。

以前の武士、善吉の傍へよる。

笠を取りながら。

武士 おき。

善吉 え、

と、驚き見て。

善吉 や、手前は源次ぢやねえか。

武士(源次) 兄貴、變つた處であふもの

だなア。

善吉 (やゝ狼狽氣味で) 驚いた、まさか

お前にこんな所で逢はふとは思はなかつた。

源次 俺だつて御同様だ、そして何か兄

き、今そこにあるたのはお前の内儀かえ

善吉 むゝ。

源次 さうか、悪いことは出来ねえもの

だなア、俺ら姐御を知つてゐるぜ。

善吉 え、どうして知つてゐる。

源次 思ひ出せば三年前、御同様にいそ

がしい身體の仕末に困り、お前をたづねて京へ入り、大源寺へかけこまうとした門前で、ふつとゆきあつたのが今の姐御だ。

善吉 え。

この時、おきよ濡れ手拭を一筋盆にのせて出る。

きよ あいお待ち遠うでござんした、あ

のお客さま、熱いお湯で一ツしほつて参りました。あなたもお顔なお拭きなさりませぬかいなア。

源次 (急に武士になり) 左様か、それは

忝ひ、亭主然らば借りのぞよ。

善吉 へえ、どきまぎしながら) さアど

うぞおつかひなすつて……

自分も手拭を取りながら、おきよと源次

の顔を見較べてゐる。

おきよは源次を知らぬ態。

善吉 なアおきよ、俺腹がへつてゐんだ

が、中途半ばな時刻だから、何も出来

ぬえな。

きよ さいなア、お前の辰りがこのやう

に早いと思はなんだ故、まだ支度は出来てないが、暫くまつてゐるやしやんすなら、すぐにもこしらへやうわいなア

善吉 さうか、こさへてくんねえな、店のことは俺があるからいゝやな、へゝ

お客様一寸嬢を失禮さしていただきます。

源次 あ、よいとも、自由にしやれ。

きよ そんなら御免下さりませ。

と退場。

善吉 (おきよを見送つて) 彼奴はお前を知らねエやうだな。

源次 知るも知らぬも、ちらつとゆきあつたばかりなのさ、ところがその時俺

がよせばい、ものを姐御のさしてゐる

簪に眼がくれてすうとしたものだ

善吉 馬鹿野郎手前も前髪源次といやア

ちつとは人にも知られた悪黨ぢやアね

えか、けちなものに眼をつけやがるな

源次 全くだ、笑はれても仕方がねえが

魔がさしたとでも云ふんだらうな、と

ころでそれをまたどこにはりこんでる

やアがつたか、手先の野郎どもに見つ

けられ、御用と来たものだから、おら

あもうすつかりあがつちやつて、とう

とうふんづかまつてしまつたのよ。

善吉 意久地のねエ野郎だな、でもよく

またかうして娑婆へ出られたのう。

源次 そこいらは源次だアな、上方の木

ツ葉役人の責にかゝつて恐れ入るやう

な男ぢやねエ、種があがらねエものだ

から、とうく二年あまり、もつそう

飯をかつくらつた丈でこの有様よ。

善吉 さうか、然し相變らず武士の眞似

はやめられねエと見えるの、だが手め

えの二ツ名の前髪はもうやめたのか。

源次 ひやかしちやいけねえ、さういつ

までも通用しねえわさ、頭髪と一しよ

に悪事の方も元服だ、此頃の源次の腕

なら、兄きに見て貰つても耻かしくは

ねエつもりだ。

善吉 馬鹿野郎、そんなことが自慢にな

るものか、悪いことは云はねえ、てめ

えもモウい、加減に足を洗つちやどう

だ。

源次、ひどく納まるぢやねえか、見りや

野暮つてえ風俗から暮しむき、兄きは

一體どう風が變つたのだ。

善吉 おらアもう音の勤次ぢやねえ、こ

んな草深い山中のしがねえ茶店渡世だ

が名も善吉と實直に改めて生れかはつ

た氣でゐるんだぜ。

源次 ぢやアもうすつかり改心したとい

ふのかえハハハ、こいつは笑はせや

がらア、人をかつぐのも休みくにし

なせえ。

善吉 てめえには俺の氣はわかるめえな

……なア源次、てめえ女に生命がけで

ほれたことがあるか。

源次 兄き、お前どうかしてやアしねエ

か。

善吉 おいらかういふ生れつきなんだな

十七の年に主人の金をつかひ込んで、

悪事のいろはを習ひはじめたのも女の

ためなら、四十に近い今日、悪事とい

ふ悪事を根からぶつ切り思ひ切つたも

女のためだ。

源次 かう、かう、い、加減に白ばつく

れねえな、お前が京からふけしなに役

人の神崎三十郎と、狩野何とかいふ書

かきの武士を二人までた、き斬つた手

際なんざア。

と思はず聲高にいふ。

善吉 (狼狽して) シツ、静かにしろ!

と、源次を押へ、あたりを見廻し、聲をひそめ。

善吉 手前それを知つてゐるのか。

源次 知つてゐなくつてさ、今のお前の

小指は狩野とかいふ野郎のだらう。

善吉 それ程くはしく知つてゐるなら、

隠しはしねえ、だが、不思議だの、神崎のことはともかく、狩野のことまで

手前が知つてゐるやうとは思はなかつた

源次 悪事千里のたとへもあらアな、お

前狩野を夜中に大津から船で湖水へお

びき出し、水の中へ斬り込んでしまつ

たらう、あの時船頭にはばけてお前たち

をのせて行つた、大阪松におらア聞い

たんだよ。

善吉 しまつた、松の野郎、あれ程口ど

めして置いたのに、あの時野郎も一緒

にやつつけて置けばよかつた。

源次 そろく凄く本音をはくぜ、だが

兄貴、お前も一ツや二ツの凶状持ちや

あるめえし、狩野の事だけをどうして

そんなに氣にやむんだ。

善吉 ム、それにはちつとわけのある

ことだが。手前にそれを知られてゐる

としたら――

と考へ込む。

この前におきよ出る。

源次 知らずに善吉をのぞき込む。

源次 おかしいな、どうしたんだよ、兄

き、急にふさぎ込んだぢやねエか。

と、おきよを見て憮りし、慌てる。

源次 ム、なに、……その、……兄貴

がどうか致したのかな。

善吉 てめえ何を云つてるんだ。

源次 (あわて、むかうにおきよがゐると

いふ手真似)

善吉 エ、(とこれも慌て) へい、あの

その旦那様でございましたかへへ、

……

きよ ホホ、……おかしやんせ、もう

はけてゐるわいなア。

善吉 え、(同時に)

源次 え、

きよ 何やら聞きなれぬ物言ひと思ふて

ふつと見たら、お武士さまで片足あけ

て、巻舌で喋つてぢやわいなア。

善吉 ぢやア、てめえ今の話をみんな聞

いたんだな。

きよ さいなア、話の筋はわからぬが、

お武士がお前を兄貴とよんだり、お前

がお武士にてめえなどといふことがご

さんすかいなア。

善吉、おきよは何も知らぬからまづ安心

といふ思入れ。

源次 こいつは失敗つた、兄貴どうしや

う。

善吉 ばれたら仕様がねエ、こいつは前

髪源次といつて昔の仲間うちさ。

源次 姐御お初にお目にかかりやす、兄

貴には随分お世話になつたものでござ

りやす。

きよ 左様でござりましたか、さう仰し

やれば私もお前さまを、どこやらでお

目にかゝつたやうな……

源次 エ、……(と善吉と顔見合す)

きよ それに、何ぢややら、狩野の事を
氣にやむとやら、やまぬとやら、仰言
やるのが小耳に入りましたが、京の大
源寺へでもお出入りなされてゐたので
はござりませぬか。

善吉 (少し狼狽して) なにさくさうい
ふわけぢやねえ、こいつにわかれたの
は五年も六年も前のこと、久方振りで
こゝで逢つたをしほに、おれの改心話
しをした序でに、狩野先生にはすまね
え、ことをしたと、おれがくやむのを
源次がいつてゐたんだわな。

きよ 何ぢやいなア、そんなことお前、
誰にもかれにも喋つてよい事かいなア
善吉 それは、わかつてゐるが、つい昔
の罪を思ひ出すと出るのさ、なアおき
よ……ぢやねえおすが、狩野先生は何
だつて病氣なんかにとツつかれて(と
源次にのみこます) 死になすつたんだら
う、せめて先生さへ生きてゐて下さり

やア、お前とかうして夫婦になつてゐ
たつて、こんなな寝ざめが悪くはある
めへ。(と意味ありげに源次の方へ云ふ)

きよ ほ、随分後生氣にならしやんした
なあ、私はまた先生が生きておいでな
されたら、かうした生活は出来さうも
ござんせぬ、おかくれなされたと思へ
ばこそ、あきらめがついたのぢやわい
なア。

善吉 さうかも知れぬエな、お前とかけ
落したはなときちやア、お前は唯もう
人身御供にあがつたやうな仕むけばか
りで、俺アどの位いてこつつか知れ
やしねエ、酒もやめた、悪事もやめた
皆お前の心づくしだつたのだが、お前
は見むきもしなかつたぜ。

きよ ほんにお前の云はしやんす通り、
私や人身御供のつもりでゐたわいなア
でもその後先生が病氣でおかくれなさ
れたと京からのたよりをお前が見せて
下さしたので、私もすつかり観念し
てしまふた、観念してしまへば不思議

なものぢや、もとは悪人でも、改心し
てせつせと働くお前の甲斐性が、だん
だんいとしうなつて来たわいなア。

源次、兩人の話を聞いてすべてを合點し
たこなし。

源次 おつともうい、その邊からは姐
御、お手柔かにお願ひ申しやす。

きよ ホホ、これはお慮外な、も
うそんな話はやめて、それよりかお前
(と善吉の方へ) 支度が出来てゐるが、
久し振りで源次さんとやらも御一緒に
どうぢやいな。

源次 いや、お志は忝けねエが、兄き
俺アもうゆくとするぜ。

善吉 まあい、ぢやねエか、ゆつくりし
て行きねエな。

源次 いや、さうぐづ、いてもゐられぬ
え、大分日足もかはつて来たやうだ、
それにお前、もう足を洗つたときいぢ
やア、馳走になつても咽喉につまら
な、ハハ……姐御、どうも御厄介にな
りやした。

きよ 左様でござりまするか、でもまだよ
いではござりませぬか。

源次 有難うございます、時に兄貴、さ
いぜんからお前の心意氣を聞いてゐり
やア、まア俺とお前とはこれが一生の
わかれになるかも知れねえ。

このあたりより舞臺の光線次第に茜色と
なり暮ぎれにはもゆるが如き夕陽の色を
出すこと。

善吉 さうよなア。

源次 そのわかれに一言云つて置きてえ
ことがあるんだが聞いてくれめへか。

善吉 何だかひどく改まつた言ひ草だが
聞かうぢやねエか。

源次 む、だが、姐御の前では一寸云
ひにくいんだが。

きよ あれ、何の御違慮がいりませう、
私が聞いて悪ければ、あちらへまゐつ
てのませうわいなア。

源次 へえどうもすみませんが、ぢやア
姐御は暫くあちらで。

きよ あい、そんならお前(と善吉の

方へ)、御用が濟んだら……。

善吉 む、(うなづく)

おきよ退場。

源次 兄き、お前も随分タガが緩んだな
ア、……狩野の一件をばかに氣にする
わけも、さつきからの話で俺ら凡そ合
点したが、その意久地なさぢやお前も
もとの悪黨にやなれねエな。

善吉 おらもうその氣はねエ、地みちに
やり出して見りやア、またそれで面白

いものだ。

源次 ヘン、ほれた女といちやついて暮
せる氣か、世話はねえ、まアい、や、
お前がそれ程足を洗ふ氣になつてゐる
なら目出たい事だ、どうせ相當の御挨拶
があるだらうな。

善吉 何だと。

源次 ねえ、兄貴、たんととは云はねエ
挨拶してくんねエな。

善吉 やい、むこう先きを見て物を云へ
俺を誰だと思つてやがる。

源次 誰も彼もあるものかえ、足を洗や

アお前はたゞの男だがまんざら仲間う
ちの作法のわからねエ男でもねエ筈だ
善吉 うぬ、因縁をつけやアがらんんだな
源次 何が因縁だ、いやなら無理にほし
いとほいはねエ、その代りには兄貴……
……ぢやねエ獄門首の勘次、てめえの悪
事の洗ひざらいは……
と、大きな聲を出す。

善吉 やい、靜かにしろ……ふむ、てめ
へ暫らく見ねエうちに小ましな度胸に
なりやアがつたな、昔の俺なら手前の
やうな素丁稚にグウの音もはかすこと
ぢやねエのだが、……仕方がねエ、こ
れをもつて行け。

懐から十兩投り出す。

源次 さうか、さう早く話がわかりやア
文句はねエ、貰つて行くぜ、ふむ十兩
か……せめてモウ十兩出しねエな……

善吉 つけあがりやアがるな、我慢しろ
前髪の源次が獄門首をゆすつて十兩せ
しめたといやア、仲間でどの位いてめ
への箔になるか知れやしねえ、い、み

やけぢやねえか。

源次 成る程それもさうだ、ぢやアまあ今度はこれで我慢をして、あと金は次ぎにしやう。

善吉 そんなに度々來られてたまるものか。

源次 まあい、やなぢやア兄貴、あばよ下手へ退場。

善吉 デツと源次を見送つてゐる。

この以前におきよ出て始終を見てゐる態この時善吉の傍にかけよる。

きよ お、お前、さぞ口惜しかつたでござんせうに、ようまあア辛抱して下さんなしたなア。

と、とりつくを、善吉拂ひのける。

おきよあつと倒れる、ひまに善吉家の中へ走つて入る。

あれ、お前どうとしやんした。

と、跡を追ふて駈け入らうとする。

出會頭に、善吉、勢ひこんで飛び出す。

手に脇差を持つて出る。

おきよとりつく。

お前そんなものを持つてどこへ行かし

やんす。

善吉 どこへ行くもあるものか、野郎を生かして置いてちやア……

きよ え、また地金を出さしやんすかそんなことをしたら、折角今日までの

改心も水の泡ではないかいなア。

善吉 い、や、俺らがこゝにゐると知つたからには、野郎のことだから、この

後ともたゞでは置くめえ、それこそ今迄の改心も水の泡、第一、今ゆすりと

られた十兩は、新兵衛さんが、思ひ思ふて貸して下すつた大切な金、今のお

いらにとつては大金だそれまで無くして一日もこの村に生きてゐられるかえ

きよ その心が、りは尤もなれど、かう

なり行くのも皆お前の罪のむくひ、観念してあきらめしやんせいなア……

源次一人を殺したとして、お前の罪が消

えるでなし、どうせ一生逃けてあるい

て暮らす氣なら、この村ばかりに日は

照らぬぞえ、新兵衛さまのお金をかへ

す時はなんほもある、一時の不義理に

氣をやんで生涯の罪をまた一つふやさぬやうとつくり思案をして見さんせい

なア(ト無理に脇差をもぎとり投げ出す)

善吉 さう云はれ、ば一言もねえ、草紙

のやうによれた身狀の中は一人殺すも二人殺すも同じ氣だつたがお前とか

うして夫婦になつてまる三年の間神妙

に洗ひ淨めて暮らしてゐると今更よごすのが惜しい氣もする。

きよ よう云ふて下さんした、それでこそ私の難だお方、いづこの山の中、海

のはでもぢやわいなア。

善吉 は、、、因果同士の二人づれか

きよ お前、死ぬ時はきつと一緒ぢやえ

ほ、、、。

善吉 は、、、。

兩人寂しく笑ふ。

この時背るより深編笠の武士出る。

武士 重助、おすが久しいの。

ト編笠をぬぐ。

善吉 や、お前は狩野。

きよ あれ! 先生!

狩野 かはつた所で會ふものぢやな。

きよ 先生、あなたはおかくれなされたのでは……

狩野 はて、身共は死にもせねば病ひも

せぬ、唯一度はこの重助めに大津の湖水で殺されやうとした事はある……

きよ え、

善吉 ぢやア、お前さん、あの時半命を助かつて……

狩野 は、

、これ、身共も武士ぢや、そうやす／＼とその方の手にかゝると思ふてゐるか、後ろにたゞならぬ

氣はひ、ふと見ればその方が刀をぬいて斬りかゝる様子、思はず身をかはせば狹い船のことゝてそのまゝ、湖水に落ちこんだが折からの暗を幸ひにそのま

ま泳ぎのがれたのを斬り落したものと

思ひつめ安心致して居つたはその方の不覺ぢや。

きよ え、さてはお前、そんな大それた事をして私をばようもまアだまして

るやしやんしたなア。

善吉 さあ、それは、……うむ、……え

えもうそれが知れたら百年目だ、獄門首の勸次、もつ年貢の納め時だ。なる

ほどあの時お前さんを斬つたつもりが一向手應なくやり損じたと思つた故そ

こら中お前さんをさがしたが到頭知れ

ずじまひ、どうせ廣い湖水の真中助かり様はあるめえとタカを括つてゐたが

やつぱり悪いことは出来ないものだ。俺らもう観念した。先生、すつぱりと

やつておくんなさい。地に座し、首を叩く。

狩野 これ／＼身どもはその方を討ちに来たのではない、なる程最初は憎い奴

尋ね出して一刀兩斷とは思ふたが、よくき、訊せばその方の身狀、悪事が稼

業の輩ときく、左様なものを對手に武士たるものがいつまでも意地を持つた

どは却つて恥辱と存じた故、そのま、うち棄ておいた、この度計らずも丹波

篠山侯よりお招きをうけ、京より山越へに罷り越す途中、何けなく見ればそ

の方のかくれ家、舉動怪しき武士と何かある様子故、立ちきいて居れば様子

もだん／＼と相わかつた、その方程の悪黨がそれ程改心致したは感服の至り

この晴信は最早何一つうらみを残さぬぞ。

きよ 先生、お許しなされませ、私の淺

はか、ら先生に一方ならぬ御迷惑かけその上あだした男とかやうな身となりまして、合はす顔もござりませぬ。

狩野 いや／＼そちの志はよく判つてゐる、身共の生命、重助の心、二つながらに救ひ助けたそちの苦勞、察するに餘りある、此の上は重助と仲よく末

とゆるがよい。

善吉 エ、ぢやア私をゆるしておすがと

夫婦に——先生、それはほんとうでございませうか有りがたうございませう／＼

おすが、先生もあ、仰有つて下さる今日までお前をだまして來たのは悪かつ

たが、それもお前の心をつちへ向けてやうための淺はか、らだ、したことは

悪いが心根は可哀想だと思つていつまでも俺と夫婦でゐてくんねえ、え、おれが一生のお願ひだ、頼む……

きよ あい、お前のいふ事はようわかつてゐるが勘忍して下さんせ、私の心はこれこのやうに……

傍にあつた以前の脇差をぬき咽喉につき立て苦しむ。

善吉
狩野 } やツ

かけより介抱する。

狩野 え、何のための自害ぢや。

善吉 え、てめえ、何を短氣を出しやあがつたのだ。

きよ 善吉、いや勘次どの勘忍して下さんせ、私や、私や、やつぱり先生があきらめられぬわいなア。

善吉 な、なんだと、それぢやアてめえどうあつても……

きよ 死んでおわび……勘忍して下さんせ、か、勘忍して……先生……先生……落ち入る。

狩野 え、心のせまい奴、これ、しつかりせい、これおすが、これえ、はやくときれたか……残念なことを致したなア。

この間、善吉、おすがの顔を見詰めておたが突然足をあげて死骸を蹴る。

狩野 これ何をいたすのだ、死屍を足蹴にするとは何たる無法な奴だ。

善吉 やかましいやい。

狩野 ナニ。

善吉 やい、てめえよくも俺の女を殺しやあがつたな。

狩野 たはけものめ、氣が轉倒致して居るな。

善助 何をぬかしやあがるんだ、うぬが來やあがつたばかりに、三年の苦勞も根こそぎだ、うぬ、どうするか見やあがれ。

下に落ちた脇差をとるなり狩野に斬つてかゝる。

狭野 無禮者ツ（と、あしらひ乍ら）うぬ改心致したなどとはまつかな偽り本性

を現はしおつたな。

善吉 洒落くさい、御詫をつきやアがるな今日からはまた此世に用のなくなつたおれの生命、もとの宗旨に改心の逆戻りだ、覺悟しろ。

死もの狂ひに斬つてかゝる、狩野もぬき合せて戦ふが重助の勢ひ烈しく、狩野ややともすると斬り立てられると、重助、おすがの死骸につまづき、よろ／＼となる所を狩野斬る。

善吉 了つた、うぬ、斬りやあがつたな

狩野 覺悟ひろけ！

刀をふりかぶる。
重助、あはて、おすがの死骸を抱きよせ

善吉 さあ、斬れ、さあ、いくら斬つてもおすがは手前の手にや戻りはしねえおすがはおれのものだ、む、ざまアみやアがれ。

おすがを抱き乍ら脇差で自ら腹をきる狩野驚いてふりあげた刀をおろす。

善吉 へ、へ、へ、へ……。

幕



京 屋 十 二 姿

木 村 富 子

鶯は虚無僧が吹く尺八の音に誘はれて近う來しかな

八重桐がありし廓の物語りながめてあれば心和みぬ

紛雪ふる春の夜なれば上りのお七をおもひまろ寝こそすれ

降りしきる櫓の雪に結綿の赤き鹿の子が濡るゝいとしさ

緋おどしの鎧の袖によりそへばいとまばゆく見ゆる時姫

追憶もこき紅の袖見れば佗びしからましおわさの心

片思ひの飽は悲しわかうどが血潮盛りたる貝のさかづき

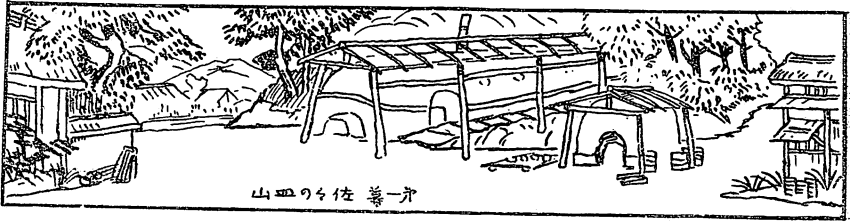
緒の切れしざうり片手に馳せ入れるお弓の瞳えこそ忘れぬ

果敢なけにたゝみ算する梅川のその横顔のしろき悲しみ

憂き戀をなけく小春のため息とおもふ十夜の街の狭霧は

秋の風暖廉わくればいたましきお俊の姿まほろしに見ゆ

袖秋の三味線に降りいたいけなお君に降れば雪もはかなし



中座十月興行上演

佐々の悪魔
瀬戸の窯神

明暗縁染附

二幕 三場

大森痴雪

場割

人物

序幕 肥前國佐々の皿山

二幕の(一) 瀬戸民吉住居の場

同 (二) 同 窯場

時

文化年間

處

肥前國——佐々の皿山

お千鶴 (燒物師福本仁) (福助)

嘉藏 (お千鶴の子) (小鷹)

中里角右衛門 (皿山代官の手代) (市藏)

彌次郎 (燒物師) (吉三郎)

彦兵衛 (蝦十郎)

甚之丞 (箱登羅)

友藏 (右田三郎)

茂右衛門 (市昇)

勇助 (鷹藏)

その他燒物師大勢

序幕

佐々の皿山

肥前北松浦郡佐々村にある松浦藩御用の平戸焼磁器の窯場。

正面、中央から上手へ山の斜面を利用して築造した三川内流の上りかけの丸窯。その前に煙出しのついた小型の繪附け窯、上手側面に轆轤場の一部、下手側面には薪納屋、秣場等の一部が見える、窯の後は山の斜面で屋根がこの丘上から佐々浦の濱邊へ向つてなだれてゐる體、四邊には焼物用の器具、薪、藁告などが雜然と取ちらされ臺の上には焼上つた素地の磁器が列べられてゐる。

秋の日の午後。

丸窯は一晝夜近くも焚き続けられた體、陶工甚之亟が尙火口に松薪を投込んでゐる。一方繪附け窯は、もう焼上つた體で、同じく勇助、茂右エ門、友藏の三人が、二三名の丁稚を使ふて焼成の磁器を取出してゐる。上手から彦兵衛が出て丸窯の覗きの小竈か

ら火勢を見る。

彦兵衛 (甚之丞に) もうあがりか。

甚之亟 あと、これし焚いたらとめちや。

彦兵衛 今度の窯も上々らしかのう。

甚之亟 お、よかばい、よかばい。

甚之亟は薪を投込み続ける。

彦兵衛は錦手窯の方へ来て焼上つた見事な色繪の香爐を取り上げて眺める。

彦兵衛 どうかい、このよかことは、胴の圓味といひ、脚の踏張りの力強さ、

遣がば仁左衛門どんちや、所詮真似も出來んのう。

友藏 その仁左衛門どんも、跡取りの小助どんも、彼奴ゆえに永牢のお仕置ち

や、その香爐が仁左衛門どんの遺品と思ふにつけ、福本の入婚にまでなつて

平戸焼の祕法を盗み居つた彼奴が一層憎くらしか。

勇助 彼奴の憎くかことはいふまでもな

か佐々で名高い福本仁左衛門といふ立派な家があつた盗人奴が爲めに潰れてし

まふたのぢや。

茂右衛門 そればかりか、お千鶴どんといふ評判娘までなぐさみ者にさる、

子は出來る、極重悪人といふのは武藏のこことぢや。

彦兵衛 その式藏といふ名も偽名ぢやらう、筑後の柳川の生れといふ宿帳も偽物に違ひなか。

甚之亟 今思ふと彼奴のなまりは九州者ぢやなかばい、ありや砥部か、いや四國でもなかのう、どこやら生ぬるか所

のあるのは上方者に相違なかぞ。

彦兵衛 何にせえ、慘らしかは仁左衛門どん親子、後に残つたお千鶴どんもあ

の子も不愆なものぢや。

友藏 あの子が何の不愆かい、松浦家のお止め窯の佐々の祕法を盗んで逃げ居

つた奴の血筋と思ふと、俺共なあの子を見るたびに、びんたば叩かうことある。

彦兵衛 子供に罪はなか、むぞらしかよ

か子た。

友藏 そのむぞらしけな面が猶憎くかと

ぢや。

吐き出す様に云ふ。

甚之亟は最後の薪を投げ込み了り、窓から火勢を見た上で窯場から降りて来る。

甚之亟 さア、これで焚上げぢや、明後日には魂消るごたる、よか出来ば見するぞ。

下手の遠くから、だん／＼近く大勢の騒音が聞へる。

や、何か／＼。

皆下手を見る。

白磁に呉須薬で畫像を染出した踏繪を惡へた彌次郎を先きに、大勢の陶工が下手から出る、皆甚しく昂奮してゐる。

彌次郎 さア、踏め、佐々の皿山を大切に思ふものは皆踏め、踏んで／＼踏んつけてやれ。

踏繪を地上に置く。

『今切支丹奴』『馬天連奴』『悪魔奴』『大盗人め』など口々に罵りながら先を争ふて押し合ひへし合ひ踏まうとする。上手の鞆鹽場、下手の種場等からも大勢

出て来る。

待て／＼、さう一時では皆が踏み切らん先に踏繪が粉微塵になつてしまふ、まア待て／＼。

彌次郎は皆を制して踏繪を取り上げる。

彦兵衛 彌次郎そりや何かい。

彌次郎 まア見い、俺が新工風ぢや。

踏繪を彦兵衛に渡す。

彦兵衛 周圍に黒雲が渦を巻いて、頭に二本の角ば生して居るのう。

彌次郎、裏は返やして見い。

彦兵衛 (裏を見て) 佐々皿山の仇敵、大

悪人武藏の像。

彌次郎 切支丹の繪踏みのごと、彼奴を踏むのぢや、皿山の焼物師が残らず踏んで／＼大悪人の武藏を呪ひ殺す、そして山の者誰一人御法を他國へ渡すやうな不心得者の居らぬ誓ひを立つるとぢや。

甚之亟 よか／＼、ほんに平戸焼の秘法を盗んで逃げ居つた、彼奴はお國を狙ふ切支丹の邪宗門も同じぢや、貸せ、

俺も踏む。

友藏 俺も踏むぞ、今切支丹の武藏め。

皆が又騒ぎ立てるのを彌次郎がとめる。

彌次郎 この畫像を窯の前に埋めて、今から後仕事にかゝる度に踏むことにする、そしていつ／＼までも彼奴ば呪ふてやれ。

彌次郎は火口の前に土を掘つて件の畫像を埋めさせる。(正面だけ見へるやうに)

陶工の一 さア、これでよかぢやらう、恠うして置けばどれし、踏んでも破れはすまい。

皆が一時に寄つて踏まうとする。

彌次郎 待て、その畫像を第一番に踏ま

さにやならぬものがある。

彦兵衛 第一番に踏まさにやならぬ者と

は。

彌次郎 福本のお千鶴、身の不亂次から焼物の秘法を盗まれ、剩つさへ親兄を重い罪に墜した女、第一番にこの繪踏をして改心を誓はせざば、道が立つまい、孝が立つまい。

彦兵衛 でも、それは餘り慘らしい、子
までなした夫の畫像を踏ますとは。

彌次郎 何が夫、たぶらかされたのぢや、
なぐさまれたのぢや。

陶工の一 さうともく、お千鶴は今あ
の鎮守へ詣つてゐる。

彌次郎 俺も今見かけたからいふのぢや
誰ぞ行つて引張つて来い。

彦兵衛 待て、ぬしやこんけん折に自分
の意趣ば晴らさうといふのか、女を對
手に、そりや男のせんことぢやぞ。

彌次郎 いや、俺は故郷の爲めにする
ぢや佐々の皿山の爲めにするぢや、
おい、引張つて来い。

四五名の若者が下手へ走り去る。
引逃びに旅姿をした皿山代官の下役、中
里角右エ門が出る。

角右衛門 驕がしかく何事か。
彌次郎 繪踏みでござります、年々に切
支丹の繪踏のごと、今からこの皿山で
は武藏奴が繪踏を致します。

甚之丞 彌次郎どんが作つた武藏の像を

今これへ理めた處でござります。

彌次郎 角右衛門様、切支丹の耶蘇は磔
刑にかゝつたさうなが、皿山の武藏奴
はぬくくと日本の何處いろに生きて
居ります、磔刑は愚か、八ツ裂にもし
てやりたか奴ぢやござりませんか。

角右衛門 他國者を引入れて、御國禁の
燒物の秘法を盗まれたは福木仁左衛門
親子の過ちに相違ないが、皿山代官所
の俺ども、責はのがれぬ、憎い武藏奴
の奴の立廻つた天草から筑後の柳川を
驅け廻つて今戻つたが……

彦兵衛 手係りはござりませんか。
角右衛門 いや、大方彼奴が出生も、
彌次郎 知れましたか。

角右衛門 知れたでもなし、知れぬでも
なし、……

何か思ふ所あるらしく言葉を濁す。
又、下手が騒がしくなつて、以前の若者
がお千鶴とその子嘉藏を引立てんばかり
にして出る。

千鶴 何か知らんが訥して下され、人中

に顔の出さる、私ではござりません
彌次郎 お千鶴ち、さ繪踏ぢや、お前
が眞先に踏まにやならん。

千鶴 お、彌次郎殿、今頃繪踏とは。
彌次郎 文句には及ばぬ、それを踏むと
ぢや。

千鶴 (路繪を見て不審がる) これは何の繪
踏みでござります。

彌次郎 皿山の秘法を盗んだ大盗人の畫
像たい。

千鶴 え……
彌次郎 お前の親を、兄を、平戸の牢屋
へ投込んだ極重悪人の畫像たい。

お千鶴 悸として立ち縮む。
お前が踏んでその子にも踏ませにや、
お上へ濟むまい、親兄弟へ濟むまい。
お千鶴は嘉藏を抱き締めて泣く。

なぜ踏まぬ、お國の敵、親兄弟の敵の
武藏奴がそれほどまでに戀しいのか。

千鶴 縱令極重悪人でも、夫と定めたも
んがどう踏まれやう、ましてこの子に
親の畫像……が彌次郎どの、皆の衆も

どうぞ代りに私ば踏んで踏み殺して下さりませ。

彌次郎 よし、踏みきらんなら俺が踏みやうは教へてやる。おのれ大盗人、今切支丹め、轉びの武藏め、生きながら地獄の底に踏み沈めてくるぞ、(踏にじる)、さ踏め、踏んで皆の前で證を立てぎ、この皿山にや住まはれんごとならうばい。

大勢が喚聲を擧げる。

角右衛門 待て、繪踏は彌次郎がよか思付き、然し皿山の焼物師に二心のない證にこそすれ、今更らしう當の曲者が妻子に踏ませて何になる、それよりも彼奴を引捕へて罪の重さを見知らするが肝要ぢや。

彌次郎 さりながら彼奴の所在が知れますまいが。

角右衛門 武藏が最初にたよつた天草東向寺の住職天中和尚は、元尾張の出生と聞いた、すれば大方彼奴が故郷もその邊り、皆も聞け、中里角右衛門は役

目の手前、大小の手前、御國禁破りの曲者探索のお免しを得て、今から再度發足する、武藏の昔土産に提げざ、二度と皿山の地は踏まぬ、忝けなくも上から御扶持を戴く其方達、謹んで業を勵まうぞ。

角右衛門は云ひ捨て、行きかける。

皆意外に驚く。

お千鶴は取纏る。

千鶴 角右衛門様、夫はどうでもお前様のお手に……

角右衛門 御國禁破りのお仕置は今に始めぬ、遠くは京の籠屋久兵衛に繪唐津の祕傳を漏らした青山幸右衛門、近くは色鍋島の祕法を砥部へ渡した名工勇七が伊萬里街道の鼓阪に首をかけられたことはそちも知つてゐやう。

千鶴 あの鍋島の勇七と同じやうに。

角右衛門 それが定まる國法ぢや。

彌次郎 彼奴の首が佐々の高札場にかつたら、物人ないさぎいことであらうばい、ハハ、ハハ、ハハ。

千鶴は、泣き倒れる。
角右衛門は下手へ去る。

甚之丞 お見送りばせえ、お見送りば。

皆、角右衛門に隨ふて去る。

彦兵衛一人、錦手鞆の蔭へ残る。

お千鶴は起き上つて鞆前へ行き、踏繪を掘返へさうとしてザツと見る。

千鶴 御國禁破つた大罪……

追がに掘り得ぬ體、嘉藏は物淋しきを感じた體で四邊を見廻しながら泣聲に叫ぶ

嘉藏 お父しやまは……お父しやま、お父しやま。

千鶴 あ、嘉藏は、……私……

嘉藏 お母しやま、……私……
取纏る、

鞆の蔭から彦兵衛が出る。

彦兵衛 お千鶴ち、辛らかじやらうのう

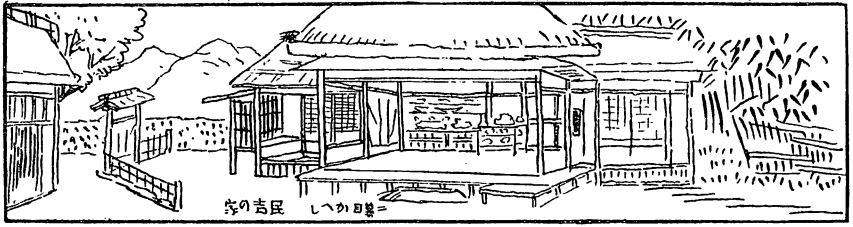
千鶴 これがなかなら、私や死んでしま

ひたい。

激しく泣く。

彦兵衛も眼を拭ふ。

下手から彌次郎が引返す。



時
文化年間——第一幕より一年餘の後

處

尾張瀬戸村

人

加藤民吉保賢	燒物師	(鷹次郎)
水野權平	代官	(延若)
惣作	天草の燒物師 (民吉の職人)	(長三郎)
文吉	江戸の繪附師(同)	(當之助)
お品	民吉の娘(盲目)	(雀右衛門)
お照	(民吉の娘盲目)	(敏夫)
お千鶴		(福助)
嘉藏		(小鷹)
中里角右衛門		(市藏)
卯兵衛	(瀬戸の陶工)	(齊五郎)
直右衛門		(卯十郎)
藤七		(延郎)
重吉		(昇鶴)
勘六		(鷹若)
治兵衛		(福三郎)

富右衛門	(莚平)
綱助	(鍛五郎)
富藏	(扇五郎)
彌右衛門	(右左治)
仁兵衛	(桂枝)
久米八	(政治郎)
其他陶工等	

第一幕

(一) 燒物師民吉の家

尾張瀬戸村北神谷の燒物師加藤民吉の住居、中央から上手へ二重の廣やかな部屋と障子屋臺、正面下手の押入れ全部を磁器の陳列棚に宛て、その上手は襖の出入屋臺の上手側に掛出しの竹縁、屋臺の下手側面に沿ふて土間と窯場へ通じる木戸、その下手に轆轤場を設け、九州風の蹴り轆轤が据附けてある。下手に葛暖簾を吊つたさ、やかな門と生垣、生垣のむかふに間近に通る禿山の崖が見えてゐる。春の日の午後。

燒物師藤七、重吉、直右衛門、卯兵衛、勘六、治兵衛、富右衛門、總助、富藏、彌右衛門、仁兵衛が主人の歸りを待つ體で、焼上つた磁器を見るも

の蹴鞠を試みるものなど皆喜びに落ち
つかぬ體。

民吉の女房お品、近所の二人の妻や娘數
名に手傳はして皆に茶を侷めるなど、い
づれも晴々しく立働らく。

品 さア皆さん、珍らしいはなけれど、
けふの心祝ひに搗いた餅一つあがつて
下され。

卯兵衛 や、これは忝けない、その祝餅
喰はうとて私達はいつの昔から待ち焦
れてゐたか知れぬ、なあ直右衛門。

直右衛門 全くぢや、有田や平戸の石焼
が羨ましい、瀬戸にもあ、いふ物が焼
けたら土地の衰微も取返せるものをと
幾代前から羨んでゐたか知れぬ、それ
が瀬戸民吉殿のお蔭でこの祝餅に有附
けたのぢや、さア皆筋ふて馳走になれ、
瀬戸はこれから繁昌するぞ。

皆餅を取る。

藤七 俺は持つて戻つてあやかるやうに

家中のものに分けてやる。

彌右衛門 私の子澤山で家内が多い、御

無礼ながら二ツ貰らひます。

品 餅はたと搗いてある、遠慮なふな
んほうでも持つて歸つて下され。

女房一 お品殿、嘸嬉しいことでごさら
うな。

品 あい、長い年月留守を預つた云ふに
云はれぬ苦勞も何所へやら、一時に消
えてなふなりました、ほ、ほ、ほ。

卯兵衛 さうとて、何にせえ、献上
の香爐は納まる、けふはまた改めてお
城へお呼出し、殿様へお目見得と云ふ
のぢやもの、昔は知らず私等の代、い
や私等の親爺の代々の方、こんな譽れ
なことは今が始めてぢや。

富右衛門 庄屋の唐左衛門殿も民吉殿を
正客にして瀬戸村總が、りの大振舞ひ
をせにやならぬと云ふてゐられたぞ。

藤七 初代藤四郎様のお祭と一緒にする
のぢやな、瀬戸中ひつくり返るやうな
騒ぎをやつてな、は、は、は。

窯場の方から天草の陶工惣作と江戸の繪
附師文吉とが争ひながら出る。

文吉 何を云やがるんだ、誰か何と云つ
たつて、あの献上の香爐は俺の繪附け
が肝腎なのだ。

惣作 いや生地が肝腎だい、親方が指
圖通りに生地をひいたはこの惣作ぢや
ぞ。

文吉 俺だつて親方が思ふ通りに描上け
たのだ、手前見たいな田舎者は引込ん
でろ。

惣作 俺はな、天草から親方に見込まれ
て上つたとぢやぞ、江戸は繁華ぢやら
うばつてんか、どうしてよか窯がある
かい、馬鹿らしか。

文吉 おや、此奴お江戸の悪口をいやが
つたな(打つてかゝる)

卯兵衛、藤七等引分ける。

卯兵衛 目出度い日に弟子同士いさかい
するとは何のことぢや、ど、ど、どたわけ
め。

文吉 なアに、喧嘩したかアねえんだが、
惣作の野郎め、親方と一緒に九州から
來たのを鼻にかけて仕事の自慢ばかり

しやがるもんだから。

惣作 おぬしこそ繪附けの自慢ばかり。

卯兵衛 もうよい／＼、いさかいても一生懸命仕事を思ふからのことぢや。

品 平素から餘り仲が好過ぎるのでつい嬉しい餘りのいさかひであらう二人とも、もう氣を取直して下され。

卯兵衛 は、／＼、これも目出度い一つぢや、さア二人とも笑へ／＼。

二人は顔見合せて高く笑ふ。

揚幕から焼物師久米八が走つて出る。

久米八 さア皆出迎ひぢや／＼、お代官が附添ひで、民吉殿は立派に大小を指してもう直き村の口へかゝられるぞ

品 まあ、民吉殿が大小をさして。

惣作 それぢや親かつさんな噂のあつたごと、名字帯刀御免になんはつたに違ひなか、いさぎいこつ、文吉、こぎ

やん嬉しいことはなかりう。

文吉 嬉しい所の騒ぎぢやねエ、俺嬉しくつて／＼涙がこぼれらア

皆は久米八を先に慌しく揚幕へ去る。

俺もかうしちやるられねエ、惣作あとを頼んだぞ、

行きかけるを惣作止める。

惣作 待て、御代官も御一緒なら、そこらほそめて、庭も掃かにならん行つちやならんぞ。

文吉 成程、親方の威勢のい、所を見てえが、仕方がねえや。

箒を取つて庭を掃き初める。

惣作は轆轤場をお品等は座敷を片附ける下手から旅商人に扮した中里角右エ門が出る、お品等は片附物を持つて奥へ入る

角右衛門 鳥渡お訊ね申します、この頃瀬戸で石焼物を焼き初められたお家は

こちらでございすか。

文吉 え、左様で。

角右衛門 或程あれが新規に出来た焼物でございすな。

屋臺に近づき陳列の戸棚を見る。

文吉 何か御用でございすかね。

角右衛門 私や中國邊の者でございすますが、焼物を仕入れに参つた所、今度尾

張の瀬戸で大層立派な石焼が出来たとの評判、田舎商人の手に合ふ品かどうか知れませぬが、せめてその新焼を見るだけでも見せて戴かうと思ひまして

文吉 え、そうですか、そりや感心によく尋ねておいでなすつた、あすこにあるのはほんの試し焼でね、まだ／＼素晴らしい奴がたんとありやすよ。

角右衛門 どれも／＼立派なものでございすな、一體瀬戸の焼物は土焼ばかりと聞いて居りましたが、當家の御主人は何處で石焼の御修業をなされたの

でございす。

文吉 それがそのなか／＼並一通りの苦勞ぢやねえんで、五六年も九州の方へ下つてね。

轆轤場で様子を見てゐた惣作が出て来る

惣作 そりや皆親方が心一つの工風たい南京焼の祕傳などは唐人の書いた難かしい本にもあるさうぢや。(眼で文吉を制す)

文吉 何も構ふことはねえぢやねエか、

遙々遠國から尋ねて來なすつたといふ心掛けのいゝ商人さんだ。

惣作 折角ながらこの品は一つも賣ることとはなりません。

角右衛門 ほう、商賣物ではござりませんのか。

奥からお品が出る。

品 遙々おいでなされてお氣の毒ながらこの新焼は漸うお上の御檢分が濟んだばかり主人は今日お城へお呼出しになり、殿様へお目見得仰つけられたやうな次第で、いづれはお國の掟通り名古屋の間屋衆の手から諸國へ賣出されます、その節には精々お買取り下さるやう今からお頼み申して置きます。

角右衛門 ふう、御主人は殿様にお目見得。

文吉 苗字帯刀御免になつてもうそこへ歸つておいでなさるんだ、國への土産話にどんな威勢のものか見物して行きなさるがい。

角右衛門 左様か、御名譽なことござ

りますすなア……御慮外ながら火を一つお借り申します。

文吉 おやすいことだ、さアおつけなせえ。

菘盆を傍へ置く。

角右衛門はさりげなく菘を喫かす。

揚幕から代官水野權平を先に焼物師民吉その後以前に卯兵衛等其大勢附隨して出る民吉は特に大小を指してゐる。

民吉 (大勢に向つて) これでは餘り恐入ります、まるで御檢分の出迎ひか、お祭り練りでもあるやうなもう〜どうぞ引取つて下さりませ。

卯兵衛 なんの〜村中は祭どころの喜びぢやない、さア行かつしやい〜。

民吉 では旦那様、穢苦しうございます。

權平はにこやかに首肯いて先に立つ。

皆續いてどや〜と内に入る。

角右衛門は民吉と顔見合せ、混雜に紛れて下手へ去る。

民吉は何の氣もつかぬ體。

お品、惣作、文吉其他出迎へる。

權平、民吉は二重に、他は下にすまふ。お品と女等は奥へ。

惣作、文吉は下手の木下から去る。

さて御代官様、今日殿様御目見得首尾よく相濟み、民吉一代の面目を施しましたるは皆旦那様のお蔭、何とお禮の申陳べやうもござりませぬ。

權平 何の〜これも皆其方が命をかけた數年間の苦心の賜物、嘸満足なことであらう、皆もよふ聞け、忝けなくも大納言様には今日御城内御深井の御茶屋に於て民吉にお目見得をゆるされ、先日献上の香爐を平戸、有田乃至南京焼にもまさる名作と殊の外御賞美あつて、以後民吉工風の石焼を染附焼と稱けるとの御説、御褒美として御庭焼御用の上釉に金一封を下し置かれ尙その上に加藤民吉保賢と名字帯刀を御免になつた。

民吉 これが御目録でござります。

日録を皆に見せる。

權平 その節民吉より願ひをあけ、古來

瀬戸土焼の本窯は一子相傳ゆゑ、次男三男の出世の途なく、現に民吉自身も熱田前の新田に馴れぬ百姓となつて、働く所を御奉行津金文左衛門殿の情によつて南京焼の仕法を覚え、それが原にて此度の新窯の工風と相成つた、付ては今後染附焼所望の者には民吉の鑑識次第製法を傳授し、何者も新規窯持ちとなられるやうお許しを蒙れば自然この道繁昌しお國益の一つとも相成りませうかとの願ひ、殿には至極と思召され、即座に御免料あつて日本は愚か異國までも瀬戸名物染附焼の名を廣めよとの御懇のお言葉を給はつた。

卯兵衛（乗出す）では何者でも新窯を焼出すことが出来るのでござりますか。

直右衛門 土焼から石焼に更ることも出来るのでござりませうか。

權平 如何にも、唯ひとへに瀬戸の繁昌を圖ると云ふが民吉の願ひなのぢや。

民吉 皆様、瀬戸を日本一の瀬戸にするにはこれからでござります、足かけ六

年以前皆様に、お約束申した石焼の秘法を漸う會得して戻つたとは申すもの、土地が更れば土も變り釉が違へば上りも違ひます、工風はこれから、それを仕遂げるのが皆様のお力でござりますぞ。

卯兵衛 忝けない、民吉殿、皆に代つて私からお禮を申します、瀬戸は全くこなたの力で蘇生る、土焼、石焼ばつと世間へ賣廣めたら、唐津々々と云ひならはした焼物の稱をやがて瀬戸物々々と云ひかへるやうになりませうぞへ。

直右衛門 然しいつまでも大勢が怨うしてゐては御代官様へも御無禮になる、これから元締の所で祝の相談をしやうではないか。

卯兵衛 成程さうぢや、では水野の旦那様民吉殿。

皆二人に一禮して下手へ去る。

奥からお品が銚子盃を持つて出る。

品 この度は何から何まで旦那様のお引廻しにおあづかりまして有難ふ存じま

する、おしるしばかりでムりまするが、どうぞ心祝ひのお盃を……

民吉は石焼の盃をちつと見る。

民吉 水野の旦那様、この盃は八年以前津金様のお力添へで南京焼の書物をたよりに初めて焼上げました盃、焼も繪附けも拙いものでござりますが、その拙さ故に命がけの九州下りとなりました、私に取つては此上もない思出深い品でござります。

權平 その盃でけふの祝の酒をくむとは嘸嬉しいことであらう、拙者も喜んで一献傾くるぞ。

權平 盃を受け、お品酌をする。

下手から焼物師忠次が出る。

風呂敷包みにした大香爐を持つてゐる、内の様子を窺ひ決心の體。

忠次 御免なされ。

内に入り、水野に向つて叮嚀に會釋する。

御代官様かこれへお立寄りと承はりました、御無禮ながらお願ひに罷出ましてござります。

権平 何か申して見るがよい。

忠次 御承知の通り、私は八年この方自力を持ちまして南京焼の工風を致して居りまするが、漸うこの程焼上げました疎末な品、恐れながら御覽が願はしうござります。

権平 左様か、これへ。

忠次 香爐を権平の前に置く、権平は熟覽の上件の香爐を民吉の方へ置更へる。

先以て萬事滞りなふ相濟んだ、ではこれで立歸るぞ。

民吉 何から何まで有難ふ存じまする、これ文吉へ。

察場の方から文吉出る。

且那樣のお歸りぢや、お屋敷までお供せい。

文吉 へえ、畏まりました。

権平一揖して行かける。

忠次 御代官様、香爐は如何でござりませうか……

権平 この上とも出精して工風を凝らすがよいぞ。

権平、文吉を従へて去る。

権平を送出してから民吉はぢつと香爐を見入る。

民吉 他所とは違ひ瀬戸の御代官、水野様はお目が高い。

忠次 民吉どん、この品が悪いと云ふのか。

民吉 いや悪いとは云はぬ、形も繪附けも見事じやが惜しいことには疵がある

忠次 なに、疵があると。

忠次は取上げて調べる。

民吉 忠次どん、お前と私とは昔から氣

が合はず、何かに意地を張るこなたじやから、私の出世の鼻先を折る了見で

來たのであらうが、全體こなたはこの香爐の疵を知りつ、御代官の眼をくら

まし、あはよくば殿様御上覽とまで欺しお、せる了見か、繪附にしがは隠れ

てるるが、いさ、かながら生地 contain 煙のくすほり、南京高麗はまだなこ

と、平戸、有田の白磁にさへ傍へもよられぬ左手な品ぢや。

忠次はたと詰る。

人目は欺しおほせても、おのれの心は欺せまいは、

忠次は突如に香爐を打破る。

察場から惣作が意氣込んで出る。

民吉制す。

忠次は無念の體で揚幕へ去る。

惣作は破片を取つて。

惣作 何かいごやんもんが、俺の故郷の高濱へ来て見、掃き溜めへ山ごとうして、あるが。

品 人の出世を嫉む天の邪鬼のやうなあ

の忠次、氣遣ひなは九州ばかりと思ひの外、足許にも敵がある、よう氣をつけて下さりませや。

民吉 何の彼奴等に何が出來やう、や、氣がゆるんだせいか草臥が一時に出て來た。

品 お城は嘸窮屈でござりましたらうな

民吉 あのお深井の茶屋で殿様へお目見

得の時の様子、こなたにも見せてやりたいものであつた。

品 ほんに見たいもんでござりました。
民吉 お、まだ大切なことを忘れてゐた、けふのことを御先祖の御位牌にお話を申さにならぬ。

奥から「か、様〜」と呼ぶ聲が聞える。

品 お、また痛み出したのであらう、今行てやります。

民吉 (奥を見やつて暗い顔色) 今の私に何一つ不足はないが、ま、にならぬのは

お照の病……

品 お前が留守でなかつたら療治の道もありません。

民吉 さ、早ふ行てやれ。

お品は奥へ、民吉は目録を持って上手の部屋へ入る。

物作は香爐の破片を拾ひ、心秘かに感じる體、やがて破片を拾ひ集め轉轡場に入りて繼合せて見る。

淨瑠璃 (逢ふといふ心一つを力に

ていつ漕ぎ出し松浦瀉、日數も知らずかさね來て都もあとに遠霞、旅のぬ

の子の袖ふりて、鈴鹿峠坂の下、關の地藏に親子の願ひ、南無や戀しきその人を岩の渡しに浪越えの、こ、春淺き瀬戸の山北谷にこそ着きにけれ、

お千鶴と嘉藏揚幕から出る。

嘉藏は足を痛め勞れ果た體、お千鶴はそれをいたはりながら門口に近寄る。幾度か遡らひ家内の様子を窺ふた後。

千鶴 辛爾ながらお尋ね申します。

惣作 ない(その儘香爐を見入る)

千鶴 この先の上野と申す所で聞いて参りましたが、今度瀬戸で始めて石焼をお始めなされた民吉様は御當家でございまするか。

惣作 ない。

千鶴 あの御當家でございますか、ではその御主人な以前肥後の天草や肥前の佐々においでなされたでござりませうな。

惣作 ない、ない、そんな通り。

半分云ひさし不審顔
あ、たはどうしてそぎやんことはお尋ねなはりますか。

言葉もまがはぬ肥後訛り
お千鶴はさてはと飛立つ

思ひ。
千鶴 では御主人な天草にも佐々にもおいでなされましたとちやな。

惣作 さア、よふとは知らんが大方さうでござりまッしよ。

千鶴 それならお名は武藏殿と申しませうが、あ、嬉しか、漸うこれで。

惣作 愛な親かつさんな加藤民吉保賢殿ニツ名は持つちや居られませんばい。

千鶴 その加藤民吉殿とやらは瀬戸での名、佐々では平戸の焼物御用達福本仁左衛門の入婿武藏と申されました、私やその福本の娘千鶴でござります。

思ひがけなき一言が胸に
轟ろく奥の方、立出る民

吉親きちちかふお品しな、顔見合せかほみあはせして
またばつたり。

上手から民吉正面からお品が出やうとして
顔見合せ双方襖、障子締切る。

これ嘉藏かざう、子供の足で行方定めぬ長の
道中みちのちゆう嘸なげきつかつたことであらう、その
苦勞くろうの甲斐かひがあつて漸やうう父ちちしやまのお
家いへが知れた今直いまきに逢あはしてあぐる、
嬉うれしさがちやらうのう。

抱いだき合あふたるいぢらしさ
云いひたいことも云いひかぬ
るお品しなの手前てまへ親方おやかたのはか
りかねたる胸むねのうち。

惣作そうさく 一圖いちずに思込おもひこふでござるらしかど、
瀬戸せとから九州きゆうしゅうへ修業しゆぎふに行たもん、もう
どうしてあるか知れん、よそばよふと
尋ねて御覽ごらんなはりませえ、この親おや
かつさんな、ほんのこつ、武藏殿むさうどのとは
云いひませんばい。

千鶴ちずる い、や、さう云いふこなたの肥後ひご訛まが
りが一つの證據しやうこ、天草あまぐさへ渡わたつて調しらふれ
ば武藏殿むさうどのは高濱たかばしの燒物師やきものしを抱かかへ、二人

連れて上方かみかたへ上のぼられたとのこと、その
職人しやくじんがまさしうこなたでござりませう
が。

急所きゅうしょを刺さされて四苦八苦しやくはつこ
お品しなは奥おくをつ、と出で。
お品しなは嫉妬しやくとの心で奥から出る。

品しな うちの民吉殿たみきちどのは九州きゆうしゅうへなござられ
たことはない、はい、人違ひとちがひひ、女房にようばうの
私わたくしがきつぱり申もうします、殊ことに今は夫せうとの
留守るす、何所どこぞよそを尋ねやアせ。

そ、とろくさいもつがふ
ごなる、お千鶴ちずるははツと
胸塞むねまたまがり。

千鶴ちずる あのあなたが、御當家ごとうけの……
品しな はい、これ惣作そうさく。

とつと、去さなしやも目顔めがほ
の指圖さしづ、見返みかへへりもせず
奥おくへ入る。

惣作そうさく さ、聞きか、通とほりぢや、とつと、
去いんだく、然しかし瀬戸せとも廣ひろか、何所どこぞ
宿しゆくとつて、機曾かりそば見て尋ねたがよかり

さうな、さ、早はやかこと〜。

突つき出いだされて門かどの外そと、暮く
れかゝる日の旅鳥たびどり。

嘉藏かざう 母かしやま、まだ歩あくとな。

お、とばかりに引寄ひきよせて
泣なく音ねに曇くもる鐘かねの音ね。

千鶴ちずる さ、辛抱しんぱうして……

堪たはいづこ、たどり行く
行きがけ、引返ひりかへし下手しやへ去る。

奥からお品しなが出て窺のぞふ惣作そうさくと目で二人の
去つたことを語り合ふ。

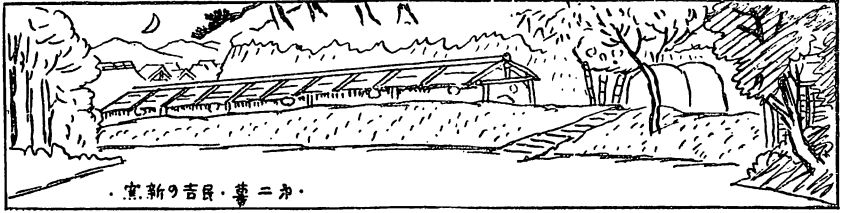
民吉たみきち (部屋へやの内うちから)、惣作そうさく、惣作そうさく、
惣作そうさく ない。

惣作そうさくは椽端せんたんにお品しなは尙嫉妬しやくとの體ていで、あら
ぬ方かたを向むかいて坐まる。

一ひと間まを出いる民吉たみきちが、思入おもひい
つたる眼まなこなざし面色おほもろ。

民吉たみきちが物凄ものぢやうい決心けっしんの色いろを漲たぎらせ、書類しゆりを
抱かかへて上手うまから出る。

民吉たみきち 惣作そうさく、今いまから直ちかぐに忠次ちゆうじの所ところへ使つか
に行いつて來きい。



・新吉民・藝二ホ・

惣作 ない、口上はどう申しますか。
 民吉 加藤民吉が、一代の力を籠めた石焼の秘傳を傳授する、その身のためとはいはぬ、瀬戸の爲め、お國の爲め、是が非でもたつた今來いと云へ。

〽思ひもかけぬ口上に、お品は驚き
 摺り寄つて。

品 お前は氣でも狂ふてか、命がけで漸う仕上げた石焼の秘傳を、人もあらうに不和の忠次づれに譲らうとは、惣作行つてはならぬ、私がやりませぬ。

民吉 え、女子の分際で、仕事の上に差出口叩くとは何たること、すつこんで居い。惣作、一時を争ふ大事な使ぢや、韋駄天走りに行つて來い、
 惣作 行つては來まつする。
 惣作、逸散に揚幕へ走り去る。
 民吉は見送る。

〽報ひは胸に沓え返る、瀬戸山嵐し

〽報ひは胸に沓え返る、瀬戸山嵐し

民吉そつと妻を見、奥を見返つて涙をこらへる。

氣を取り直して、秘傳の書類を調べる。
 この模様よろしく。
 道具。
 // 廻る //

(二) 民吉の窯場

加藤民吉が新築の窯場。
 正面下手から上手へ爪先上りの土坡、その斜面を利用した上りかけの丸窯(火口は下手の陰にある體で見えず。上手の小高い所に二個の試し窯。土坡のよき所に二三株の孟宗竹の間に李が雪のやうな花をつけてゐる、上手側面に母屋に接した工場の一部、下手側面は木立、後ろは崖を隔て、民家の点在せる山を見る、新月が低く山の端にか、つてゐる。

舞臺よき所に据えた、窯場の床几の傍に立つて、盲目のお照が拜んでゐる、やがて床几にかけて唄ふ
 お照 よんべ來らいた花嫁御、奥の座敷に座らせ
 て、金欄小袖を縫はせたら、襟と衿をつぎやへ
 すに、ほろりくと泣きやしやんす、なんで嫁
 女は泣きやしやんす、わしが弟は七つ八つから
 金山に金があるやら死んだやら、一年まつても

まだ見えぬ、二年まつてもまだ見えぬ
三年振りに狀が来た……三年振りに狀
が来た……
後は忘れた體で考へる。

狀にはあらで忍び来る、
誰とも知れぬ怪しい人影

見つけられじと驚の陰。
潜むと知らぬ目なし鳥。

下手から中里角右エ門が忍びやかに出る
母屋の方へ行かうとしてお照のゐるのを
見て驚き、試察の後ろに隠れる。

誰、文吉……惣作か、え、惣作く
内から返事がきこえて惣作が出る。

惣作 夜風に吹かれたら毒でムりますば
い、お月様ば拜んだらさあ家へはいん
なさりまつせえ。

お照 惣作、お前に教へて貰ふた天草の
唄、しまひの方を忘れてしまふた。

惣作 は、は、よんべ來らいた花嫁御
でござりますか、よかたいたまた晩に教
へてあげまつしう。

お照 今、誰ぞお客様が来ておるのでなさ

るのかえ。

惣作 ない、足許から鳥でシ立つごと天
の邪鬼の忠次ば呼ぶで来て驚場の秘傳
ぢやの口傳ぢやのと親かつさんは氣で
も狂ひなはつたか、いやこぎやんこと
娘御に聞かせても詮がなか、さア、内
さん戻りまつしう。

手を曳いて上手へ去る。
入る方の月は赤津の山の
端に、やがて沈まん身の
定め今宵限りと民吉が心
も足も急がれつ、忠次伴
ひ窯場前。

民吉が急ぎ足に上手から出る、それに從
ひて忠次が不審の面色で出る。

民吉 今渡した秘法の書付であらかた會
得が行にであらう、この上は窯の組立
で合點の行くまで隅々残らず見るがよ
い、そなたの焼物に煙のなづむは大煙
の後に風を送る責焼の工風が足らぬが
第一の疵、すべて石焼の焼方は燃ゆる
煙を元に還し、同じ火力を送らねば雪

のやうな白さは出ぬもの、さ、忠次ど
ん。

引きかけるを引止める。

忠次 待つて呉れ、今の先まで意地を張
合ひ不和で通したこの私に六年この方
苦勞をした命がけの秘傳を譲つてくれ
る、そなたの心が合點が行かぬ。

民吉、不和も意地も私事 瀬戸も廣いが
そなたに上越す焼物師はないと見て私
が秘法を譲るのぢや忠次どんそなたも
これまでの行が、りをサラリと捨て私
が苦心を傳へ廣めて瀬戸のため、お國
の爲めに盡してくれ頼んだぞよ。

忠次 驚き入つたこなたの大量、私も今
から加藤民吉の弟子と名乗り吃と石焼
を廣めて見せる。

民吉 忝けない、これで思ひ残すことも
ない。

忠次 え、

民吉 いや、惣作、灯を持つて来てくれ
惣作の聲 畏りました。

忠次は尙も不審とり

忠次 それにしても心急しいこなたの様
子何ぞ深い仔細か。

民吉 それも明日になれば分ること、そ
なたは唯一心に石焼の秘法を會得して
くれるのが私への返禮同様ぢや。

忠次 成程、私には技が命、餘のことは
何にも問ふまい。

民吉 それでこそ、こなたは名人になれ
るのぢや。

惣作 が灯を持つて上手から出る。

さ、忠次どん、火口から煙止め、投込
の寸法や捨間まで心を籠めてよく見さ
つしやれ、惣作、隅々残らず案内せい。

惣作 さ、來まつせえ。

〽不服ながらも主の命、誘

ひ蒸場へ降りゆく。

二人は下手奥へ去る。

〽跡には一人民吉が見切つ

ても切りかぬる親子の情

夫婦の縁、あけては何と

云ふ風に散るや李の雪ふ

どき、いや氣もあらうお
千鶴と嘉藏、それと見る
より取絶り。

民吉 お、お千鶴殿か。

千鶴 民吉殿。

嘉藏 父しやま。

民吉 嘉藏か。

〽いふも四邊りを忍び音に
引き寄せ、引き寄せ、せ
き來る涙。

嗚や私を鬼とも蛇とも怨んでるやう免
してくれと詫びたうても、

〽ゆるされやうもなき大罪

最前ちらとそなたを見てから私の覺悟
は極つてゐる、今から直ちに故郷へ引
立て親御のお手でお上へ突出し身のあ
かりを立て、くれ、さアお千鶴殿、こ
れお千鶴殿。

〽いはれてこなたは咽せか

へり。

千鶴 その父様や兄様はお咎めうけて牢

屋の憂目、佐々の山ではお前の畫像を
繪踏までして怨んでゐます。

民吉 なに、親御も兄御もあの入牢。

〽あつとばかりに腹もひ

きちぎらるゝ苦しさ、切

なさ。

お國のためと技のために他國の御業制
を破つたとてさらく心は咎めど、秘
法を知りたいばかりに福本一家を陥
入れた、この身の罪の怖ろしさ、さお
千鶴殿、私を引立て親の仇、その身の
仇を討つて下され。

〽これこの様にと延す手に

お千鶴は取つき。

千鶴 お前を死なせてこの嘉藏や私はど
うなると思はるゝぞ、その眞實が定ま
るならば今から直ちに二人を連れてこ
の土地をば立退いて下さりませ。

民吉 なに、立退けと、

千鶴 私が故郷を出るとあとさき、代官

所の中里角右衛門殿がお前を捕らへて

役目柄武士の一分を立つといふて發たれたが最前ついたそのな旅籠でばつたり顔を見合はせは姿は變れど角右衛門殿さ。恠ういふ間も心が、りな、早ふ退いて下はりませ、さ早ふ〜

色。減多に急けど、驟がぬ顔

民吉 六年以前、この瀬戸を水盃で出た時から命はもとよりの覺悟、したがお國くで掖を設け我が國一手の産物で和を得やうとは狭い了簡、皆隔てなく技を磨き高價な唐物を追のけて異國までも賣擴ろめ日本の燒物の名を擧げてこそ眞に國産とも云はる。道理、その生贄に捨つる命何んの女々しう惜しまうか、そなたも福本仁左衛門の娘技の爲めに命を捨てる私の心をよう察してこの嘉藏を守り育て、立派な燒物師に仕立て、くれ、いひ置く頼みはこれ一つ。

ほろりとこぼす一雫、工

場の蔭より女房お品、お照と共に轉び出で。

お品 最前はさうとも知らず、はしたなふ言ひ募つて面目もござりませぬ、どうぞ堪忍して下さりませ、これ民吉殿あなたの言はる、が皆道理、どうぞこゝを立退いて命助かる分別して下さりませ、長の年月仕馴れた留守居。まだ戻られぬと

思へば濟むとくひしげばる
お千鶴は顔を上げ。

千鶴 お前を死なすほどならば親の難儀をよそにして百里二百里海山を越へて爰には來やませぬ、明けても暮れても父しやまとお前を慕ふこの子の不懣さ、こちらにもお子がある双方のごと思ひやりどうぞ退いて下さりませ、恠うどうし、もう一緒にとはいひませぬ。

わつとばかりに泣き入れ
ばお品はいとむせかへ

お品 退けといふも留守するも皆互の眞と眞、何の偽りがござりませうした

があなたは親兄弟の難儀の上に知れぬ道中の憂き苦勞、嘸辛かつたで、りませう、したが私も長の留守中たつた一人のこの娘を女手一つのしがなさから治せば癒る眼病をこれこのやうに……

とばかりにあとは得云は
すくひしげばる、民吉はこ
らへかね、右と左に二人
の子、引き寄せ、抱き寄
せ、聲を上げ。

民吉 ゆるしてくれ、この民吉は人ではない、異國の魔神になぞらへられ、繪踏にか、つて生きながら地獄に墜ちる大惡魔、二人とも親と思はず怨んでくれ。

折からぬつくと角右衛門

民吉はふり離し立上る
角右エ門、前に立塞がる。

角右 待て民吉。

民吉 お。

あなやと驚く二人の女、必死と隔つを掻き退けて民吉どつか坐し。

さ、角右衛門様、尋常にお繩を頂きまする。

角右 いや、私は見る通りの旅商人、御三家たる尾張公御寵愛の焼物師、加藤民吉保賢殿の意見を出してどうやら廣い世間が見えて参つた。

民吉 したが、それではお役目が。

角右 民藏は死んだとなり何となり、そこな女中、こなたも大方故郷へ歸るであらう、道連れにならうかな。

云はれてはつと心づき。

千鶴 あ、ほんにそうぢや、この嘉藏を人なして福本の家再興すが私の勤め、もうお暇して立ちまする。

お品 でもはるく尋ねて見えたものを逢ふがそのま、別れとは。

千鶴 なんの、逢ふは別れの初めとやら

諦めて見ればこれが浮世でござります嘉藏 父しやま、父しやま。

なう父しやまの一言が胸しめつくる責焼の焔にたぎる血の涙。

民吉 随分立派に成人し三つ内一の名人と祖父様の名を繼いでくれ、忘れても瀬戸の父を思ふまい、親ではないぞ繪踏の悪魔、人畜生と怨んでくれ。

口には云へど眼にうつる

さもいたいけな後影、ま別れてはいつかまた青繪釉と白焼の薄き線を生別れ。

角右衛門を先にお千鶴は嘉藏の手を引き名残惜しげに花道へ行く上手の察の後から忠次と惣作出る。

民吉は忠次を見て會得したかといふ心。忠次、大きくうなづき民吉は満足の體。また嘉藏の方を見て憂いの科。三人は揚幕に去る。

(幕)

「明暗縁染附」に就いて

二つの技術の完成のために幾多の犠牲を拂つて、その爲めに悪魔と呼ばれ外道と罵られ暗く過した半世の人間若を鷹治郎物として世話場に書かれたものが「明暗縁染附」である。同狂言上演に際して作者大森痴雪氏は民吉翁の察が現存せる愛知縣下瀬戸町に到り、實地踏査を爲して材料を集めた。此劇の舞臺では、すべて陶工の家を舞臺に描き出すので、舞臺装置も民吉の察や瀬戸の舊家を寫生し實際に近いものを慥へることに苦心した。第一幕では窯に火が入つて陶磁器を燒きにかゝつてゐる所で幕をあけるので、陶工が小さな窯の口へ火を投げ入れる形やまた陶磁器の出来上りをエンゴロと稱する素燒の壺から出す件りなどは、すべて貨物を使用しまた、民吉の家で諸種の作品を陳列せる場などは當時の模様を彷彿せしめるべく高サ三尺余の大花瓶や直径二尺の大皿等すべて、此度瀬戸町の陶工矢野陶々氏が製作して並べ、また毎日舞臺で燒す香爐も作り物では感じが出ないので、實物を製作して毎日一ツ宛割つて見せるのである。鷹治郎の民吉が大いに新演出を爲すべく、矢野氏に就いて陶工の心算や技術上の苦心を一々研究するといふ熱心ぶりである。

中座十月興行上演

所作事

女ぢよ

郎らう

蜘蛛ぐ

蛛も

二場

坪内士行原作
食満南北改訂

登場人物

僧 若 武 士

舞 姫 若 武 士

琴を弾する侍女

武士を伴ふ侍女

見張りする侍女

侍女(大ぜい)

蜘蛛の精(大勢)

(政治郎)

(長三郎)

(福助)

竹本連 中
長唄連 中
常盤津連 中

第 一

能舞臺を聯想するやうな、さうしてもつとく簡略な一枚の書

割り。

片シヤギリに立脚して、しかも、それよりもつと夢のやうな鳴物にて幕明く。

すぐ竹本になる。

竹へあわれ人の世、迷ひ重さねて、ゆくて見わかず。

僧、袈裟頭巾大のこしらへにて出る。

僧 かくて長旅、そこにまつわる不思議の数々。

これより常盤津になる。

常へ名譽か金か女か酒か、目にはさやかに見へねども、奇しき運命まつわり、からみ、やがては倒さる、あわれ人の世、奇しきさだめの、蜘蛛は網してけふもあすも、あかす犠牲をばまちつるぞ、やよやあやうし、見へぬ白糸、墮落の淵か、おとし穴、氣つけよ人々。

振りある。

竹^{しり}折しもつき出すさだめの鐘^{かね}か。

本釣。

若き武士旅ごしらへにて出る。

唄^{うた}へ身を觀^みすれば、岸^{がし}額^{がく}に根^ねをはなれたる草^{くさ}の露^{つゆ}、そも江頭^{えがしら}

につながざる、船^{ふね}もなぎさにみだれ掉^{おち}。

本舞臺へ来て、僧^{そう}と行きあふ。

入りかわつて行きすぎる。

竹本は今一度。

竹^{たけ}へあわれ人^{ひと}の世^よ、迷^{まよ}ひかさねて見^みえわかず。

くりかへす。

僧^{そう}はヂツと若き武士を見送^{みおく}る。

第 二

〃 暗 轉 〃

舞臺^{ぶたい}上手^{うで}にや、御殿^{ごてん}風^{ふう}の二重^{じゅう}、中央^{ちゅうおう}に高^{たか}き岩臺^{いわだい}、目^め立^たつて大^{おほ}きい櫻^{いざな}、下手^{うで}は杉松^{すぎまつ}等^ら、二重^{じゅう}には美^{うつく}しくしき姫^{ひめ}、小^こうつぎ緋^ひの袴^{はかま}、侍女^{じしよ}はとりかこむ。

琴^{こと}を彈^ひずる侍女^{じしよ}、高臺^{たかだい}の上^{うへ}には彫像^{てうざう}の如^{ごと}くヂツと身動^{みぶ}きもせず見張^{みはり}りする侍女^{じしよ}、立^たつて舞^まへる侍女^{じしよ}等^ら。

唄^{うた}へ鼻^{はな}松^{まつ}柱^{はしら}の枝^{えだ}になきつれ蘭菊^{らんぎく}の花^{はな}にかくる、野狐^{のぎよ}のふしどに通^{とほ}ふ虫^{むし}の聲^{こゑ}、秋^{あき}吹^ふきおくる夜嵐^{よあらし}に、いと物^{もの}すゞきけしきかな。

琴^{こと}を彈^ひずる女^{むすめ}、合^あはす。

侍女^{じしよ}はデリケートな振りある。
侍女^{じしよ}三人ほど立^たつて。

竹^{たけ}へ仇^{あだ}し野^のの夢^{ゆめ}ならなくにうつつなき、日^ひもつどく歡樂^{くわんらく}の、

唄^{うた}へ喜^{よろ}こびあきてア、うたて、人^{ひと}もや來^きたるまろうどや來^{きた}る

一同舞^まふ。

高臺^{たかだい}の侍女^{じしよ} オ、森^{もり}のはづれに一人^{ひとり}の武士^{ぶし}。

竹^{たけ}へた、づみ迷^{まよ}ひ行^{ゆく}手^て定めず。

姫^{ひめ}君^{きみ}。

氣^きづく姫^{ひめ}、夢^{ゆめ}よりさめたるやうにキツと見る。

常^{とこ}へまつ身^みもつる、月^{つき}の夜^よに、迷^{まよ}ひつかる、若人^{わかびと}の、たど茫^{ぼう}

然^{ぜん}と手^てをとられ。

竹^{たけ}へ夢^{ゆめ}かうつ、か人^{ひと}の世^よか、いざなはれてぞ。

若人^{わかびと}、それ^{それ}を伴^{とも}ふ侍女^{じしよ}と共に出る。

侍女^{じしよ} 姫^{ひめ}君^{きみ}、ふもとに迷^{まよ}ひおわせし若人^{わかびと}お供^{とも}申^{まを}してムります。

常^{とこ}へ君^{きみ}をまつ虫^{むし}、すゞ虫^{むし}の音^ねをはる網^{あみ}の袖^{そで}几帳^{きちょう}。

ちよつとからむ。

若き武士あたりを見て。

若人^{わかびと} コ、此處^{こゝ}は何處^{どこ}ぞ。

竹^{たけ}へ山^{やま}の中^{なか}、迷^{まよ}ひし夢^{ゆめ}はさめやらず、あなうるはしのこの住^ま

居^ゐ。

姫は追よつて。

唄 實にそれよ此處こそは人の樂しみあつめたる永久の春の里。
よつてふりある。

常 わがめでしをの住む國ぞ、オ、めでしをのすむ國ぞ。

唄 そよ風わたる森の中、櫻花ちる丘のかけ。

竹 たな曳く霞ほの紅う、空は蓬にみどりなす。

常 悅樂の國今こゝに魂とがす香りあり。

姫くときやりになる。

竹 手をとるかかねの音もすみていざこなたへと招すれば、な

ほもふしんははれやらぬ眉をひそめて。

若人 フム、あな樂しの境界よ。

常 ひねむすに辿り歩みて山の上に、かゝる風情も長旅のつ

かれし身には歡樂の酒のかほりに惹ひしれて。

姫二重へともなひ酒をすゝむる。若人のむ。供のふたる侍女舞ふ

常 しととんとんと降る雨も、さつさちつたく柳も花も、

ハンラハラハラハラ。

唄 風にのせられヒラ。

竹 水に浮かされ、フア。

常 よわつて沈んですつとんとん。

供のふたる侍女舞ひおさむ。

唄 我背子が來べき宵ぞと松かけに。

姫盃をもつてすぐ若人を見入る。

竹 アラうつ、なき春の月。

常 るりの御空の金砂子、數限りなき星のごと、思ひかさね

てくづをる。

唄 亂れ姿の影くろみ。沈黙のとばりたれこめて濃や。

ふりあつて姫若人をいざなひ高とのに上る。

竹 すゝむる酒の數かさね、うつゝともなき若人のくづをれ

かゝる姫の膝。

若人とゞ酔ふて姫の膝に酔ひ倒れる。

供なつたる侍女 オツ若人には重ねし酒に。

一同 酔ひしれしか。

姫 コレ。

竹 燕婉をこれ求めて、この威施を得たり。

竹 あたりは眞の闇の夜や。

くらくなる。

唄 さ、がにのはれるやいづく白糸の蜘蛛のふるまひかねて

しるしも。

鼓うたよろしく、スポツトにて真中をてらす。

姫、蜘蛛のこしらへ白刃をつきつけて若人これに對する。

竹へ姫は形相恐ろしく。

姫 獲物にわれも今宵の満足、フハ、、、。

山もくだくる高笑らひ。

若人 扱は姫と姿をやつし、われをとらふる蜘蛛の振舞。

姫 もはやのがれぬ、うゑたる此身に飛入る若人。

若人 フハ、、、やはか汝のゑじきにならうや。

竹へ斬つてかゝるを飛ひらき。

常へかくるや蜘蛛の糸筋に、五體をからむ百筋千筋。

唄 目にはさやかに見へねども蜘蛛のふるまひ切りかねては

らふや左り身をかはず。

竹へまたもあまたの怪しの姿。

蜘蛛の精大ぜい出て立まはり。

竹へちりちりばつと蜘蛛の子をまきちらせし如くなり。

又姫と立まはる、姫消えると供なひし侍女蜘蛛とかはりうつてかゝる。若人それと戦かふ。とど蜘蛛の筋にからまり倒れる。

舞臺もとの如くなり、一切居ならび。

竹へそこにまつわる不思議のかずく。

蜘蛛の大ぜい若人をはこぶ。

幕

『心中二枚繪草紙』の命名

心中二枚繪草紙二幕は近松門左衛門翁の傑作中の白眉、として淨瑠璃では有名な作品である。然し歌舞伎には古來上場された記録が少ない大阪では大正七年三月、浪花座に於て、故瀧寛(徳三郎時代)の長柄村市郎右衛門や我童の天満屋お嶋、卯三郎の助右衛門で食滿南北氏の脚色で上場されてゐる此度は鴈治郎初演に際して特に大森痴雪氏が院本より新脚色したものである。原作は寶永十二年十一月十六日女は天満屋の二階で男は長柄堤で相果てた。はなれくの心中を際物に、仕組んだもの、長柄の田地持の息子市郎右衛門は蜷川の天満屋抱えのお嶋と馴染んでゐるうち、市郎右衛門の弟善次郎は遊蕩のため不義理の借錢嵩み父の預かつてゐる講中の冥加銀を、盗みその罪を兄に塗りつけて姿をかくす。市郎右衛門はその爲に講中満座の中で盗人とときまり、遂に在所を追放される市郎右衛門の不首尾天満屋へも聞えてお嶋との仲を割かれる、それからお嶋は天満屋で市郎右衛門は長柄堤で約束の珠数を、一萬遍繰り終るを合圖に一時に自殺する。そこではなれくの心中であるために、女の姿は男の方に男の姿は女の方に附添ひ、形影相伴ふて宙をさ迷ふ道行に近松の苦心が見える、併しこの心中は男が死んだともまた生き残つたとも風説が區々であつたので近松は「扱こそ世上に此男死んだ風説死なぬ沙汰、生死」二枚繪草紙と命名したのである。因にこの心中はお徳兵衛から二度目の出来事である。

近招内左門の作
大木森 疾風氏 所色

公中二枚貯り子紙

大木森のすゝま画

せきさきのんたま

塊を切つたやうに借金取が押し掛けて来た。

お茶屋の毛馬屋 菱屋の花代 津の國屋の料理代 笹屋の拂ひ
道頓堀水茶屋の勘定 長柄きつての大百姓 介右衛門の庭先は洪水が流れ寄せたやうな騒ぎであつた。

善次郎はそれを一手、矢表に立つて、一つを言ひ譯すれば、また一つ奇手を突かうとすると、搦め手から負けずに襲つてくる。

四人の借金取を一人で引受けるので、奥でお勤めの最中の講中には氣兼ねなり、第一、どうでも親旦那に懸合つても金は貰はねばの筋し催促が今の善次郎には一番骨身に應へるのであつた。

『節季でもあることか、今日に限ぎつて言ひ合したやうな催促は……あつて分つた——兄貴が天満屋のお島に打ち込んで親爺に半勘當の身になつたのを聞き込んで、俺もさうかと案じてのことやろ……措いてくれ。』

善次郎は瘡癩を起して啖呵を吐いた。

これに多少は怖れをなして洪水は引いたが、さて確かさうに言つたもの、彼も、拂ひの金は心にかゝつた。年貢帳を繰りひろげて算盤をはぢ

かすには居られない。その姿が神妙に見えた。

父親の介右衛門は講中の太郎兵衛からお茶所の冥加錢の集つたのを受取つて掛硯の抽出に大切さうに納めた。

『そこで……と、銀が五百目二た包、小判が二十五兩、一歩が都合四十切——ハイ、確かに預りました』

律義な介右衛門はビチリ！念を入れて錠を落して居る所へ、駕屋の使



が「天満屋のお島さんからの文」と入口へ首を突き出すのを、父親に知らすまい心づかひ素早く妹娘のおよしが懐中へ去り氣なく押し込んだ。「え、……おのれまでが一つになつて、親の眼を抜きをるか。こつちやへ寄せ、え、……寄せと云うに」

介右衛門腹を立て、娘の懐へ隠された手紙を振ぢ取つた。奥へ行つた後には父親の鼻紙袋が置忘れられてゐる。その袋の中には鍵が今つひ納められた許だ。善次郎は講中の掛金が掛硯の抽出に入れられた時から、ちつと眼を据えて居ただけから、勿怪の幸ひである。猿のやうな迅速さで抽出を抜いて有金を身に着けた。

奥から父親が呼ぶ聲に狼狽した時およしが不意に顔を出したから、その上に面くらつた。

「あ、吃驚した！」

およしが一人佇んで兄の事を案じる處へ、その兄の市郎右衛門がゴツリと戻つて来た。

「兄さんは、あの、塊地の田地を……」

「え知れたか！」

「ではやつぱり？」

「なるほど、私の名で金を借りたにちがひないが……」それは總て弟の善次郎が計らひだつた。然も七百目の借金のその上に四貫目の手形までが入れてある事は流石の兄も知らなかつたのである。

「憎い奴とは思つたが、乗つても乗せられても弟、俺は兄——たとへ僅でも苦しまぎれにその金を使うたからは罪は俺にある。親爺さまは定めし御立腹であらうなあ」

その上およしにお島の手紙の一件を開かされたから彼は益々顔ひ上らずに居られなかつた。

「え、……それを親爺さんが……えらいことをしてしもた」

奥から又父親の呼ぶ聲に急いで妹が這入つた跡は、途方に暮れてしまつた。

「何というて言譯したらよいやら……え、酒でも飲んで元氣をつけたれ！」

半分は自暴が手傳うて釜の上の神酒徳利を茶碗に注ぐと、先刻善次郎が隠し場所に迷つてその中へ入れた一歩金が四十粒、バラ／＼と酒と一杯に茶碗の底で泳いでゐる。彼は文句なしにそれを懐中すると善次郎が出て来た。

そこで、弟の顔を見ると市郎右衛門は田地で餘分の金を人知れず借りたことを怨んだ。

「それにしても、何んて俺に一言答へてくれなんだ」

「今、それを言うても仕様がおまへん……それよりも兄さん。今日も悪いところへ蜷川の何處やらから文が来て、その親爺さんの鼻紙袋の中へ入れてある」

深切さうに教へて弟は使に行くの家を

出た兄は教へられた袋を取上ると鍵が壺の上に落ちたが、お島の手紙に氣を奪られて



ゐるから迂闊して居た。この場を父親介右衛門が見たのだから只では濟みさうになかつた。落ちて居る鍵を拾ひ上げさま吐鳴りつけた。

「ヤイ悴、おのれ天魔が魅入つたのか、盗みしやうとは、お、おのれ、何たる……」

「滅相な、何んで私が」

市郎右衛門には夢にも覺えない事だが、二の句を續がせないで怒り猛つた父親の拳が雨と背中を叩くのであつた。この騒ぎで太郎兵衛や近所隣の人々が駈着けたが、介右衛門の激怒は益々炎と燃え上る。

「あの金は講中の衆が骨肉の脊を絞つて御開山へ差上るお茶所の大切ない金ぢや。盗まぬと言うなら、来て下された皆の衆の面前で調べる。おのれ、一文一字違うても、生かしては置かぬ……」

義理固い介右衛門の額の青筋は今にも破裂しさうだつた。

抽出を開けた――

が、善次郎が根こそぎに盗み出した跡に残つて居る筈がない。

「盗人を捕へて見ればわが子なり……おのれ故にこの生恥」

市郎右衛門の懐へ手を振り込むと、不幸なことにはその片端の一步金が濡れ出たことであ

る。疑ひの色が濃くならずには居られぬ。

「こ、これ見さらせ！」

「いえ、それは……」

「もう勘當ぢや出て失せろ」

倒頭介右衛門は血を吐く一言を投げ出してしまつたのである。

「大阪の去る人の四十二の二つ兒で、産所の内から貰つて育てた後へ弟が出来たけれど、それにも替へず可愛がつて人にした。おのれ不憫さ懸つて今日まで耐えて居たなれど」

「そんなら、あの、善次郎とも、およしとも？」

意外な話を今始めて叩き割られて市郎右衛門は呆然となつた。

「實の子なら出ても行きましやうが……不孝の歎々を仕盡した上で、養子と聞いては何うまあこのまゝ出て行けましやう」

彼は夢から醒めたやうに、賦を籠めて始めて泣いたが、介右衛門は狂ひさうに怒つて居るので、その涙は眼に留まらない。激しく打ち据える父親の杖は二つに折れた。その打たれた杖の折れ端を持つて土間に市郎右衛門は影のやうにボンヤリ佇んだ。

「講中のお方々、親のことは頼みます。今生のお暇乞でござります」

戻つて来た弟の善次郎は容子をすつかり知

ると追がに市郎右衛門の顔をもとに見る事は能きなかつた。

天満屋の内儀お俊は長柄の市郎右衛門が勘當されたのを聞いて狼狽てゝ家に戻つて来た。お鳥の身が案じられたからである。

と、そのお鳥は當の市郎右衛門に招かれて近江屋へ行つたと知つて益々蒼くなつた。

「前のお初と徳兵衛さんの心中で、もう懲々して居る。このうえ淨瑠璃に唄はれるやうな事があつては家名にも拘はる……早うお鳥を連れて戻つておくなはれ」

眼の色を變へて雇女を手當り次第に叱りとばして居た。

近江屋から無理矢理に揚げられて来たお鳥が女中お玉の腕に酔ひつぶれて同じ往來を戻つて来た。正體なく酔つて居ても善次郎の後影は鈍くお鳥の瞳を刺したのである。

「私は何も彼も今日の容子は皆聞いた。勘當と聞いて胸が痛うて酒に強う酔うて……善さん」

じつさい女の眼は怨恨に炎をあげてゐるやうに善次郎はゾクリと背筋を顫はした。「あんたは弟の身でありながら、えらう機嫌がよきううな。私はけなない……否！ 禮を言うことがあるよつて一緒に來なはれ」

善次郎の胸倉を引潤んで天満屋の入口へどさり！

「往來でてんごうしないな！」

脛に傷があるので強いことも言へなかつた。

善次郎は逆ひもせずに入口に押着けられたままへドモドして居た。

酔ひつづれたお島を壘の上へ引き摺り上げる

と、お後は茶を酌んで深切にその唇に當てた。

「さ、茶など呑んでもう休みなはれ、えろう酔うてゐてやないか。さ、さ、早う寢みなはれ」

「まあそない急かんと聞いとくれやす……あの市さんは親御に勘當されはりました。アイ、人でなしの弟の爲に無實の罪を引ツ被つて……」

「そやつたら報恩講の金を盗まはつたと言うのは？」

「みんな弟、善次郎奴の憎い仕事だす。育ての親なり義理の弟のためと思へばこそ、立てたい證據も立てずに勘當うけて、所の住居もならぬ身になつたと、今も泣々泣いてゐやはつた」

お島は何處までも市郎右衛門の身に惹かされてゐた。だから酔つてゐても涙が跡から留度もなく流れた。主人手づから飲まして貰つた茶碗を眺めては主人の恩を有難いと泣いた。酒の爲に傾死すればこの湯が末期の水と泣いた。途切れがちのさうした酔ひの管がすでに、しんぢつ

お島の覺悟であるとは、誰が知り得やう！二階の箱梯子の足もとも亂れて振返つて。

「お家さん、……皆さん……さいなら」

と別れの挨拶を階下へ送つた時、座に居る一同はその聲を薄氣味悪いものに聞いた。……善次郎は表の用水桶に隠んでこの話の一切を聞いた。追に脛が苦しかつた。少時身悶へしてから

頷いて急ぎ足に去つたのは何處を目指して行つたのやら……横町からそより唄が呑氣さうに流れて夜が更けた。

人影が途絶えたと露地の暗闇から影を忍んで現れるのは市郎右衛門であつた。

「おしま……」

忍び聲で呼ぶと二階の窓が暗の中でスツとひらいてお島の鏡が光つて動いた。男も伸び上つて扇を振つた。

「私は今宵をすぎさず死ぬる覺悟、この心のうちをお前は察して呉れるであらうな」

「アイ、お前一人は死なしはせぬ。起證どほり約束どほり……」

二階の窓を往來から、見交す限は涙と涙であつた。その哀れな男女に瀟々は空の小雨。走つて戻つて來た善次郎が慌しく夜更けの

天満屋の戸を叩く。

「長柄の市郎右衛門は來て居りませぬか。近江

屋で尋ねたら、最前、もう去んだとの事、市郎右衛門は來て居りませぬか。」

「喧ましいわい！夜更けに何んぢや、そんな人は知らんがな」

少時經つて漸く怒んな聲が寢枕げて突劍に開えた……南無三寶、兄の命が、善次郎は雨を衝いて向ふの町へ走つた。

やがて陰に籠つた鏡がなる。

「一所所で所詮死なれぬ二人の身體。私は在所の長柄堤で……」

「私は、こゝで……」

「死ぬる所は變つても、連れ立つて行く道は」と筋

雨の音が段々二人の聲を掻き消して行つた。

その夜明け、長柄堤の松の木の下で市郎右衛門の死骸は星にまもられて倒れて居た。勿論お島も天満屋の自分の部屋で剃刀を咽喉へ當て、自殺したのは言ふまでもない。

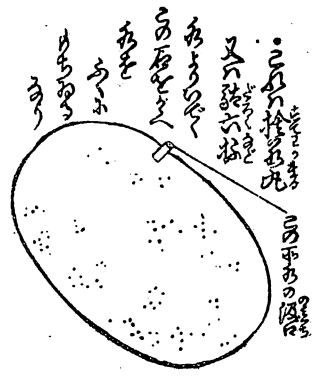
場所を違へながら同じ時刻にこの男女は相果

てたのであつた。

風變りな情死と言へばそれまでだが、義理と金の柳に苦しんだその頃の大阪の情死の條件に

お島市郎右衛門も矢張り苦しまされた譯である

(終)



玩辭樓漫筆

中村鴈治郎

ことしは夏休みに何處へも出掛けず、宅にばかり引籠つてゐて、ぐずぐずしてゐるうちに、もう秋になつてしまつた。涼しい静かな處へ避暑をするといふことは誰れしも望むところで悪くはない、而し考へて見ると、他處へ出掛けて他人ばかりの中で、心遣ひをしてゐるより、たとへごとくしてゐても宅にゐて暢んびりとしてゐれば、自然に心も澄んでゐて、氣もちがよい、暑ければ裸躰になつてゐるといふやうなのが却つて樂々とするわけである。ことに私は他人と話がしたい、出入りの者や訪客と氣樂な世間話でもしてゐないと、どうも寂しくていけない。他處へ出掛ければ、さういふ自由も得られないやうな氣がするので、つい出そ、くれてしまふ。といふのもこれは理窟かも知れない、出掛ける方にはまたそれ々の理由があるのだから、私のやうな論法ばかりが必ず通用するものとは云へない。

世の中のことは、どうも理窟ばかりでは押しきれない。

○

芝居の方でもつね々かうしたことがよくある。役の性格とか脚本の解釋、それが上演に至るまでの關係者の心遣ひはたいへんなもので、もしも難解の點に出喰わせば、そこにいろ／＼の理窟が産れてくる、さうした場合、必ず甲がよくて乙が悪いとはきまつてはゐらない。どちらにもそれ／＼聴くべき點はあつて、遽かに團扇はあけられないが要するところは、その時と場合にしつくりと氣持が徹つて行くといふところが、なんとも云へない、いゝところであらうと思ふ。衣裳とか臺の好みだとかさうしたちよつとしたものでも各人各様であつて、その好みによつて來るところを考へれば必ずそれ／＼に理窟があつて一概

にはなんとも云へないわけで、いづれにしても、その人その時にびつたり合つた氣持をとることを忘れては百の理窟も無駄なことになつてしまふ。

わたしはこの暢び／＼した夏休みの一日、倉庫の中から古い所蔵品を持ち出して来て虫干しをした。いつもはかうした際もなく曾てしたこともないが、何十年間手を觸れたこともない以前の品物がひよつくり現はれたり、切ない頃の遊び道具までが舊友に逢つたといふやうな顔をして出てくるのもなつかしいことだ。妻は傍らの人に「随分いろいろの偽せ物をたんと買ふてな」とかう云つたりした。その以前好きな書畫をちよい／＼買つたその中にどうも怪しいのが多いやうで妻は他人からそんなことを聞いてゐたものと見える。私はまた曾て他人に見せたこともなし、自分が好きで自分ひとりで藏して喜んでゐるのだから、それが偽せ物であらうと眞物であらうと、そんなことはとんと構はない、けれども別に妻がさう云つたからとて私は理窟は云ひたくない。

かね／＼欲しいと思つてゐたい、ラジオの機械が見附かつたから、すこしは高價だつたが買ふことにした。ことしの夏の夜

はすつかりそれで楽しんで。人の來ない時のい、話對手になつた。相場と物價を聴くのはきらいだが、そのほかのものはないでも聴いた。講演とか演説とかには、ある時僧侶の人が出て、その人の話術の巧さにすつかり感心してしまつたので、その他の人々はやはり坊さんには及ばないと思つた。芝居はどうしても、まとまりが悪くて、いまのまゝでは聴きづらい。女の人のものでは歌澤とか小唄のやうな短かいものがよく、ニュースも新聞で讀むよりアナウンサーの聲を通して聴く方が事件が活きてくるやうでおもしろい。とりわけて自分の知つてゐる人が放送をするときはその人の平生などと思ひ合はして興味がかく親しい心持がしてよいものだ。わたしはひと夏をすつかりラジオの友達になつてしまつてゐた。

録記の「記水治」

松竹專屬花形大歌舞伎特別出演の天滿八千代座十月興行畫の部一番目大森痴雪氏作「木曾川治水記」大正八年浪花座の九月興行に延若が上場したのが初演で大阪に於てはこの度が再演であるがその狂言は今を距る百六十餘年前薩藩の義士が木曾川治水工事に盡した功勞と忠烈な最後とは當時島津家が幕府へ憚つて祕密の裡に葬つたため世の中には知られなかつた事件だが先年大正九年十月の京都南座が同じく延若一座で開演の初は洛中の教育界に一大センセーションを起したもので史的參考劇である事は勿論堅忍不拔の我が國民性を謳歌した名篇として市内各學校の團體組見など非常な人氣を呼んだものであつた。

後抑の豫



ガンジロサン

高安吸江

鷹治郎サン。先年君の部屋で、君を崇拜して居る米國の女記者に逢つた時、君を呼びかけた彼女のあの親みある語調を憶ひ出して此題としました。

私の好きな鷹治郎サン。此十月の中座は久しぶりに君の一座で、出しものは全部新作と聞きましたが、相變らず新を求めてやまない君の元氣と、それがたえず君を若やがしめることについて、誠に結構だと喜んで居ります。最近十餘年間に君が道頓堀で演つた役は殆んど百に近い數を示し、その四割弱が新作ものであつたことを考へても、此方面に於ける君の奮闘振を察することが出来ます。唯こゝに遺憾とすべきは、それに現はれる主役の戀が、相手の女の眞劍さに比べて甚だ不純であるのを、快とせない。世評であります。此れは和事師として第一人者である君を傷けること夥しいから、私は少しく此事について考察したいと思ひます。

先づ第一に考慮すべきは君が生ひ立つた時代の空氣です。そこには道義的偽善が支配し、極端に感情を抑壓して、喜怒哀色にあらはさぬを誇したり、内心はとにかく、表面は婦人を土芥の如く賤しめ、今日のやうに卒直に心情を吐露する純眞さを尊ばなかつたのです。君の紙治が天の網島でなくして、心中紙屋治兵衛であるやうに、新作にあらはるゝ主役は他に特別な原因がなく、單に戀のみでは心中し得ない、否それを屑しとせないのです。それがあらぬか世間の同情は、寧ろ眞劍で一筋な女の方に集るやうになりはしなかつたでしやうか。かう云ふ點へ着眼することにつとめるならば、恰惻なる君はキツト直に現代世相を洞察するでしやう。

次は相方の問題です。九代目團十郎は其晩年に女房役者の缺乏を歎じ、女寅(後の門之助)では後妻になるし、芝翫や榮三郎(今の歌右衛門、梅幸)では妾になるから困ると云て居たそ

うです。それと同じ様に君はまた、戀すべき相手の不足を感じて居るでしやう。君の藝風や役柄に尤も適して居ると認められる雀右衛門は病氣であり、福助はお千代や、おさんの如き女房役にのみ傑出し、魁軍は陰鬱な小春などは別として、君の愛人らしい豊麗な明るさを缺いて居ります。それかと云つて是等の人々をのぞいて外に、君が戀し得る女形が若しあるとすれば、其時君は恐らくおかんの幻影に捉はれて、小さいお半の愛着にひかれ行く長右衛門と同じになつてしまふでしやう。かう考へて來ると、君が愛し得ざる惱みに同情し、孤立の悲哀を感じつつあるのを、非常に氣の毒に思はざるを得ません。

それから是は少々立入つた話でありますが、今一ツ考へられるのは君が先年、白熱的戀愛を體驗した、愛人高井氏を失つたことです。尤もその孤獨の淋しさは、後にK氏によつて代償せられたのではありまじやうが、そこにはあまりに圓滿過ぎた家庭が作られました。パパと心中。不調和なのは管に語呂ばかりではありますまい。

かう云つた種々の關係から、君は今迄とは全く別の途を歩まうとしました。そして其結果として九十九折や、室津の歌などの佳作が出来ましたのは誠に喜ばしいことでありますが、一方には不純で冷やかな戀愛が益々多く取扱はれて來たのも事實です。此れは君にとつて極めて不得策であつて、こんなことから長年の間磨きに磨き上げた寶石を、土塊の中へ打棄てるやうな

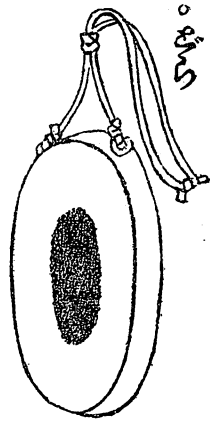
ことがあつては取り返しがつきません。君の技は君一人の所有ではなく、君はその完成された藝術を普く一般に見せるべき義務があり、又それによつて後進の若い人々を指導すべき責任があります。君は此機會に一ツ奮發して故人高井氏の爲めに、夕霧七年忌様の新作を上演する勇氣はありませんか。いや、それ程でなくともせめては、近古の名人によつてよく演ぜられながら、近頃一向舞臺に上ほされない近古劇、例へば羽織落しの如き類を演じて、範を天下に示されんことを切に御勧めします。何故ならば斯かる復古の企は實際君が常に望んで居る新しさをいつも其中に保つて居るからです。

君の技巧について一言したいこともありますが、それは次の機會に譲りまして、私はまだ何んのか一向知らない今回の新作が、君をして眞の本領を發揮せしめるものであれかしと、こゝに衷心から祈つておきます。

中の女蜘蛛郎の

竹連 常磐津 長津 唄名 連

- 「竹本連中」竹本築太夫、同岸太夫、(三味線)重澤團信、同延之助
- 「常磐津連中」(太夫) 常磐津文賀太夫、歌尾太夫、網太夫(三味線) 文左衛門、文之助、三都造
- 「長唄連中」(立唄) 坂東徳三郎、芳村伊十次郎、(立三味) 中村新三郎、中井猪三郎、(小笛) 小川政之助、(大鼓) 玉村辰三郎(笛) 玉村松三郎



鷹治郎斷片

高原慶三

「鹽原多助」の婚禮の場で、鷹治郎の多助は炭ほこりの立つ思入れで、扇子でもつて宙を二三度拂つた。

「基盤太平記」の山科閑居で、鷹治郎の内藏之助は母を見送つて、上手屋臺へ障子ピツシヤリ身をかくす、かくしてもやつぱり母を見送つて、障子の隙間一寸ばかりの間から五本の指を柱にかけたまゝ……たとひ、それが見物に見えても見えやうまいが……であつた。

これが鷹治郎の解釋の一斑である。是非の議論は諸君の御隨意。



「幸子屋」の源藏を近頃やつた時、首實檢のあの性念場、松王の一舉一動にかたづを呑むで眼をそゞとところで、何時になく眼伏せをした。あれは懐中なる丞相傳授の一卷を肌身にしめて

神佛の加護を祈念する心と見たが……立派な在來の型を破るほどの立派な解釋と思はれない……そこで世間の忠告で初日一日でやめて了つた。過ちを改むるにはどかるなけれ、鷹治郎ほどの大家がそうだ、後進諸君一寸心にとめてもらひたい。



「陣屋」の熊谷の物語、俗にいふ平山見得といつて『後ろの山から平山が……』で、普通には左手に扇子を開いたまゝ、地紙の上をつかむで肘を張り、右手も同じく肘をはるところを、鷹治郎は左手を後ろへ廻して、開いたまゝの扉を山形に見せ、右肘を前で張つた。

按ずるに『後ろの山』を利かせたのであらう……これは新工夫で、なか／＼考へたものと感心した。

然し、物語は、普通熊谷系の赤面の武道役は眞正面を向いて

兩脇を張つて肩を上けるところのだが、鷹治郎は上手斜め、藤の方と九十度の角度に座を構へた。恰も盛綱と微妙の對談を繰り返すのであつた。

所詮鷹治郎の藝質は盛綱の思慮の人で、熊谷の勇の人でない。時代より世話の人である。



だから「引窓」の南方十次兵衛「伊勢物語」の紀有常など、時代世話綺ひ交ぜの、丸本式カラクリのギツクリシヤツクリバツタリは鷹治郎の獨壇場なのである。昨日まで八幡の町人、商内の品物、お望みとあらば差上げませう……」などのカラクリも若い役者がやつたら、竹に木ついでギゴチなぞ、鷹治郎がやるとそれがすこぶる滑かに耳ざわりにならない。

そうした折角貴いカラクリの持主が「引窓」で小判を投げる濡髪長五郎の頬に命中して、黒子がとれる……といふところの丸本的ギツクリシヤツクリ、バツタリを、何と思つてか、省略する「氣がさす」といふんだらう……が、お芝居にこのギツクリシヤツクリバツタリが影を絶つた索然たる世界を一つ考へて見て下さい。



曾て、京都南座で「先陣館」の盛綱をやつた。

鷹治郎の出場とは直接關係はないが、盛綱が引込むで、篝火と早瀬の懸合となり、三枚目の伊吹藤太の注進がある。このくだりだけに道具を一杯、奥庭の場といふ餘計なものを使つた。何と誤丁寧至極なものであることよ。

延若 吉右衛門は最初の高二重三段付の陣屋だけ一杯で通すが、首實檢を金襴の大廣間に返して二杯でやつたのは、やはり鷹治郎が最初で今では羽左衛門もこれを踏襲し、歌舞伎座、中座級の大劇場では殆ど定式になつてゐる。

ところが、ところが、更に念には念を入れて、その間に奥庭を挿むだ三杯主義は京都南座で鷹治郎の最新案とする。希くはそれが最初で最後であらせたい。



今夏の技藝座の「鎌倉三代記」絹川村閑居を見て私は次のやうな意見を雑誌「芝居とキネマ」九月號に發表して、鷹治郎に教へ乞ふるところがあつた。

鷹之助の三浦之助は鷹治郎うつしである。即ち「行きつ戻りつとつおいつ」……或は「兼て申合せし計略……」の引きせりぶが全然鷹治郎である。總體に心が先走つて艶やふくらみのないのが疵である。問題なのは……むしろ師匠の鷹治郎へ一考を煩はしたいのは「三浦之助聲をかけ……」を核側から井戸側へ手をつけて井戸中をのぞくが、あれは

誤算である。理窟からいつて、座敷の椽側から井戸をのぞける家なんて、餘り見當らない、又形の上からいつても、井戸側の下手から右足をかけて左手に扇をかざし右手に弓を突く形に及ばぬこと遙かである。もし歌舞伎座のやうな大舞臺なら井戸と椽側は四五間も離れてゐる筈だ。

幸か不幸か、この愚文が鷹治郎の目にとまつてその後會談した時、深切丁寧に私の疑義を明かにして呉れ、しかもお互ひの熱心から、私はかなり無遠慮な口調で激論したのだが、鷹治郎は何のとがめもなく快く私の次のやうな愚論を聞いてくれたのであつた。

鷹……三浦之助のあの行き方は團藏もやつたこともあり、大阪では昔から傳はつてゐるのです。

私……私は東京風かも知れませんが、歌右衛門、宗十郎のおほへてるのですが、やはり扇をかざして佐々木を呼ぶところに歌舞伎的な美しさがあると思ひます。あの兩手を井戸側につかへて井戸中をのぞくなんて、蛙のやうで、寫實かぶれに書きくづした形と思ひます。

鷹……兩手をつかへたまゝではありません、右手に扇を上げ、左手をつかへて奥をのぞき込む、實録なら眞田拔穴ですから大阪城の阪本城まで通つてゐるのですから、その心持をふくめてゐるのです。

私……あゝして拔穴の奥深さを暗示した演り方には異議はな

いのですが、たゞ椽側と井戸側が密接してゐるのは、浪花座の舞臺が狭い都合で出來たのですから、その御都合で來た道具を利用してあゝした形を作ることがいけないと思ふのです。多少ヘンチキ論かも知れませんが、どんな田舎家でも座敷の椽から井戸の水が汲めるやうな家は十中九までないと思ひます。

鷹……然し、あれは井戸と思はれたら間違ひです、あくまで佐々木の拔穴なんですよ。

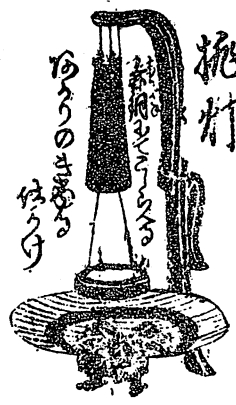
おや／＼井戸にこだわつて飛んだ水かけ論になつて了つたが私は拔穴は承知してゐても、舞臺に現はれたところではあくまでも井戸であつてこそ淨瑠璃作者の工夫を認めるのだ。

この點だけは如何に鷹治郎が芝居道の大學教授であつても、尋常一年生の私は敢然として説服されないのである。

何と諸君、どつちが正しいと思ひます。

(附記)「道頓堀」の鳥江鐵也氏の命令では十月の狂言に因むで鷹治郎の新作を論ぜよといふのであつたが、それは昨年十二月の「舞臺評論」中に相當懇ろに論じ盡したから、希くばあれを参照せられたい。持論として今日も變りないのであり、一概に新作罵倒をもつて快とするものでない私の心持も分てもらへると思ふ。そこで今回は十月興行とは全く離れて、平常鷹治郎に對して多少抱懷してゐた藝道上の疑問や不審をブリズムにかけて責をふさぐことゝした。相變らずの書生論、言葉に多少の毒はあるが、内心は良薬をもつて自ら任ずるものである。諒之

ちやうせん
梶竹



鷹治郎丈の將來

入江來布

『鷹治郎丈の將來』といふ言葉は、少し異様に聞えるかも知れない、鷹治郎丈は、いつまでも若々しく、もしくは若い時代を回想し、その藝も治兵衛や忠兵衛を繰返して行くところに永久の生命がある、即ち將來、今までとは別の境地に展開を試みるといふよりも、今後ともますます過去に若返つて貰ふ所に多くの希望は結ばれてゐるとも言ふべきである。

併しながら、丈自身に於ても、また一部の最負に於ても、殊に經營者側に於て何か新らしい味の加つたものがやりたい、やらせたいといふ欲求があるらしく思はれる。従來にも屢々それが事實に現はれた、將來はそれが一層濃厚になりはせぬかと想像されるのである。私たちが考へると、丈が若返るといふこと、所謂新味を加へやうとする意識的傾向とは必ずしも一致したものでないと思ふのであるけれども、或は丈自身なり、經營者

なりの考へでは、それが同じもの、即ち丈の芝居に何かの新しい構想を加へたらそれが丈の若返る所以だと單純に考へられてゐるのではないかと想像される『新しい構想』といふ事を第一義的に解釋すればいつも新しいものはいつても若々しいのであるからその通りには連ひないが、丈の場合、たゞ新しい脚本を上演したからそれで丈が若返るとばかりは單純に斷じられないのである。

『丈の將來は、もう再び昔しの治兵衛や忠兵衛に返す事は出来ないかも知れない、それならばそれでも宜しいから或は孫右衛門役として、徐ろに實際上、實質上の意味の新境地を開拓し得るであらう、私はまだく丈は治兵衛として、忠兵衛として起ち得る事を信する勿論窮瘡に治兵衛と忠兵衛に限る必要はない、石切梶厚もよし、引窓もよし、その外、丈が自ら希望する

新役柄に向つて自由に進むことは無論結構であつて、私たちが大にそれを期待し、そこに各々將來の新境地を見出さうとするのであるが、たゞ夫れ等の場合にも通じて條件としたい事は夫れ等の新役柄に於てもすべて丈の藝風の傳統に主調を置いたものでありたい事である。換言すれば、どこまでも丈特有の舊劇の方針でありたい事である、丈の扮する役が若役であらうが、また、段々老け役とならうが、それは問題ではないが、こゝに問題となるのは丈の役——否、丈の率ゆる一味の芝居に、異臭の含まれた皮相的な近代的思想を加へやうとする點に存するのである。

思想劇、問題劇は今なほ過渡期であつて、會てイブセンが提供したやうな劃期的なものには現はれない、假りに現はれるとしてもその演出を鷹治郎丈に求めることの見當違ひなるは誰れしも異論のない所であらう、それ等の影響をさへ受け入れ、若くはそれを意識的に取入れやうとする事さへも見當違ひであると誰れしも思ふであらう、而もこの見當違ひに似た事が現實に行はれやうとするから奇妙なのである。

いつまでも色の戀のではなく、道義的觀念、國粹的觀念に新生を見出さうとする、丈自身も大分この方に希求が動いてゐるらしい、本人の希求は他人から彼れこれいふべき筋合のものではなく、寧ろそれは獎勵助長してその自由發展を期待すべきであるが、その假りに名くる道義的と言ひ、又は任俠的と言ひ、

國粹的と言ふ觀念は、鷹治郎丈のためにはすべて舊劇的立場からのものであつてほしいのである。道義は舊道義で宜しい、任俠は舊任俠で結構である、國粹は舊國粹であつてほしい、なまじつかな現代めかした意識的哲學的の附焼刃のものでありたくないものである、丈の役柄が、今後どういふ方面に變化するにしても、丈の今後の使命は、その傳統の舊劇姿態を或は内容的に舊劇精神をと言つてもよい——を後人に傳へる所にある、傳へて傳はらなくとも、また傳つてもそれはどうでも致し方がない丈としての使命はたゞそれを傳ふる能化であればよいのである傳はる方向、所化の人々は色々あらう、或ひは長三郎、扇雀兩丈等の肉身たちに自然傳統する所もあるであらう、弟子たち、朋輩たちにも傳はるであらう、それ等の外に、最も有意義なる傳はり方は見物の眼を通して頭に傳はる事である、見物の眼を通して頭に傳はる丈の傳統は決して新作の哲學的な思想劇ではなくして、丈が本質的にもつ所の（本質といふ言葉が穩當でないならば、傳統する所の）舊劇の味ひである、大阪特有の舊劇の味ひである、また事實上これが丈のためにほんとうの道義的任俠的、國粹的意思想の藝術表現であるのである、例へば昔ながらの紙屋治兵衛、魚屋忠兵衛にも、石切梶原にも、可窓にも及びそれ等をめぐる環境の人々にも彼等獨特の道義と任俠と國粹的發露が見出される、是等特有の道義、任俠、國粹は、今日の皮相的な意識的な附焼刃の思想劇めかしたものよりも内質的に一

層深刻である、その證據には雁治郎丈の新作芝居を見てあまり感激しない見物が、その舊劇を見て多くの感動を起すのも明らかである。

丈を以ていつまでも治兵衛、忠兵衛を繰返せといふのではない、いつでも石切梶原、引窓をやれといふのではない、寧ろ種々の新演出を慫慂したいが、その出し物の選擇標準は、すべて丈の技藝の傳統に主調を置きそれを發揮せしむべきものであつてほしいのである、丈が依然色男役で進まうと、或ひは稍老け役にならうと、それは別問題として、その出し物の主題は、優舞囀有の技藝たる大阪芝居の傳統を承ぐものであつてほしいのである。

金剛謹之助師が病床にあつたとき、吸江博士や一二の知己たちに頻りに演能の秘訣藝道の呼吸を熱心に打開けて語つた、さうして斯ういふ事を言つた。これは常々から自分の後繼者に傳へたい／＼と思つて居た虎の巻であつたが、どうも傳へるに傳へられない悩みに苦しんで居た、今斯うしてあなた方に聞いて置て貰へば、廻り廻つていつかは倅にも傳はるであらう」と、これは吸江博士の直話であるが、圓熟せる藝術家の悩みはまことに茲に存するものであらうとこの話を聞いた時私も切に感じた事であるが、惟ふに我が雁治郎丈も藝道巨師の必然としてこの『圓熟せる藝術家の悩み』を心街かに感じてゐるべき人である。この圓熟せる藝術家の悩みが、藝術の上、舞臺の上で發

露すること即ち今後の丈の至藝である、謹之助師が病中に演能の秘事を識者に語り傳へる所を、雁治郎丈は舞臺の上で大衆に向つて實演を以て語り傳へて貰ひたいのである、丈の至藝は大衆の『目ある眼』にしつかりと傳へられて、きつとそれはよき傳統となり、よき後繼者に――後繼者の何人であるかは豫測の限りではないが――よき血脈となつて流れ傳へらるゝであらう。

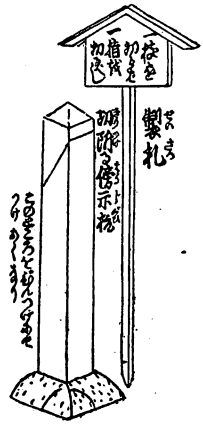
此場合に、よき血脈の流れを中斷し、若くはこれを亂すものは異様な意識的思想劇めかしたものの、演出であると思ふのである。(昭和二年九月)

辨 天 座

初日十月一日
正午開演

文樂人形淨瑠璃一座

- 前 碁太平記白石斷 竹本土佐太夫
- 大序より揚屋の段 三味線 野澤吉兵衛
- 次 近頃河原達引 豊竹 古靱太夫
- 四條河原より堀川まで 三味線 鶴澤清六
- 中 近江原氏先陣館 竹本 津太夫
- 上使の段より首賞檢まで 三味線 鶴澤友次郎
- 切 傾城阿波の鳴戸 竹本 朝太夫
- 十郎兵衛住家の段 三味線 豊澤猿糸

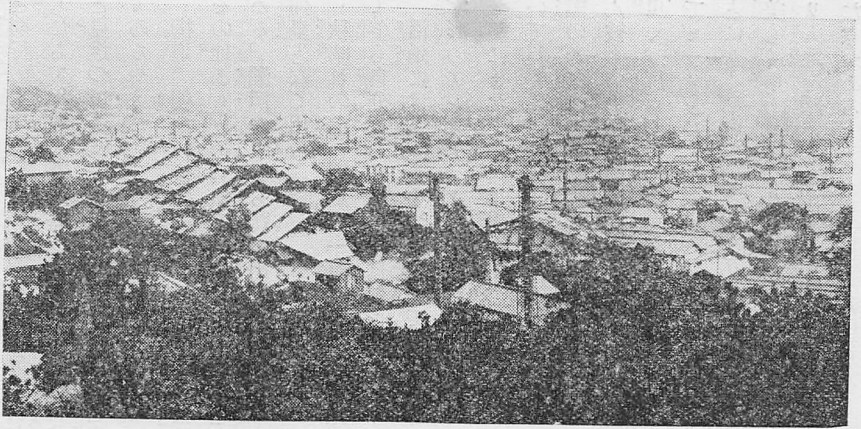


「瀬戸の窯神民吉劇」上演に就いて

矢野 陶々

中座の十月興行に瀬戸物の神と仰がれて居る瀬戸の名工加藤民吉翁の事蹟を上演せらるゝに就いて、其の舞臺意匠を私が引き受ける事になりました。何がさて私共の瀬戸の作家に取ては中祖の神として崇めて居る民吉翁の事として其事蹟に就いては平素餘りによく知悉して居る事と、私自身が陶器作家でもある所から其の舞臺意匠をなす上に於て凡ての事が餘りに實際的に且つ細部にまで行き届き過ぎる憾が絶へず附纏ふので最初は一寸翫つたが併し劇の本質的な立場から私は此の管々しい細々した事は止めて大膽に陶器作家らしき感じにのみ重きを置き瀬戸の情調を強く表現する事に努力して見ました。それで例へば陶器窯を焼いて居る場面でも煙の出る合、又は煙の色などに最も注意を拂つて置きました、それは民吉翁は瀬戸に於て最初に磁器を焼き初めた人で此の磁器と云ふのは焼物の中でも最高火度で焼成されねばならぬものであるから窯の焰も高火度に從つて段々變化されて行くのであります。之等は一見何んでもない事の様ですが此劇の精心から云つても瀬戸情調を表現する上からにも最も必要な事で即ち其頃始めて焼く高火度の磁器を焼いて

る感じと瀬戸で第一に目につくのが陶器の窯で然かも其窯の焰は最も深く観者に印象されるからでもあります。それから民吉翁の立場で其工場内部を表現せる舞臺面に就いても器物、用具等の位置及び形状等も凡て瀬戸情調を髣髴する様に苦心しました。勿論名工民吉の工場なるが故に彼自身が陶器作家としての『好み』と云ふ様な點も意匠を凝らして置きました。之は併し一寸した私自身の作家らしい道樂も或は多少手傳つたかも知れぬけれど其兎に角民吉翁の日常生活振りの一端を表現した積りであり、その他細々とした所の苦心談は此位でやめにして最後に私は製作家本来の立場から申上げたき事は之等の劇に依て作家の苦心と其處にある一種の名工氣質と陶器の尊さとが一般の人に少しでも理解され、ば甚だ結構だと思ひます、此意味に於て以前に大松島屋に依て名工柿衛門が出演せられ今又成駒家に依て我が瀬戸の磁祖民吉を上演する、事は非常に意義深き事と云はねばなりません、猶ほ此陶器作家に關した劇に就て面白いのは一は赤繪の發明者であり一は磁器染付の祖である事なども一寸見逃せない點であらうと思ひます。



瀬戸町全景

瀬戸へ

島江鎮也

街道筋の朝

『名古屋から瀬戸までは何里あるね』

『五里』

『時間はどれ位かゝるかね』

『先づ四十分』

『ぢや急いでくれ』

自動車が名古屋を東北へ突ッ切る、同行三人、大森痴雪氏福井衣裳部長と衣裳方、目的は中座雁治郎新作物の呼物『明暗縁染附』（加藤民吉劇）の宣傳材料を蒐めるためである。

名古屋の町が段々都會の色を失なつて自動車は瀬戸街道にさしかかる。

九月十五日の秋晴れの朝である。矢田川といふも名ばかり白い砂地に所々水たまり程の流れがある川に架つた橋上にさしかゝると、自分たちの自動車の前にトラツクや馬力が數臺止まつてゐる。

橋普請をしてゐるのだ、しかし自動車の通れる位の餘地はあつた、一臺づゝこゝも

と前行の車馬が行きすぎる間、數分を待たされる。橋普請の工夫たちが馬鹿に香氣さうな顔をして徐行する自動車をジロ／＼と見送つてゐる、どうも都會を離れると人間までがノンビリしてゐるやうだ。

街道の朝を行きすぎるトラックや馬力の上には茶碗や土瓶類その他ありとあらゆる瀬戸物がわら／＼と包まれて満載されてゐる。瀬戸の町から送り出される製作品である。そんなものに何臺となく出あふ。

秋晴れの白い街道は一直線、平坦な尾陽平野に土ほこりを立て乍ら自分たちの自動車はドン／＼急ぐ。

沿道には人家がすつと續いてゐる、わら貴、瓦貴の屋根に丁字形のアンテナが立つてゐたのには一驚。

更にまた驚いた事實が一つ。百姓の親娘づれが重い肥車を曳いて行くのに幾組となく出合つたことである。シャツ一枚の色黒のお父つあんが汗をながして梶棒にしがみついて行く、姉さん被りの白粉ツ氣のない赤ら顔の娘さんが梶棒と並んで手綱を曳く、尻からけをしてゐるので赤い腰巻が日に焼けた膝頭の所でヒラ／＼ひるがへる。餘計な所に目をつけた譯でもないが、とにかく都會の娘さんとの對照をフト考へさせられた。都會は美しく塗り立て、生活の秘策をめぐらす、田園の少女はシツカリ大地を踏みしめて力の生活を營んでゐる。とにかく大變な隔たりがある。

瀬戸町役場

瀬戸町の入口ともおほしい田圃のほとり入口、一坪程のトタヤ屋根の掘立て小屋がある、その中に數人の男女がコソ／＼と白い石を砕いてゐたのもなつかしい地方色がある。

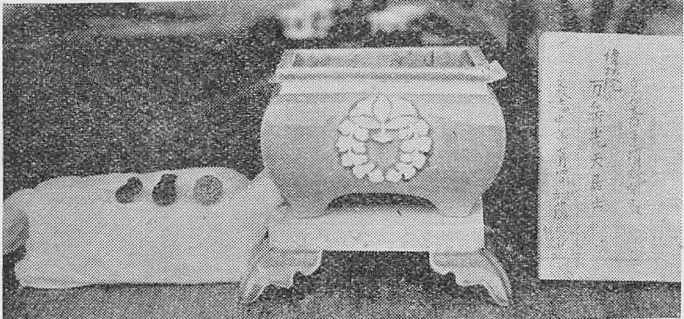
『瀬戸へ参りました』
運轉手が初めて振り返る。

『町役場へつけてくれ』
と命じたので、瀬戸川といふ白く汚つた水が流れてゐる川に沿ふて走る。

三方低い山にかこまれた静かな町の空を見て、自分はこゝにも煤煙の巻があると思つた。

幾十條となく立並ぶ窯の煙突から吐き出される黒煙は、この小さな町を靜かに掩ふてゐる。

この煙！ この煙！ 瀬戸町の繁榮は實にこの煤煙の量



民吉 [拜領の香爐]

が物語るのである。

戸數四千、人口三萬餘、全町すべて窯業に従事してゐるさうで、目貫の通りに煉瓦作りの洋館建て木造の大銀行が二軒、この町の徑路状態を有効に物語つてゐる。

町役場は瀬戸川に沿つて町の中央部にあつて、二階建木造の落ついた構へ、正面の門標の代りに「舜陶」と松方巖公爵の筆になる瀬戸物の看板があがつてゐたのもうれしい。

小出町長や助役と會見、瀬戸町發展のために瀬戸の窯神加藤民吉翁が鷹治郎一座に劇化されることを非常によろこんでくれた。そして丁度折よく役場へ遊びに来てゐた陶工矢野陶々氏を自分たちに紹介された。

『君には一度大阪で逢つた事があるね』
矢野氏が不意に自分を見てさういふ、然し自分には更に記憶がない。

『どこで逢ひましたね』
『確か新聞社で逢つたよ、僕は三趣で展覽會をやる關係から大阪へは時々行くんだ』

書生肌と感じの深い矢野氏はそれから自分たち一行を連れて民吉の窯跡へつれて行つてくれた。

町の一方小丘の上に今も昔のまゝの姿で大きな民吉の窯がある。窯の前には陶磁器の破片が無數に捨てられたまゝになつてゐる。矢野氏はそこの土を掘つて瀬戸物のかけらを拾ひあけ

初期、中世、近世の三種に分けて磁器の色合を示してくれる。窯業の原始時代ともいふべきもの、色合は實に濃厚な空色で太い線の模様を描かれてあつた、近世に到る程それが細かい模様に變轉してゐる。

窯の中へ入つて見るといふので火を投げ入れる口を潜つて中へ入ると、四壁の土は強い火に焼けたゞれて蒼い光澤を帯びてゐる。物凄しい窯の中には陶工の幻想がこぼりついでゐる様だ、それが四壁の土の面に蒼い光澤となつて現はれてゐる。

火を點じた薪を右手に持つてグツとそれを後ろに引き、腰のひねり一つで窯の中へ投げ込む呼吸が陶工の一番ムツかしい仕事の一つだと矢野氏が教へてくれる。

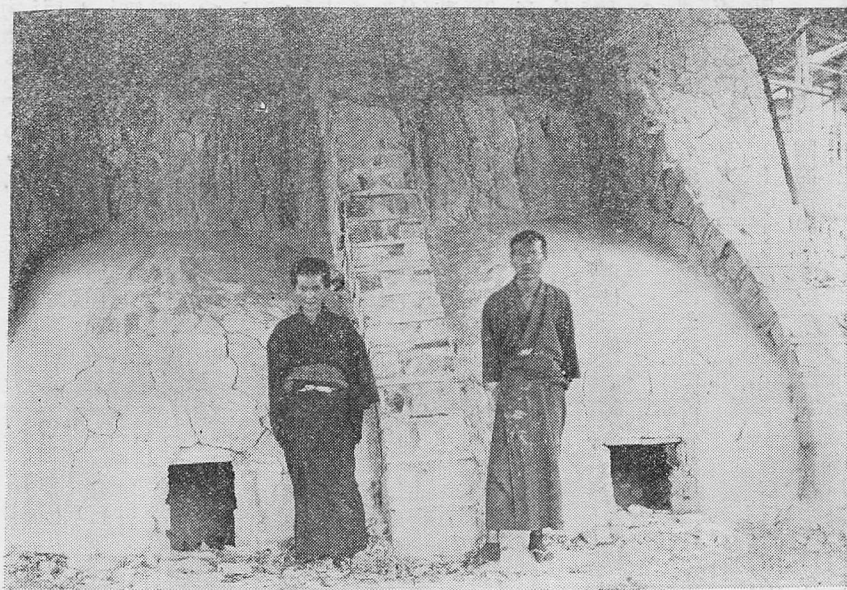
小丘を下りて土をひねつてゐる窯元の工場を見せてもらつた。まるで固練のびんつけでも練つてゐる様に一塊の土を板の上に轉がしてゐる男、水盤の形や茶碗の形に作りあけた土を並べてゐる男。

葉鷄頭の家

矢野氏の家はその小丘つゞきにあつた。座敷がすぐ往來に面してゐると云つた芝居の道具そのまゝの家構へ。

家の入口には赤い葉鷄頭が數本咲いてゐる。風情のある陶工の家である。

『まあ、入つて行きなさいよ』



窯 たい 築 の 吉 民 藤 加

同行四人、矢野氏と共に座敷へ上る。そこで民吉作の香爐を見せ
てもらふ。

加藤民吉といふ人は享保年間の陶工、九州有田に遊んで南京磁器
の秘法を學んで瀬戸に歸り、窯業に革命的紀元を作つた名人である
現在五代目があるさうだが、當人には同行の福井氏がこの以前に
逢つて諸種の參考資料を借つたこともあるので、その日は會はな
かつた。

民吉は瀬戸の恩人ばかりではない、實に窯神である。窯神社は
民吉をまつてゐる。明日の十六日はその祭禮だとの事。

それから民吉の作品や陶工の苦心談を聞いて時間をすごしてゐる
と、町役場からの電話、

『陶磁工組合の人が揃ひましたから松竹の人々に來てもらつてくだ
さい』

といふのだ。午後四時である。
朝の十一時頃から役場の小使や組合員が馳けつり廻つてやつと集
まつたさうだ。

陶工の家の屋根が全部瀬戸物の瓦であつたことも驚かされた。

一本の花瓶

町役場の二階、いわゆる町會議員とか組合評議員の肩書つきの有
力者が数名、自分たち。

『國寶の民吉作品「大花瓶」を何とか大阪へ貸してはくれませんか

是非陳列會をやりたいのですか……」

と松竹側の意見。

『あの大花瓶は國寶だから大事に扱つてもらへるなら貸してもいゝなア——』

一人の組合員がいふと、

大事に取扱つてもらふのは當り前だ、粗末にされたらたまらないし』

と一人が横槍、

『然し、貸すのは考へものですが、もし過失がある様だつたら取り返しがつかないからなア』

『さうだ、辨償するといつてもタツタ一つしかない品だから何十萬出してもらつても追ツつかない、割れてしまつたらお終ひだからなア、これはやはり貸す事はやめたらどうだ、それより

か個人で色んな民吉翁の作品を持つてゐる人があるからそれを狩出して陳列することにしよう』

『それがよからう』

一本の花瓶を中心に、數人の町の有力者の評定は長かつた、のどかである。

それからすべての用件を二瀧千里に片づけて、再び自動車に乗る、白暮の街道を名古屋の町へ。

(終り)

辨天座の人形淨瑠璃

古靱太夫は本年一月興行に『繪本太功記』ニケ崎に出演中咽喉を害して休演以來靜養してゐたが、二月興行に出るべく出し物も久し振りにて得意の『近頃河原達引』堀川の段を語る事に内定してゐたが病勢募つて遂に出演を斷念し爾來南海沿線粉濱町の自宅に引籠つてゐた。それ以來古靱はかうした藝術家の氣性として一度出上演に決つた狂言をそのまゝ引込めるのが残念で堪らず、今日、出演の折には是非語りたいと心掛けてその間半歳に餘る月日を同狂言の工夫研究に努めた、同人の語に依れば堀川は狂言としては陰氣な物であつてその癖語る方には非常な苦心を要する、つまり努力以上に効果の揚らない狂言であるので從來局部的に力を入れて語つてゐたが、此度上演に際して院本を精讀し全體的に派手な所を思ひ切つて花やかに地味で行く所はグン／＼突込んで演る様にして大いに新工夫の語り口で行くと云つてゐるそして休演中は暇さへあれば自宅の離れ座敷に設けてある舞台上に坐つて繰返し／＼稽古を積んだと云ふ、口の四條河原は大靱太夫、三味線道八で聴かせ、人形は榮三の與次郎、文五郎のおしゆ人、玉七の與次郎母、扇太郎の傳兵衛等である。此度の呼物中『近江源氏の先陣箱』秀盛上使の段を源太夫で『盛綱首實檢の段』は津太夫が得意の語り場である。

各狂言の太夫、三味線、割左の如し、
前『基太平記白石噺』大序より揚屋の段まで、大序『前念の段』(渡路太夫糸稻丸其他)『志貴山毘沙門堂の段』(源福太夫糸友作其他)『足利持氏箱の段』中(越種太夫糸可太郎)切(文字太夫糸勝平)『明神森の段』正雪(和泉太夫)谷五郎(島太夫)糸(可)『田植の段』口(富太夫糸次郎清二郎) (源太夫糸友之助八助)奥(つばめ太夫糸勝市)『逆井村の段』中(相生太夫糸歌助友平綱右衛門)切(駒太夫糸才治)『淺草雷門の段』口(越名太夫糸友造友右衛門)切(鏡太夫糸園六)奥(鏡太夫糸新左衛門)『吉原揚屋の段』切(土佐太夫糸吉兵衛)次(近頃河原達引)『四條河原の段』(大靱太夫糸道八)『堀川猿廻し』の段』切(古靱太夫糸清六ツ)淺造猿太郎)中『近江源氏先陣箱』『秀盛上使の段』中(源太夫糸仙糸)『盛綱首實檢の段』切(津太夫糸友次郎)切(傾城阿波鳴戸)『十郎兵衛住家の段』中(綾太夫、糸廣太郎寛市)切(朝太夫、糸猿糸)後(貴風太夫糸芳之助)



金子洋文作 (浪花座十月興行)

芝居物語 髮

山上貞一

それは明治維新前のことある東北地方に起つた一挿話である。暖い春の夜といふに天知殿十郎の家では矢留隊の重だつた武士の堀田武承藤川銀十郎、貴見謙之丞、上田金吾、大貫三郎衛門の人々が主人の天知を中に何事か鳩議してゐた。いづれも血氣にはやる二十歳から三十歳前後の青年達で、烈しい論争は闘はされて嵐の後の静寂が深い沈黙となつてゐた。堀田は天知に裁決をうながした。たゞ金吾のみは諸君の熟考を望んで止まない。即ち此處に現けるべき使者を斬るか生かすかの二つの手段を考へる堀田に對して、それは一城の問題でなく國家の浮沈にかゝる重大事だと金吾は叫んだ。議論の裁決は薩摩の使者を討つことに決つて金吾をのぞく人々は同意を表して手を舉げた。反対なのは上

田金吾一人である。矢留隊の盟約では多數に依つて裁決されたことには不服があつても従ふことになつてゐた。その盟約を破る者は脱退者である。金吾が盟約に従はないと見るや堀田は拳を固めた。「上田、貴様は暫く江戸にゐて何を學んで來たのだ。貴様のさつき言つたことは何だ。(國を開き世界を混合して萬邦を統一する……) 貴様は危険な紅毛人の思想にかぶれて來たのか」と詰問し、紅毛人は萬邦を統一する野望のために開國を望んでゐるのだと言つた。然し金吾は佐藤信淵先生の商業國營を主張されてゐる權貨法を遵奉してゐた。それを以て論ずれば天知等の言葉は痴土の學聖に泥を塗るものである。と金吾は反駁した。天知はそれに反抗した。金吾こそは僅か一年江戸へ行つてゐる間に十年間の太田先生の御薫陶を忘れて敵となつて

歸つて来た者だ。太田先生は討幕開國には反對の人であつた。金吾は思想の相違は師弟間でも得止ない。それに劍術を學びに江戸へ出たのではなく日本の動いてゐるさまや人間生活の眞諦を究めたいために江戸へ出たのだと言つた。藤川は「それぢや君は武士に劍は必要ないと言ふのか」と難詰した。いやそれは今暫くのことこの非常をきりぬける間は劍は必要でない。然し一人一人の腕の強さより同じ考へに生きる同志の結ばれた劍でなければならぬ。だから江戸へ行つても劍術を學ばないで何物にも動じない確固とした考へと意志をもちたく金吾は希望つた。だからといつて金吾は決して堀田等を對手にしても負けないだけの腕の自信は有つてゐた。それなれば何故金吾が歸郷早々に催された春の吉例の試合に出なかつたか。それは感情の疎隔を恐れたからである。天知堀田等の持つ鎖闘攘夷の考へを纏へしめて一致團結して討幕のため闘ひたいと思つた。それにあの試合には世評に過ぎなかつたか知らぬが太田先生のお嬢様を勝つたものに妻はすといふ景物がついてゐたので金吾は斷然出場しなかつたのである。景物！意志を無視されたものは人でなく固體である。太田先生の意志がお嬢様の意志である場合

もある。然し女が相闘ふ二人の中一方の男を思ふてゐた場合、その結果はどうなる。「馬鹿ツ」堀田は吐鳴つた。それこそけがららしい紅毛人の思想だ。それに金吾、貴様は今に日本人が悉く髪を切る時代が來ると言つたそうだな。と眼を怒らせた。

——髪を切る？

——皆坊主になるのか。

金吾は冗談だと笑つた。又本氣に言つたとしてもいふと言つた。「眞實であればどうだといふのだ」と金吾は強く言ひ切つた。自分で手本を示せと天知が迫れば、「貴様のやうな柔弱武士は顔を見せさえ胸がむかつく、これが矢留隊除名のしるしだ」と堀田は金吾に唾をはきかけた。「無禮者ツ」金吾は刀に手をかけて身體を起した。人々はさつと立上つて身構へた。怒りにふえるつと靜かに唾をふいて「お前の唾をありがたくうける。おれは矢留隊を脱退する意志だ」と金吾は刀を抜くやふさふさとした縁りの黒髪をぶつとりと切つた。そしてその髪を白紙に包んで懷中に入れてやおら袴をはらつた。「いゝござまだ」坊主になつて世をくらす氣だらう」と堀田や天知が高々と笑ふのを見返つて「もつと大きな聲で笑へ、おれは最後に貴様等

を笑つてやる」

金吾は強くも言ひ切つた。

2

その翌日の午後である。上田金吾の室では宮武正義が來て昨夜の物語に花が咲いてゐた。元談から胸が出たのだと金吾が笑へは、人間の感傷は時々へんないたづらをする、あんな奴等を對手にするなと宮武は制した。それに殿の内心はきまつてゐた。幕府のため水戸から追ひ出された恨みは未だに消えない。薩摩でもそれを知りながら使者を出した。その使者を殺した時、感情の行違ひからどういふ結果になるかは計り知れない事である。金吾はあきらめてゐた。討幕のためには自分の戀を犠牲にしてもいゝと覺悟さえてゐたが、その美しい心は彼等に通じなかつた。別の手段を考えねばならぬ。

「髪を切つたこの頭でさ」

「名案が浮びそらかな」二人は軽く笑つた。恰好はあまりぞつとしないが氣持は案外よかつた。何を見ても新しく珍らしく、新らしい智慧や考へがどん／＼湧いて來そふな氣がした。永い間の重荷を落した氣輕さ、それに心も身も輕く小鳥のやうに風のやうに、それは秋をうたふ九月の風だ。少しも寂しいことはない。落葉の

轉げる音も聞える。そのくせ誰かに強く訴へた
い。一切を抱きしめたい、一切を蹂躪りたい。
戀を語りたい。血を見たい。戸外では雨が降つ
て来た。「おい、お前泣いてゐるのか」官武は
大降りにならないうちに歸らうと立ち去つた。
金吾はそれを見送つて放心したものゝ如く雨の
降るのを見た。やがて琵琶を取出して詩吟をう
たひ出した。

納言性字胃斯花
零丁借宿平忠度
吟詠恨風源義家
志賀浦荒鰯暖雪
奈辰都古簇香霞
南朝天子今何在
欲望芳山路更余
女中が太田先生の令嬢千代菊の來たのを告げ
た。千代菊は金吾にいろ／＼たづねたいことが
あつた。「まあ千代菊は今更に金吾を見上げて
驚いた。噂の通り髪を切られたのだ。先生もさ
ぞ立腹してゐられるであらう。破門はとうから
覺悟してゐる。千代菊からも恨れてゐるであら
う。江戸に行つてゐる間に卑怯な奴になりさ
つたと卑すまれてゐるであらうと千代菊の顔を
金吾は悲しげに見た。「では御出發前の私との

お約束をも變へなされたのでございませうか」と
千代菊に訊かれてみると金吾は即座に否定した
世の中や人に對する考へがちがつて来た。天知
との試合を拒んだのも卑怯からではなく矢留隊
の首領としての天知と争ひたくなかつた。討幕
開國のために一緒に働きたい。それにあの試合
に勝つた者に千代菊を妻はすと聞いた時、千代
菊はすでに自分のものだ。それを今更に争はね
ばならない筈はない。それは或は先生の承諾を
得るためだとは解つてゐたが萬一金吾が負けた
らどうなる。一年前は天知と立合つても三本の
中二本までは金吾の勝であつた。だが江戸へ出
て一年間金吾は一度も他人と立合つたことはな
い。よし天知に勝てる自信があつたにしても千
代菊を景物にしたくなかつた。人としての千代
菊の心を蹂躪りたくはなかつた。しかし千代菊
は父の許しをうけねばどうすることも出来ない
身であつた。千代菊はひたすらに願つた。お父
さまと私の許へ歸つて来てくれと泣きすがつた
が、それは到底望めないことであつた。一つの途と
して千代菊に古い絆を切れと金吾は望んだが、
千代菊はかぶりを振つた。

「いゝえそれはなりません。お父さまにそむく
ことは私にはできません」

と泣き伏した。金吾は寂しく黙然とした。雨
がはげしく降つて来た。

3

河に沿ふた料理店總清では土間と座敷に數名
の客が酒を飲み賑かに話してゐた。夜の語
り草にしては物騒な噂である。昨夕は五人、一
昨日は二人、矢留隊の荒武者が三人までやられ
たといふので噂は愈高かつた。武士とたてひ
親分衆か、薩摩か長州がよこした間諜か、切
つた髪にはぶらさけておく紙片に「聾人」と書
いてある。(思かなる鎖國の思想は暗き密林よ
り生れる、人々よ密林を切りとれ、而して開國
の光に浴せ)と文句が書かれてゐた。密林とは
髪の中の事。町人は天下泰平で聲高で話し合
ふことが出来た。聾人が髪を切るの鎖國攘夷
黨の武士だけであつた。土間で飲んでゐる職人
が、日本が開國すれば武士も町人もない。土農
工商が平等になるのかと聞いた。それが眞實な
れば聾人は町人の味方であり、矢留隊は町人の
敵であつた。矢留隊の中では三人まで聾人のた
めに髪を切られてゐた。徒黨を組んで町人をい
ぢめ無料で飲みまはるといふのでひどく彼等は
不評であつた。それに今に幕府が倒れ開國すれ
ば四民平等だといふので町人の意氣は軒昂たる

ものがあつた。そこへ六七人の矢留隊の武士がはいつて来た。飲んでゐる人々をきびしい眼で吟味して女中のことはるのを振切つて二階へあがつて行く。二階が騒々しくなつたかと思ふと富裕な商家の若旦那と娘がひきとらへられて降りて来た。男は顔色をかへ女は袂で顔を掩ふて泣いてゐた。矢留隊でも貴見謙之丞は女將を呼びつけた。男女の密會をとりもつ不届き者奴と吐鳴つた。まあまあといふので酒を出して彼等をなだめることにして事件は落着した。「何もなく酒が飲めるか、料理をもつて来い。矢留隊の一人は呼んだ。大貫三郎衛門が狼狽して駆け込んで来た。「大變だ藤川がやられた」それつと言ふので矢留隊の人々は戸外へ飛び出した。聳人様つて天狗の化身かと言ふ町人がある。矢留隊でなく坊主隊だと皆は笑つた。「おれ等の髪を切るんでないから安心なものだ」と町人は沈着してゐた。そこへ上田金吾が這入つて来た。藤川のやうな荒武者が髪を切られるなんて物騒だ。わしのやうに髪を切つてしまつたものにはその心配は少しもないと金吾は笑つた。劑間の甚助が這入つて来た。矢留隊の大將がまた髪を切られたと話し出した。凄いもので聳人といつてもはつきりわからないが眞黒い影が飛鳥

のやうにとんで剣が闇の中できら／＼と光る。あと思ふ間に相手の髪を切つて姿を消す。電光石火變幻妖魔の仕業だと語つた。そこへ矢留隊の人々が歸つて来た。女中たちが酒を運ぶ。人々は胸の鬱憤を晴らすために茶碗で酒を飲み交した。堀田武承がやつて来た。藤川がやられたと聞いて驚いた。櫻の枝に下つてゐた鬚の毛に結んである紙片に「髪を切られて尙鎮國攘夷を唱へる汝等の姿をわれはこの上なく愛するものなり聳人」畜生ッ堀田は怒鳴つた。薩長の犬武士が何がおそろしいと茶碗酒を飲み續けた。「諸君おれは誓ふ。おれ一人の力で聳人と名の痴漢を必ず討つ。矢留隊の仕事はもつと重大だ」と堀田は叫んだ。何いつてやがるのだ。矢留隊の仕事が聞いてあきれれる。矢留隊でなく坊主隊だ。酒に酔つた若者は罵倒した。いきりたつ人々を制して堀田は若者の傍へ行き襟に手をかけてつまみあげた。「腰拔武士とはあれを言ふのだ」と上田金吾の方へ顔を突き出さした。「おい上田久振りであつたな。髪を切つた氣持はどうだ」「おれに聞くよりお前の仲間へ聞け」と金吾は空ぶいた。堀田は飽くまでも仲間が髪を切られたことを否定した。髪を切れば朗かな智恵がわいてくる。鎮國攘夷の迷ひが吹拂はれ

て討幕開國の思想が眼覺める。「そして髪をのせてゐる人間の顔が愚かに見える」と金吾は叫んだ。「貴様ッ」堀田は刀を抜いた。金吾は輕く盃であしらつた。矢留隊の人々は立上つた。「客を扱ふ料理店でそんなものを振り廻さないで酒を飲め」と金吾は微笑した。堀田は抜いた劍の處置に困じて劍舞をすると言つた。貴見が川中島の詩吟を始めた。堀田は掛聲と共に燈を一つ／＼切り倒した。室内は忽ち暗くなつた。「腰拔武士がこゝに居る。とくと顔見よ」と堀田が金吾を捕へたつもりで燈を呼ぶとそれは意外にも金吾ではなく甚助であつた。この時突如と聳人は現れた。「一人討つて見せるとほざいた堀田の髪を貰ひに来た」と吐鳴つた。

聳人だ。
聳人だ。
堀田はさあ来いと身構へた。生命はいらない。髪に氣をつける。二人ははげしく斬り合つた。「堀田とやら貴様の髪は貰ひうけたぞ」すばやく切りおとした髪をとつて飛鳥の如く姿を消した聳人こそ上田金吾である。「髪がない。大事な髪がない。おれは同志に對して面目ない」堀田はおい／＼と泣いた。

二階から黄昏るゝ野の風景が美しくみられる。そこは野に近い上田金吾の隠家である。金吾は手の上にのせたものをじろくんと眺めて楽しそうに笑つた。それは切りとつた女の鬚である。梯子段を誰かのぼつて来た。金吾は狼狽して、鬚を懐中にしのばせた。老婆が官武の來訪をつけた。逢ひたくないと言つてゐる下から官武は駆けあがつて来た。自ら信する思想のためには女などはどうでもいゝと言つてゐたもの、さて他人にとられてみると無心では居られない。千代菊の祝言の夜から金吾は姿を隠した。幸福だらうと金吾は思つた。然し千代菊と盃を交した天知の新婚の夢は安かでなかつた。矢留隊では九人髪を切られて嘲笑が天下に満ちた。やられた奴は透電するかやけ酒を飲んでそれですますが天知はいつやられるかも知れない不安に脅かされてゐた。「聾人とは何者か薩摩か長州の武士ではない。お前に心當りはないか」と官武は金吾の顔をじろくんと見た。

「おいかくすな、君だらう」官武はきつと金吾を指差した。凄腕、所が昨夕また髪を切られた者がある。それは商家の美しい内儀の鬚であつた。聾人が金吾であるとすれば美しい女の鬚

を切ることは信じられない。痴漢の所業か、それは明日になれば分明することだ。明日は薩摩の使者が来る。明後日は城内で討幕開國か鎮國攘夷か議論がたゝかはされる。明日来る薩摩の使者とは聾人のことで途中で矢留隊と討合ふのだらうと官武は看破した。金吾は「おれは知らん」と顔を背けた。明日になればわかる。戸外はだん／＼暗くなつて風が出て来た。官武は鼻をうごめかした。「おや此の室に女のにほひがある」金吾はぎくりと胸をつかれた。老婆が行燈をもつてあがつて来た。女の來客があるといふ。それは先生のお嬢さん千代菊であつた。會つて憎もうと罵り歸そうと隨意だがあの人も可哀そうだ、きびしく叱るなど言つて官武は歸つて行つた。金吾の心は亂れておちつかない。鬚を懐中から出してどう所置しやうかと考へた揚句急いで押入へしまつた。千代菊しとやかに進入つて来た。金吾は變つた女の姿を見て愛憎にふるへた。ことに女の鬚に眼があやしきつけられた。「あなたを苦しめ今自分が苦んでゐるのもみな私が愚かで心が弱かつたためでした。私はせひあなたにお眼にかゝつてお詫び申したかつたのでございます」と千代菊は眼を曇らせた。金吾を忘れることが出来ず、天知を愛そうと努

めれば努めるほど金吾に心を惹かれて千代菊はとう／＼家を出て来た。金吾が言つた二人が救はれる途はたゞ一つ古い絆を断つことだといふのを實行したのである。千代菊は「私はあなたを思ひ切れることは出来ない。何處へなりと連れて逃げてくれ」と泣きすがつた。「いやです。私には不義の道件はできない、先生にそむきその土泥をぬることはできない。」「千代菊さん、私はあなたを少しも愛してゐない。たゞ憎んでゐるだけです」金吾すげなく言ひ切つた。千代菊は聲をあげて泣いた。やがて憎しみをうけるのみな自分が悪いのだと泣きながら歸らうと立上つた。そのふるふるの女の顔を見て急で金吾の眼は怪しく光つた。すばやく剣をとつて立上つて「千代菊」と呼んだ。女がふり返らうとした瞬間、女の鬚は切り落されてゐた。

「千代菊、私はお前を愛してゐるのだ」金吾は狂はげに女に近づいた。

5
ほの明るい小雨の夜である。新川橋畔の船の中から覆面の武士が一人出て来た。「駕籠が来た」その聲を聞いて大勢の覆面の武士が船と橋下

一 浪速座・新國劇の配役

十週年紀念興行の新國劇一座は一日より開場一回興行にて午後四時半開幕(初日に限り午後三時半)第一は中村吉藏氏作「星亨」五幕八場第一幕第一場(横濱税關長室)第二場(波止場の一角)第三場(元の税關長室)第二幕(明治十七年九月)(自由黨北陸大會)第三幕(明治二十二年二月十一日)(石川島禁獄會典獄面會所)第四幕(明治三十六年十二月)(第五議會)第五幕(明治三十四年六月二十一日)第一場(星亨邸宅)第二場(東京市參事會議堂)第二金子洋文氏作「葵」三幕五場、第一幕第一場(天知嚴十郎の家)第二場(上田金吾の室)第二幕(河に沿ふた料理店龜清)第三幕第一場(野に近い上田金吾の隠れ家)第二場(新川橋畔ほの明るい小雨の夜)第三エドモン、

ロスタン氏原作小林宗吉氏翻譯「劍客商賣」二場場景(江戸根岸のほとり文政の頃)(内田と安達の兩家に跨がる庭、晝、夜)にて配役は左の如し、
星亨、上田金吾、鬼塚玄菴(澤田正二郎) 神鞭知常、宮武正義(中井哲)、柳公使、緋絨鎧の男、立川仙平、板木退助(野村清一郎) 太田道灌に化けた男、青井品造、市參事會員の三、老嫗(南吉太郎) 演說會幹事、片岡圓吉、原啓、安達軍之助(根岸若之助) 人足の二、警吏、田中忠造、ある武士(佐藤一郎) 公使館員パーク、緋絨鎧の男、岡菊造、江藤總裁、天知源十郎(鬼頭善一郎) A 國領事館員、猪の男、山井代議士、伊藤正太郎、堀田武承(島居正) 人足の二、道化役者の男、山村七彌(赤井

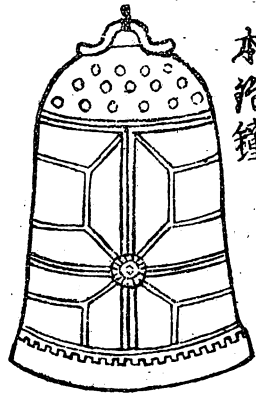
正夫) 來賓の女、ある男(柳木雷三郎) 書生、來賓の女、杉松謙三、大貫三郎兵衛(鈴木萬喜多) B 國領事館員、典獄、市助役、町人の丙(菊岡壽郎) 人足の三、黒裝束の男、井上榮一郎、書生横山、醉ふた若者(河合勇次郎) 來賓、看守の甲、洋服青年の二、貴見謙之丞(島田正吾) 公使館屬黒裝束の男、細川芳正、代議士小田、藤川銀十郎(石山健二郎) 支那人、來賓、卷田新之丞(丸茂三郎) 星夫人つね子(久松喜女子) ルイ王朝の美人、龜清の女將(山路千枝子) 山吹の娘、女中つる、ある女、(春野歌子) 西洋夫人、來賓の貴婦人、千代菊、(二葉早苗) 西洋夫人、來賓の貴婦人、千代菊、安達の娘お絹(長島丸子) 身寄りの母、西洋老婦人、女中(玉澤七三子)

から現れた。駕籠が来た。一人の武士は提灯を切おとした。金吾は駕籠から出た。
「誰だ」
「貴様は薩摩の使者だらう」
「おれの聲を忘れたか」
「誰だ」
「上田金吾だ」
人々は驚いた。天知は「おれたちの邪魔に来たのか」と怒った。笑ひに来た。いつかうけた嘲りを笑ひかへしに来だと言つて金吾は人々に

覆面をとつてくれと望んだ。覆面をとつた人々の中に堀田の顔を見出して金吾は嘲笑つた。
「おい堀田、貴様はおれと同じ頭になつてもまだ鎖國攘夷の思想をすてなかつたと見えるな」
堀田はかつとなつて不意に金吾に切りかゝつた。単独者奴金吾は一刀のもとに切り捨てた。
「昨日まで魯人と名のつて攘夷黨の武士の髪を切つたのは上田金吾だ。おれは貴様等の生命はとらん、髪を切るぞ」
金吾はきつとかまへた。亂闘は始まつた。

「髪をやられた」「髪をやられた」天知をのぞいたことごとくの髪は切られて失つた。やがて天知の髪も切りおとされた。と同時に金吾は肩に深傷をうけた。
「天知、貴様の髪も切つたぞ。いゝごまた。明日の會議に貴様等はその髪で鎖國攘夷を唱へるが、おれは地獄で笑つてやるぞ」
金吾は高々と嘲笑つたかと思ふとそのまま橋の上から河へ落ち込んだ。

水筒鐘



應援歌を歌つた頃

額田六福

月も日も正確な事は記憶から消えたが大正六年の春のある日だつた。下戸塚の穢い、歩けば地震の様にグラク、揺れる私の下宿に未知の若い來客があつた。名刺に『新國劇中田正造』とあつた。澤田君と私との十年の交渉はこの小さな名刺を縁に初つたのである。中田君はその時一座の外交主任らしかつた。で、その用向と云ふのは、

『今度澤田君一味で藝術座を脱退して新富座で旗上げ興行をするつもりである就いては何か適當な脚本があつたら貸して貰いたい。』

と云ふのだつた。その正月に歌舞伎座

で『出陣』を上演してくれなければ、それはほんの劇場へ顔を出したと云ふ位で誰もまだ顧みてくれない中に、こうした懇な言葉に接して、私は中心からよるこんだ。手許にあり合せの本を二三冊出して渡すと、それから四五日してからその中の『暴風雨のあと』と云ふ一幕の現代物をやると云つて来た。

この脚本は私の在郷時代の作で、人と自然に虐けられた農民生活を主題にした作で、現今ならば農民劇とか何とか騒がれさうな（その代り上演禁止になりさうな）作であつた。澤田君はその主人公の暴動を起す老爺に扮してくれる事になつ

た。外に野上女史の『一件』に岡本先生の『新朝鎖日記』に松居さんの『寢臺車』と、四立であつた。

稽古は西月町の澤田君の宅だつた。私は舞臺稽古までに一度そこへ尋ねて行つた。何を稽古してゐるのか、誰と何を話したか覚えてゐないが、その家の上り口から路次一杯にはみ出して脱いであつた澤田の下駄と、その横に堆高く積まれてゐた、赤いそばの器とが妙に今も記憶に残つてゐる。あとで聞くとそのそばも澤田君が家賃の掛物を賣つての振舞だつたと云ふ事であつた。

初日の日には、早稻田出身の先輩の旗

上けを祈するためと、私の作が上演されたのを應援するために、私の級友數十名が團體見物を催してくれた。文字通りの團體で、早稲田の終點で（今とは違ふ）勢揃をして、一つ電車で賑やかに出かけたのだが、その中で、立島君と云ふ愉快な男がノートを引き裂いて新國劇の應援歌なるものを作り上げた『都の西北』の早稲田のエールにもちつたので、

都の名優 澤田のもとに、
集る一團、新國劇團。

それから何とかあつて、最後が『早稲田、ワセダ、ワセダ』の代りに、『澤田、田中、中田ア……』

と、云ふのだつた。節はそのまゝだ。彌次馬の多い事近來無比と稱せられて私の連中は、すぐに各々寫しとつて暗誦して仕舞つた。そしていよく第一幕が終ると、例の立島君と云ふのが、正面二階の中央に立つて、風呂敷をふり立て『都の名優』を歌ひ出したものだ。三十餘人がそれに和して鬨聲をはり上げた

角力や野球なら格別、芝居の應援歌は、蓋し空前にして絶後だつた譯だ。

それ丈けに一時は内外惣立の騒になつた。監席の警官や出方どもは、芝居を壊しに來たと早合點して、目の色をかへて二階椅子の下へ殺倒して來たが、それは故意の聲援と知れて、笑い話になつた。それから一層大びらで若い連中はこゝを先送と『澤田中田』をくりかへした。作者の私は連中に敬意を表するために、ミルクキヤラメルを一個宛くばつたと云ふとつて置きの珍談もあつた。

澤田君の熊澤蕃山が好評だ。久松君は乳母の淺香だつた。深雪は三好榮子君、中田君は旅人、田中君は津山順之助だつた。倉橋君は寢臺車の老人で得意の酒脱さを見せてゐた。が、それも今はみんな別れて、各々に一家を成した。當時から今まで残つたは久松君と野村君の二人しかない。作者も中村さんや岡本先生などの外は、一去一來した。只私丈けは已然として、淡として水の如く、不斷の交渉

を保ちつゞけて來た。つかず、離れず、熱せず、凍らず、濁らず、溢れず、密に君子の交だと思つてゐる。

初芝居は不幸にして不入だつた。新國劇の苦闘史がその時から緋かかれ初めたのだつた。私は上演の禮に、純毛の夏シャツを一枚貰つた。使はやつぱり中田君だつた。何にも期待してゐなかつた私は大變にうれしかつた。以來そのシャツに新國劇と云ふ名をつけて夏の初めと終りに愛用したものだ。跡で聞くと、その損耗は莫大で、一座の人は食事にすら事を缺ぐ有様だつたと云ふ。その窮迫の最中に、彼はそれ丈けの義理を忘れなかつた。私はいつてもこの事を思つて新國劇の今日ある所以はこゝにあるのだと思つてゐる。今の新劇團と稱する輩で、それ丈けの禮に習ふものが幾人あらうか。

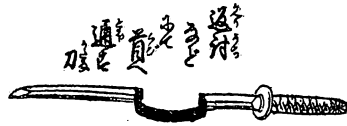
記念のシャツは震災後までも大事にしまつてあつたが、とうとう腹に大穴が開いて、繕も出来なくなつて、仕方なく養育院へ送つて仕舞つた。しかし、澤田君

との交情やぶれざる事は前に云ふ通りである。菊池氏の『父歸る』山本氏の『生命の冠』を同君に懲めたり、且つは上演、交渉の任に當つた事文けでも、私

同君のために何事かをなしたと信じてゐる。新國劇が生れてから十年、私が劇壇へ顔を出してから十年、期せずして不思議

な因縁をもつた譯だが、それをたゞの偶然としないで、廿年の祝には、必然的なものとしたいものと思つてゐる。求めらるゝまゝに。(九月十七日夜)

「新國劇」のその頃



仲 木 貞 一

澤田君が上方落ちを決心した理由を考へて見る必要がある。

同君の親父様が、江州大津で收税長をしてゐて死んだ時、彼はたつた二歳であつた。母親祖母兄弟と共に間もなく出京して了つたが、この大津の三井寺内に生

れたと云ふ事が、何となく上方に氣の引かれる一つの原因。次には、大意氣込みで新富座に『新國劇』の旗上げをしたけれども、大失敗をして一寸世間に顔向けが出来なくなつた、と同時に、當時の東京の新劇界は、それ迄餘りに多くの團體

が、雨後の笥のやうに生配して、然も皆未熟千萬な物であつた爲めバタ／＼と倒れると共に、新劇と云ふと、見物も興行師も鼻を引掛けなくなつた。新富座で失敗すると、『それ見た事か』と皆は嘲つた殊に敵方とも云ふべき『藝術座』の須磨

子は『それ見た事か。ザマア見ろ!』と事實口に出して迄云つたものだ。だから何としても、上方で一旗上げなくちや、土佐つほと汽戸つ子との合の子たる彼は我慢が出来なかつた事が一つ。それから『文藝協會』を出る時にも、又『藝術座』を去る時にも、常に彼の相棒であり、相談對手であり、彼を世界一の名優になれと信じ切つて旺んにけしかけてゐた所の倉橋仙太郎が、暫く上方に蟄伏してゐたのがこのく江戸に現はれて、そして『天下を取るのは今だ』と、まさか紹巴が光秀をそのかしたやうではあるまいが、とに角『上方に行けば必ず芽を吹く見込みはある。お前の藝は、ゼイ六には必ず受ける』と云ふやうな事を極力勧めたらしい、然も當時上方松竹の宣傳部長で白井社長のお覚え目出度き中原指月氏の密旨を受けて來てゐると、斯う吹いたものだ。

これ彼の心を動かした理由の一つ。更に最上一つは小生の心理學的研究の立場

から推測すると、彼は大正三年春松井須麿子の横暴にフンガイして『藝術座』を脱退以來、大正六年五月新富座に旗上げをする迄約三年間と云ふもの、彼方の劇園此方の劇園と身賣りをして働いたが、然もそれは皆失敗の潰れる團體計り。甚だしい時には、雪の北海道で路頭に迷ふと云ふやうな文字通りの御難にも遭遇した。親父さんの遺産で買つたらしい本郷片町家屋敷も人手に渡して今迄相當派手な生活をしてゐたお袋さんが、急にちつほけな借家住居をするといふ一寸した世話場のやうな事があつて、本人も頗る氣をくさらせ、親兄弟や親類からも物笑ひにされ、友人にも後ろ指を差れ通し。で恒産無ければ恒心なしと孔子様の仰せられた通り、彼正二郎もその當時は、ハイカラな浮子夫人を貰ひ立て、でもあつて始終ソワソワく、全く心の安定がなかつた。今でこそぞつぷり肥つたが、當時は青細い目計りギョロくした第二期肺病患者よろしくのやつれ方だつた。

第一この東京なる物が、諸國から馬の眼玉を抜きに集つてゐる目のキョロくした人間の集り、見る物聞く物、皆氣をいら立たせるもの計りだ。而して、彼正二郎は上方のノンビリした美はしい情景を憧れてゐる、同じ河原乞食をするにもあのゆつたりした上方で、清く美しい人と景色の内、氣持にひたりたいと思つたのだ。焦燥の後には人は安易を求め公式通り、彼は上方に憧れたのだ。倉橋仙太郎は、敢て中原氏から金の手附けを買つて來たのではないが、でも、彼の云ふ事を神からの福音程に有難く思つて遮二無二上方行きと斯う決心をした。又興出し物や同行の人員等も整つた。又興行師と云ふか、太夫元と云ふか、彼の友人で金持ちで一寸野心もある阿部氏もこの行に金を携へて参加する事になつた。小生はそれ迄『藝術座』の島村先生の幕下にあつて、脚本製作から舞臺監督から交渉からエキストラ養成からの何でも受けて、然も不不満々でゐたのである

が、そのかされて、よし来たに忽ち引受け脚本を書いてそして女房迄同行でこの行に加はり、新橋驛から三等列車に乗込んだ。時は大正六年六月、雨のそほ降る陰氣な厭な晩であつた。最早これが東京の見納めかと思ふと、ステーションの薄暗い電燈迄が何だか涙にむせんでるやうに見えた。汽車は明石行きののろい奴。一行十數名固まつて淋しく乗つた。金持ちの太夫元先生頗る用心して、餘り金を出してくれなかつたのだ。

京都兩座に五日間、綺堂さんの『新朝顔日記』松葉氏の『寢臺列車』小生の『飛行曲』等を出す事になつたが、一座の花形女優衣川孔雀の問題で、運動は勿論稽古すら全く出来ず、皆眠不足のグラグラする頭で芝居をする事となつたのだから堪らない。それに京都は、六月末には客の來ない月と來てゐる。學校は皆試験最中又は休暇の取り掛り、葵祭の前と來てゐる。さて、その衣川孔雀事件と申すのは、元來この女優さんは（今は鎌倉で立

派な齒醫者の奥さんとなつて三人の子供のよきマ、ーとして模範的家庭主婦になつてゐる）その當時不景氣で仕事を廢してゐた『近代劇協會』と深い契約が結ばれて、何んな事あつても他の座には出ない、出れば協會主上山草人の許諾を得る事といふ八釜しい公正證書が一札入れてあつたのだ。然し協會は最う無くなつたも同然故、相談しなくてもよからうと考へて『新國劇』に参加を約束して入浴したのだ。然るに上山草人は、女房の浦路同行追かけて來て、出演罷りならぬと來たものだ。恩こそ賣つてあれ仇と思はれる覺えの少しもないお前に斯くも文句は附けられる譯はない、貴様草人我が一座を潰すのが目的かと澤田も怒つたものだ。四條橋畔呀や血の雨を降らさうとした所を、小生草人を引取つて、二人で一つ布團にくるまつて懇々と話しをして、そして、草人が兩座の開場を差止める訴訟とやらを引込めさせて、代りに當時足の悪いフラクの浦路夫人を登場させて

派な齒醫者の奥さんとなつて三人の子供のよきマ、ーとして模範的家庭主婦になつてゐる）その當時不景氣で仕事を廢してゐた『近代劇協會』と深い契約が結ばれて、何んな事あつても他の座には出ない、出れば協會主上山草人の許諾を得る事といふ八釜しい公正證書が一札入れてあつたのだ。然し協會は最う無くなつたも同然故、相談しなくてもよからうと考へて『新國劇』に参加を約束して入浴したのだ。然るに上山草人は、女房の浦路同行追かけて來て、出演罷りならぬと來たものだ。恩こそ賣つてあれ仇と思はれる覺えの少しもないお前に斯くも文句は附けられる譯はない、貴様草人我が一座を潰すのが目的かと澤田も怒つたものだ。四條橋畔呀や血の雨を降らさうとした所を、小生草人を引取つて、二人で一つ布團にくるまつて懇々と話しをして、そして、草人が兩座の開場を差止める訴訟とやらを引込めさせて、代りに當時足の悪いフラクの浦路夫人を登場させて

演出上に依る女優讚美

福 隅 一 孝

私は或る日、或る所の、或る劇團で、或る演出をした時の事である。
私は或る場面で、親娘、姉妹の偶然に會合して、各乗りを揚げる時の場面だつたが、薩から開いてゐた妹が走つて來ての、桌詞になる場合、私は或る演出を求めた。
すると、その優の曰く、女形には、そんな事は出來ぬと、云つてのけられた。
成程理屈だ。元々正せば、女でない限り、そう、女になりきれないし、こなしも従つて出來ない、その優の云ふ通り、今までもありきたりな、誰もがする、演出で間に合した譯である。

そこで、私はこの理詰めで頭を下げたが一方から考へて、その優は大いに拙い、研究心の無い、大根役者であると云ひたいのである。
表現派の様に、男でもかまわない、頭に「女」と書いた冠りを冠つてやるのなら、兎に角、頭の先から、足の先きまで女を擬してゐる以上、演出も従つて何處までも擬

お金を差上げるといふ事でケリを附けた
出發前三好榮子は、淳子夫人と役もめで
西下を急に断はり、女優としては、孔雀
以外には、當時まだやつと二三度舞臺
に上つた計りの、いやに内ゼリフで固ま
つてゐる中年者の久松喜世子とカフエに
ゐた若い素人の女優さん二三人といふ實
に貧弱の極まりだから、萬難を廢し、貴
き犠牲を拂つて迄も孔雀を是非舞臺に立
たせやうと骨を折つたのだ。扱て蓋を開
けて見ると、客はさつぱり來ない。まさ
かと思ふ程の不入りで全くがっかり。大
阪から様子見に見えてゐた中原指月氏も
これは餘り非道い、これではとても大阪
に持つて行けないとかう來た。だが芝居
に取り掛ると、中原さん一杯呑みかけた
盃を宙に止めた儘『ウ、ー』とうなつ
たものだ。これは芝居に感心してのウ、
一である。何しろまだ嫁に白粉の塗り方
を知らぬ書生ボヤ、目玉が青くて鼻のと
んがつつた合の子のエキストラ——今の藤
原義江——が出場するのだから、とても

芝居にはなるまい。白井さんに申譯ない
ふさぎ切つた揚句が自棄酒となつた時に
その芝居の素晴らしい出来に中原さんは吃
驚して了つたのだ。藝が巧いのぢやない
皆の熱に驚いろ了つたのだ。田中介二等
は、生れて初めての立廻りに、大勢の捕
手に圍まれると、先づ腰を抜かしたも
のだ。それが又實に巧みに寫實の奴を發揮
したやうに見えて、僅かながらも大向ふ
からパチ／＼と來た。

彼の久松喜世子の出来と來たら素晴らしい
ものだつた。朝顔の方で老女に扮して
いやに古臭いセリフを云ふ所は面を背け
たくなつたが『飛行曲』の藝者と來たら
アツと皆を驚かした。最も彼女の前身は
芝神明の藝者だつたと半疊を入れたもの
もあつたが、とに角見物はそんな事を知
らなかつた。まして、我が中原さんに於
ておや。その意気の張りの具合、更に澤
田の飛行中尉と長火鉢の横で背中を擦り
合はせ、赤裏のどてらを新内の合方に合
はせて中尉の肩に掛けるしぐさと來たら

さなければならぬ譯なのである。
さすれば、あれが出來ない、これが出來
ないと云はれた譯のものではない。

若しそれが出來ないにしても、それに近
いものにして研究してくれなければなら
ないのである。

今までの形で行くのも悪くはないが、そ
れよりも、別な方法で、尤も自然に、こ
う云ふ場合であるだろうと想像して、新し
い新生面を開いて行くのが、本當でないか
と信じてゐる。

そこで、出來ない人に求めると云ふ事は
無理な事であるから、出來る人を求めな
ければならない。

つまり女優である。

ある方面の人は、女優では芝居が縮まら
ないと云ふが、女形の拙いのは縮らないや
うに、拙い女優だから縮らないので、うま
い女優なら縮るのである。縮る所ではない
うか／＼すると、そんな事を云つてゐる人
こそ、舞臺で喰はれ氣味なのである。

轉ばうが、逆立ちしようが、どんな事を
したつて、女は女である。殊に、ヒステリ
ックな笑ひになつてくると女形は、すぐあ
やまつてしまふ。

満場をヨウ／＼と大に妬かせたものだ。我が中原さんは目尻を下けてコクリと一杯あはつたものだ。而して、孔雀の出来は案外つまらない。けれども、とに角入りがないので、三日で打上げ、直ちに大阪に下る事となつたが、八釜しい孔雀と草人夫妻には、此所で分れて貰つた。

中原さんが白井社長に吹いたと見えて宣傳が相當利いてゐたので大阪では客が可なり来た。だが道頓堀で晝夜二回芝居では、狂言は十日と持たない。

扱て二の替りの物がない、何をしやうと云つてゐる内に日は立つて行く。すると、澤田君は『これをやらう』と云つて取出したのは『ひぐらし物語』と云ふ彼の自作になる狂言、新派臭は十分にあるが、山場も可なりある面白い狂言。それをやつてゐる内に『深川音頭』と云ふ物を一晩いでつち上げた。その頃隣の浪花座には山崎長之輔が、開場前入口の外一丁半も客を列ばしたと云ふ程の全盛、それを押潰さなくてはと云ふので何かな

新しい趣向をと云つて案じたのが新式立廻り、それは、何しろ皆立廻り等を全く知らぬ大部屋連中故、本當の立廻りをやつてはボロが出る。何でも胡麻化さなくては不可い、時たま／＼酷暑の事とて、本水を降らせ、ズツクを舞臺一面に敷いて水を溜め、その内で電光石火のやうな立廻りをしやう、それは柔道の手に依つてといふので、樂屋の廣場で柔道の稽古に取掛つたものだ。扱ていよくこの新案の立廻りを行ふ段になると不可いと云ふのは護謨張のズツクは水をたゝえると、ツル／＼滑つて、とても寸時も立つてはゐられない。其の内で立廻らうと云ふのだから、氷の上での鬼ごつこよりも未だあぶない。けれども人間が倒れるごとに、水はばしやりと遠慮もなく土間の見物席にいやと云ふ程飛び散る。その度にワツと云ふ人氣だ。倒れた役者は自分の倒れ方が可笑しかつたのかと思つて顔をか、へつ、奥に引込む。あに計らんや、見物はこの新式立廻りに酔つたや

つまり演出から来る芝居の範圍を、狭められて行く事になるから、結局向上しないと云ふ事にならなければならぬ。つまり、こゝろ演出したら、面白いものが出て来ると思つても、『女形だから出来ない』と來られては、その面白い變つた演出が出来ないから、観客の側から云ふと、それだけ、觀察の範圍を狭められて行く譯である男が女を擬す所に、藝術があると云ふならば、何處までもあやまらずに、女を換さなければ、ならない理屈ではあるまいか。然し理屈はさて於て、劇藝術は、女形一人の藝術ではない。綜合藝術である以上、凡て舞臺の上に流るゝ感じそのみのである。さすれば、演出を助長するセツトの好いもの、照明の精巧、俳優のうまい人、女優の好い人を選ばなければならぬ。斯う云つて來たならば、どう最負目に見ても女形の取得はない譯である。つまり女形が今日まで修業をして來た、體験と、日時を女優に與へるならば、決して女形にまさるとも劣りはしないのである。その一例を引くならば、現在角座に出演してゐる米津左喜子の如きは、好い實例ではあるまいか。

うになつて喝采してゐるのだ。シメくと計り、我が澤正オンタイは、幕切れの月の出に三尺六寸のだんびらを肩にかついで、而して紫色のライムライトの中で目玉を双方真中に集めて大見得を切つたものだ。見物はヤンヤ〜だ。

『幕切れのあの型は何だね？ 舊芝居の型かね？』と訊くと、

『いや〜、あれは東京淺草開盛座で十數年前に見た新派の古式の型だ。何と見物は喜んだらう』と、澤田の答へはかうだ。

實に驚いたものである。實に人を喰つた骨頂の話である。だが、當時の大阪の見物は、これをそんな古臭いものとは思はない、新しい技藝と思つたに相違ない。その證據には、隣りの山長の見物は皆來て了つた。そして、『飛行曲』は、千日前の觀物場でも忽ち模倣されて了つたこの貧弱なる小生を高給で買はうと云つて來たり——それは勿論澤田を買ふ爲めに、先づ馬を射るつもりなのだらうと思

つた——然り而して、一座の連中は、東京出發の時から大した金は貰つてゐないだが、酒の美味い京都に腰を下したのだから年の若い者は、有つたけの金は使ふそして、最早この時には、一座の者は、皆一文も小使ひ錢をなくして、着物を賣つては何とか用を足してゐたものだ。最も多く着物を持つて來た金井謹之助は、たつた一枚の着物を残して皆賣り拂つたと云ふ状態だと云ふのは彼は馬鹿に酒好きであり、そして、遊ぶ事の好きな人間だから。扱て座長の澤田に到ると更に悲慘である。天下茶屋にゐたのであるが、其所から大阪へ通ふ電車代にも、事實ごとかくと云ふ有様であつた。芝居の入りがよくて評判がよくて何うして一座が座長以下皆貧乏してゐたかと云ふと、これが實に面白いのである。興行師と云ふか金方といふか、阿部と云ふ先生が附いてゐても、賦興行と云ふものは、何うしても儲からぬやうに、經濟學上出來てゐるさうで、入りはあつても金が十分入ら

死に角、現在の所、女優が認められて、今日に到つた日時から考へて、體験と修業の餘裕を興へられて居ない事である。この餘裕を興へてやれば、どんな事でも出来るだらうと思ふ。
只私は、その日時の來ないのを悲しむのである。(完)

芝居氣分 (川柳)

夜が明て狩屋々々へ外科を呼び

云ふ迄もなく夜討曾我である。あの時分に外科なんと云ふ専門醫はなかつたそうであるだけになほ面白い。

恐悅を水と酒とで申上け

これは元祿十四年極月十五日未明の光景である。

仕切場へ暑い寒いの御挨拶

御定連の姿見るが如し、と云ふべきものの、御挨拶の御の字が利いて居る。

痴氣をも風邪にしておく女形

昔の女形は無臺外でも女装をして居つたから痴氣では色消しである。え〜どうも風邪の加減でして」と云ふ處——穿つたり突

ないのださうである。

白井社長から澤田君と小生とがお茶屋に呼ばれたが、その時着て行く着物が苦勞をした事もあるで、この狂言が當り澤田の技倆も認められ、此所に一座をいよ、松竹が買取らうと云ふ事に話が進み、中原指月さんが色々又奔走をして、やうやくまとまり九月一日の興行から松竹直營となり、その出し物を又考へなくしてはならぬ事となつた。當時大阪毎日新聞に連載されてゐた『大將の家』とか云ふ海軍大將某の令嬢の數寄に満ちた身の上話しを脚色して上場する事となり、その脚色に當つては、中原指月さんの二階で二晩も徹夜で執筆すると云ふ事になつた何うして、中原氏方で書く事になつたかと云ふと、第一回の松竹興行の芝居に出場するのだから一座の者は皆役のよくなる事を望み、作者の小生にやい、く皆がやつて来るので、煩さくて仕方ないので、中原氏宅へ逃げ出す事となつたのだ。素裸かで中原さんは鐵筆を手傳つて

くれられた。中原さん計りぢやない、娘さんも書生さんも皆徹夜で手傳ふのだ。中原さんは灘の銘酒を冷でグイ、引掛けながら鐵筆を揮はれる光景は、目の前にありくと残つてゐる。随分骨を折つた中原さんは、間もなく中風で死んでしまはれた。その狂言は『秋の唄』と題して滿洲馬賊の大立廻りやら、日本軍人の活劇がある云ふ壯烈なものだ。松竹の命令で、井上春之助と云ふ女形一座がこれに加入して、春之助は女主人公の令嬢に扮した兩方の座員は敗けじ劣らじとしのぎを削つたので、芝居は頗る賑やかなもので、評判もよかつた。この芝居に大成功して、一同は相當の給金をもらひ、着物も新調する事が出来て、一座の者は初めて安堵をし、これから技藝を専心研く事が出来るやうになつたのである。大阪に於ける『新國劇』の成功した最初の様子は、正直な所こんなものである。

— (完) —

昔から湯殿は智慧の出ぬ處

英雄も男伊達も川柳に逢ふと骨灰である。これには義朝も長兵衛も冥土で苦笑して居るであらう。

大道具岩をちぎつて鼻をかみ

有名な句だ、説明にも及ぶまい。

饅頭になるは作者も知ぬ智慧

生島か菓子屋の蒸籠に入つて江島の部屋に通つた事を妬いたんだネ。

親故に迷ふては出ぬ物狂ひ

なるほど、鴨田川でも、櫻川でも、三井寺でも皆子故に狂氣したものの許りのやうである。

棧敷から出ると男を先へ立て

怪しげに解釋する人もあるが、恐らくは、上品な女の、一寸用を足しに出るのにも一々茶屋の男を先に立て、歩く姿を詠んだものであらう。

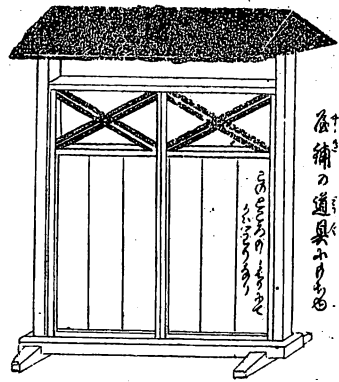
棧敷から人を汚いものに見る

いゝ心持に納つた句だ、旗本の芝居見物だとの解もあるが、別段そう考へるにも及ぶまい。

景清はお尋ねものによい男

かうなつては景清形なしである。「佐野の馬さて首を垂れ尻をすかし」などと共に、悲壯な光景を裏から眺める川柳の常套手段だ。

新國劇創立十週年記念興行
後編の道具ありあり



新國劇創立十週年記念興行

洵に十年といふ月日、經てしまへば何でもないうやうだが、さて振返つて觀ると可成に長い道程であり、且つ相當に變化の多い行路でありました、別けても同劇團の文藝部員として、前後尼かけ八年間御厄介になつた淺からぬ緣故の私としては、その今日の華々しい成功振を見せられますが欣幸と共に、次から次へと去來する想ひ出の影を追ふて、樂しかつた、果敢なかつたさまざまの夢の姿を懐かしますには居られません。

努力の人、煩悶の人

|| 澤田氏と新國劇 ||

行友李風

差當る直面の感想よりもマツ過去の追憶に耽りたくなります。

私が初めて新國劇を知り、澤田氏其他の諸君を識りましたのは、大正六年の夏京都明治座の樂屋で有りました、尤も其以前大阪の辨天座で芝居も觀ましたし、有松曉衣氏作の狂言の舞臺稽古に往き合はせた事も有りますが、事實私と同劇團とを結び付けられたのは、庄野元章氏その他の方のお力と松竹事務所の許諾を得たは勿論であります、拙い私の處女作は澤田氏、倉橋氏その他の諸氏の奮闘熱演に

據て初めて舞臺の脚光を浴びた譯なのでそれから引續き十七種まで同劇團に依つて上演される事になりました、而してソレが私自身に取り、多大なる經驗と、智識とを獲られた點を澤田氏に對して感謝しなければ成りません、尤も單に私自身の作物の上ばかりでなく、約七十種以上の上演脚本の選擇、稽古の相談に與つたといふ事が何れ位私に裨益しましたか、八年間の生きた學問、それは到底筆や言葉に盡し得られる限であります。

私自身に關する咄はこれ位にして。

第一に推賞、イヤ敬服すべきは座長たる澤田氏が奈何に一座を、新國劇といふ團體を藝術的にも物質的にも、有とあらゆる方面から愛し、慈み、育て、培ひ、孕まれたかといふ點で、恐らく過去にも現在にも他の團體には見出せない特色として大いに誇るに足る物がありません、澤田氏は同劇團をソツクリ其儘自己の延長として、氣魄も、勢力も、魂までも打込んで『ヨリ佳き物に仕上げやう』と眞劍になつて努力しました、碎いて申せば開演の手筈、劇場側との交渉、脚本の選擇、稽古の指導、舞臺の監督、極端にいへば繪看板の誂え、端役仕出し、衣裳の配合、背景の色彩、音調の可不可、照明の一暗一光までも自分自身が支配して、苟くも一分一厘たりとも自分に満足しない限り、連日の徹夜位は平氣で以て改善更に改善、充實更に充實に勉め『これなら』とあつて初日を開ける以上、一座の世評は悉く自身自らの双肩に荷つて引ツ立たうの覺悟と信念とを持して時流と

闘ひました、と、筆にして見れば單にこれだけの事かも知れませんが、實際の上から十年といふ永い間、不撓不屈してこの信條を剛行し得る俳優が他に、當代果して幾人ありませうか。

『イ、ヤそれは畢竟楽の健康が許すからだ、勢力が旺盛なからだ、得意の潮先に乗て居るからだ』といふ割りを強ひ索められるとしましても、健康が健康を造り、勢力が勢力を養ひ、得意が得意を迎えるのは皆、澤田氏が勇猛不退轉の心行の賜物でなければなりません。

ソレは私が、幸ひにその實際を知つて居るからなので、脚本の選擇配合といふ事を一例としまして、マヅ文藝部において適當と認める作品を蒐集豫選して氏に廻すと、氏は樂屋にあつては幕間毎に宅に在ては殆んど夜明の三時四時までも次々一種々々それを自身に讀んで考へ、考へては讀み、ズツと一渉り目を通し(殊に近頃では、毎月平均五十種以上を讀むさうで)その上で今度はソレを誰かに讀

天滿八千代座に

顔を揃へる大一座

一日初日の晝夜二部

天滿八千代座に一日より十日まで十日間限り短期興行をなす、我童を始め霞仙橋三郎、大吉、右團次及び壽三郎、嚴笑の花形大歌舞伎は晝夜二部制で狂言は晝の部一番目大森痴雪作『木曾川治水記』三幕、中幕『紙子仕立兩面鏡』大文字屋内の場、二番目『望月』長唄囃子連中。

夜の部は一番目企滿南北作『兒雷也』三幕中幕『實錄先代萩』御殿の場、二番目『生寫朝顔日記』宿屋より大井川迄、大喜利『衆仙人』竹本連中長唄連中各優得意の狂言揃ひ連名は左の如し。

我童、霞仙、福太郎、延太郎、右文治、我久之助、我一郎、豊之助、花橋、右田十郎、みのる、關三郎、ひとし、橋三郎、義直、ゆたか、村右衛門、橋十郎、我兼次、嚴藏、我運童、右若、松壽、卯之助、蓮藏、大吉、右團次、壽三郎、嚴笑。

ませて熟と傾聴する。初めは目から受入れ、次には耳から受入れ、主観的に、客観的にいろいろな立脚地から縦に横に翫味咀嚼する、然うして漸く一篇を獲るとそれを基準として他の脚本を涉り初める色の配合、時間の關係、配役上の差違と思慮考察が八方へ渦を巻いて擴がつて往くソレを丹念に、熱心に纏めて愈よ最後の決定を觀る迄には、十日、乃至二十日の苦心と努力とを要するので。

時には當人の畠田氏よりも、相談に與かる人々の方が疲れてしまひ、遂に紛糾錯綜してどれがどれだツたか判斷も識別もなく成つてしまふが、獨り氏だけは一から十まで明晰に覺えて居て、端役の末にまで周到な用意が拂はれます。

それから本讀、昔は多く自身に讀みましたが、後には自身も座員と共に、その時ばかりは受入れる氣持になつて聽いて觀る、随つて或る場合作者はこの作中の役々に就て、少くもどんな氣持で筆を執たかを参考に資すべく作者に氣を入れて

讀ませて見る、決して形式一邊通り流しの棒讀では濟まさない、現に私が覺えてから、中村吉藏氏の『井伊大老の死』の如き、下關を巡業中、二日續きで本讀を終つた例があります。

配役となると更に大變で、幾度、幾十度か書いては消し、消しては書き、マダ不可ない、モウ一度臺本を讀返す、それでも不可ない、更に別人に配役の意見を徴して見る、モウ大丈夫！となつて『一晩靜かに考へて觀る』随つて、狂言、配役が極ると後はバタ／＼で、稽古、衣裳の誂え、道具帳、聞き物と上を下への大願ぎ『せめてモウ二日も前に極つてくれたら』とは裏方一統の悲鳴でありました。氏は其所まで慎重に、大事の上にも大事を取るといつた風。

『衣裳、臺使用、扮装舞臺稽古』

これも萬難を排して澤田氏の開いた道の一つであります、自分の出場でない幕たりとも、決して樂屋に落着ては居ない大道具の差圖、小道具の指令、時には自

上方の人情を描いた

紙子仕立兩面鑑

片岡我童二た役早變りを以て人氣を呼ぶ盡の部中幕『紙子仕立兩面鑑』大文字屋の場は美しい上方人氣質を描いた代表的世話狂言で大阪を天地として事件は展開されてゐる、大阪上町で名うての大店萬屋の伴助六は大文字屋からお松といふ貞節な嫁を迎へた身を新町の遊女揚卷に深く契を交した。そこへ付け込んで、お松に惚れた番頭傳九郎の陰謀によつて、新清水の浮無頼で、親助右衛門から紙子一枚で勘當され、丹波路に馳け落ちる、お松は實家の大文字屋へ歸つて居たが、日夜夫の安否を氣づかつて居た。お松の兄の榮三郎は非常に律義者で妹に身を賣つて揚卷身請の金子調達をすゝめるのでお松も喜んでそれを承知する。この一部始終を聞いた親の助右衛門は兩人の誠に感じ揚卷の身代金を自ら出しその年季の證文を持つて大文字屋を訪れて。親の慈悲、妻の貞節、兄弟の義理に感激した助六と揚卷は嬉し涙の止めどがなかつた。といふ筋で我童の萬屋助右衛門番頭權八と定評ある二役早替りに、壽三郎は兄榮三郎で

身に植込を運ぶ、障子を箴める、嘗て博多の九州劇場へ乗込んだ時、風景が気に入らないといつて宿へ落着くと直ぐ小家へ駈附け、自ら繪具刷毛を把て隅田川の櫻の情景を描き直しました。

然うして多くは花道に椅子を置き、之に掛つて眼鏡越しに座員の稽古振を監視する、此の時ばかりは藝道に一步の假借もせず『駄目々々、モウ一度!』自分で得心の行くまでは飽きもしないで繰返し演らせて観る、今は別派の人となつたが田中介二氏などとはこの稽古最中に、意見の衝突からお芝居は其方退け、談論風發して遂に終る所を知らずといつたやうな場面があり、今でもマザ〜その光景が思ひ込んで懐かされます。

そうかと云つて澤田氏の自らは、單なる趣味や、嗜好や、性癖に捉はれて、大きな目標の許に働いて居るといふ事を忘れては成しません、ソレには始終『これでは不可ない、此儘では停頓する、何か、

何か?』といふ熾烈な煩悶が絶えませんが、其所に刺激があり發奮があり向上がある次第で『今日の澤田がモウ明日の澤田であつては不可ない、今月の新國劇がそのま、來月の新國劇であつてはならぬ』喩へ一片の標語であるにもせよ、ソノ心持だけは絶えず動いて居ます、私がお別れをしたのは大正十三年の八月でしたが、其以後における同劇團の發展、收獲は眞に愕くべき物で曰く『相馬大作』曰く『富岡先生』曰く『原田甲斐』曰く『雲右衛門』曰く『星亨』曰く『金色夜叉』これだけ有ゆる雄篇名作を矢繼早に上演提供した力は、眞に奇蹟とも云ひませうか。十週年といふ目出度い記念を迎へ得られた澤田氏に對して私の希ふ所は、唯澤田氏自身の健康に幸多かれとばかりです。氏の健康は、乃ち新國劇團の健康なのです。蕪雜、徒らに長く成て相濟みません、眞の『追憶』の一端に止めて擱筆いたします。

活躍するが、靈仙のおまつ、橋三郎の手代黒兵衛はこの度が初役その他では關二郎の母妙三蓮藏の番頭傳九郎など重なる役々で熟演する。

◇角座 初日十月一日

正午十二時 晝夜二回開演
午後五時半

昭生座一派

佐藤紅綠氏作

第一 姉 と 妹 二幕

川村花菱氏作

第二 赤城 の 月 四場

早瀬撫人氏脚色

第三 三人 の 大佐 二幕

梅 島 昇

松 本 泰 輔

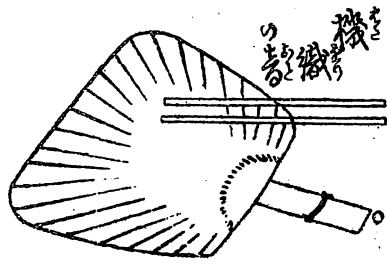
加 藤 精 一

高 田 亘

小 織 桂 一 郎

東 愛 子

米 津 左 喜 子



轉戰の跡

澤田正二郎

私どもの運命である眞黒な嵐の洗禮は、先づ、松竹の向山氏の好意で開演した新富座の旗幟興行を襲ひました。光明と希望と、懸命の努力と、無理算段の懐を盡して、やつと開いた緞帳を、不入り續きの幾日かの後、劇場の損料の代りとして置いて來なければなりません。一敗地に塗る。——當時本郷片町にあつた私の宅には、着のみ着のまゝの敗残の同志が互るに乏しい眞草をつくして、佃煮と漬物に貧しい舌鼓をうつ日が續くのです。

その惨めな籠城生活に、やつと見出した一點の微光——それは京都南座と交渉中の歩興行案の成立でした。牛込に住む知己阿部氏を説いて、やつと旅立の費用をと、のへ、同志の男女優

十一名、そほ降る五月雨の東京驛を發つて雨雲暗い關西の旅へ、忍はる、やうに帝都を去りゆくのです。何と惨めにも又榮ある鹿島立ち。これぞ新國劇苦闘の第一歩、永遠に記念すべき、大正六年六月廿一日の夜でありました。

かうして命懸けで開けた關西の第一戦——それも、恰度上半期の決算期であつた財界の不況と、何よりも頼みにしてゐた學生の大部分が早や夏休みで歸郷してゐたので、初日以来、これまた新富座以上の惨めな敗戦に終りました。

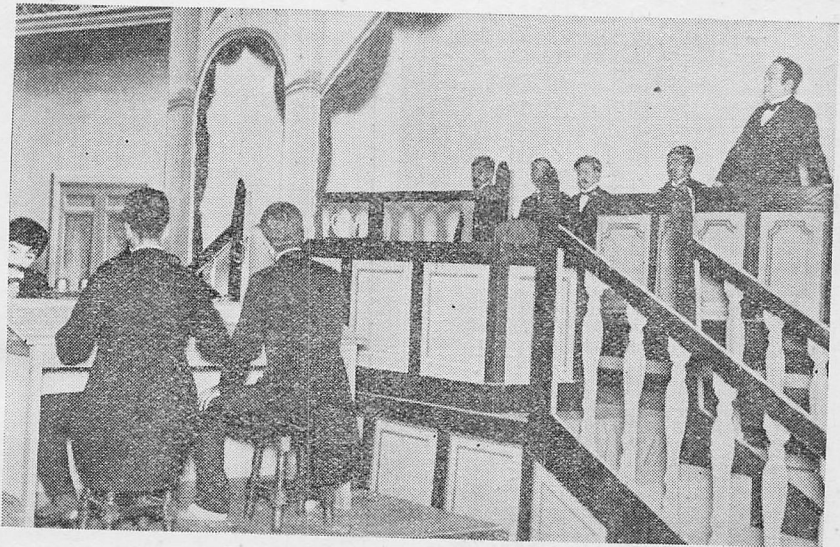
だが、私達は決して失望や落膽はいたしません。無理な手元から、俄かに狩集めた座員を加へて、第二の陣地を大阪へ轉じました。

微苦笑なしには想へない朝夕でした。それは漸く酣となった歐洲大戦亂の餘沫が、この極東の島國にも、未曾有の好景氣を齎らせ始めて、輝かしい黄金の波が、素晴らしい勢で日本の商工界に押しよせきた時でした。

その時です。私は先づ舞臺に立つて劍を振りました。この危険な時代、成金時代、人は僥倖の夢の追ひ、世を擧げて浮華の幻に漂ふ危険時世、此を觀た私の胸に、紫電の一閃を投げたるものは、實にこの劍でした。今、射倖の夢に洗禮を與へ、この輕浮の幻に眞劍の生活を懲瀆する——かくして演劇は是に時代の鑑である、この理想觀でした。この私共をごらんさい。

二六時中、汗にまみれ、脂によごれ、脛を剃ぎ、腕を傷けて懸命の大立廻りこの眞の生活。懸命の努力、その姿を觀衆席へ投げつけることでした。

さて宿にかへつてからが一仕事です十日目毎に替る狂言を作ることで、に



はか造りの脚本家の私は座員の訛彼を前において狂言をしやべつて筆記させるのです。心身ともに疲れ切つた私かウトウトと眠に入りかけて同じセリフを何度もしやべるので、筆を執つてくれる座員に幾度呼びさまされたか知れませぬ。

かうして樂屋の濕つた空氣と、渦巻く舞臺の塵埃と恐ろしい睡氣と戦つて書夜の努力を重ねるうち、漸く一縷の光明が私達の前に微笑みかけました。それは大阪の松竹合名社から私達新國劇に對して今後の提携を申し込んできたことです。處は道頓堀の料亭大華樓の一室、相手は日本興行界に飛ぶ鳥落す勢力者松竹社長白井松次郎氏——二十六歳の白面若輩の私は、かうして始めて日本の興行王と最初の對面をしたのであります。

「あなた、歳いくつですか？」白井さんの最初の質問はそれでした。

「歳は言ひませぬ」私の利かん氣がかう答へました。

「歳を聞かんと話が出来まへんが——」眞面目くさつた白井さんの顔色に、私も今度はすぐ「二十六です」と答へますと白井氏は「あほらしい」と言つたまゝ、カラ／＼と笑つて暫く何も云ひませんでした。そして間もなく「提携してやりましょ」よろしい、やりませう」と相談はすぐ決りました。

大正七年——新しい希望の年は明けて、私ども一座の前にも微笑ましい春の姿が眺められました。曩に京都を去る時には八名にまで減つた座員の數も今は百二十名を算へました。「お目出度う」と祝つて、年始の客も見えました。

ところが、その年晩秋、茲に一つの不幸が、私どもの幽かな平和を破りました。創業以來の殊勳者、倉橋仙太郎君が、不治の病に仆れたのです。

波瀾はこゝに止まらず、更に第二の不詳事が同年十一月、引續き一座を襲つたのであります。恰度名古屋末廣座に出演、行友李風氏の『國定忠次』上演の最中に、私は一座内に分裂運動の企てられる報告に接したのです。しかもその運動は一座中兩三名を除くの外は全部これに加擔してゐることを聞いたとき、私は、豫期した事が到來した様な氣がしました。

が、結局、事件は、中田外三名の自責脱退によつて無事解決いたしました。

花の春も好況裡に過ぎて、縁の夏がきました。長い財界の太

平の夢も、やがて反動の不安の氣配に替かされる時となりました。興行の世界も、今は一齊に懶眠の夢から醒めねばならぬ時です。そこは機を見るに鋭敏な白井社長、茲に私ども久しくの主張であつた一回興行の提案が、漸く容れられることになりました。創業の時代から、洗練向上の第二期へ、私たちは新しい勇氣と、感激に充ちて、長い根城の辨天座から陣を浪花座に移しました。

かうした私たちの新奮闘、新開拓は、その興行の盛觀と、もに、漸く東都の新聞にまで評判を散見し得るやうになつてきました。

その年の暮れ、私たちは更に、中國、九州處々を巡業して新しい年を迎へました。が、人氣はますます高潮して、一座の順調はつゞきました。が其順調の陰には却つて云ひ知れぬ苦闘が續いて居りました。

さて次の願ひは——關西劇壇の荒捲に伴ふ一條件として、豫て松竹へ頼んで得られなかつた東上の交渉ですこれが。漸く容れられて、興行には厄月であるが、愈々その六月に東上と決まりました。思へば新富座の旗擧げに、哀れ一敗地にまみれて細々と逃れ出た東京よ、帝都よ、その後六年、苦闘の私共を果して快く容れるか、どうか——。

お、思ひ山の東京驛——霖雨寂しい六年前の夜、尾羽打ちからした十一名の新國劇座員を苦闘の旅に送り出した東京驛！

今は意氣洋洋、百廿餘名の座員を迎へてくれる東京驛！

さて、歸京の第一戦、それは明治座の興行でした。必勝の意

氣、慎重の策戦、私どもは必死の努力を盡しました。見廻せば

吉右衛門の新富座人を始め、歌舞伎、帝劇、等々、都下大劇場

は各大一座の顔を並べて互に旗色を競つてゐます。この四周の

大敵を相手に、今はもう初お目見得の成上り劇團、いかに招待

券をばら撒いても、都の人はずいとも報いる外、見向かう

ともしないやうでした。暗い沈鬱が、漸く私どもの胸を喰みは

じめます。ところが、お目見得興行の十日目位から、私どもの

明治座の門前にも、ひしく見物が殺到しはじめましたのです。

引續き二の替りは連日の大入満員續き。舞臺は花環の春にか

ざられ、樂屋は絶間ない訪問の客で賑ひました。これでどうや

ら第二の故郷へも恥なくして歸れるのです。

九州中國の旅に秋も更けて、私達は二度目の東上を松竹へ頼

みました。松竹はその時期を、東京劇界の霜枯時十二月と指定

しました。無論私は喜んで受けました。さてこの不利な東征の

陣容は——こゝに見出したものが當時都新聞に連載中の大作、
中里介山氏の『大菩薩峠』です。これを行友李風氏の手に、脚色
して上演することにしました。これが私達の手をつけた連続演
劇の最初です。これはまた素晴らしい好評をもつて未曾有の大
歓迎をうけました。公園劇場の常磐興行株式会社から、初め
て提携の話をうけたのも、實にこの時でありました。この話は、

其後三回目の上京で『大菩薩峠』第二篇を上演中、更に具體的、
積極的に進みました。そして、大正十一年十月一日を區切りに、
六年間の苦闘に却つて得た何萬の大きな負債を背負うて、育て
の故郷、思出多い大阪の根城から、生みの故郷帝都公園劇場に
陣地を移したのであります。

かうして創立七年——あらゆる劇界の波瀾と闘ひ、あらゆる
苦闘の激浪を切り抜けて、漸くこゝに漕ぎつけた私ども、今や
順潮の海路も穩かに、苦闘の後の當然の平和に恵まれながらも、
尚ほ一座員は誇らずお傲らずつ、ましやかな精進を重ねました。

折しも大正十二年八月下旬、池田大伍氏作『名月八幡祭』を
上演、劇界夏枯れの盛夏中にも拘らぬ連日の盛況を喜ぶ最中、
青天の霹靂、或る不可解な突發事件が、私共の平和を攪亂し、
更に續いて、あの凄まじい關東の大震災です。こゝに企てられ

たのが日比谷公園に於ける震災慰安野外劇でした。この空前の
大天災に、恐れ、戦き、惑ひ、傷いた人心、しかも燒野の原の
朝夕は、物毎に恐怖と困憊の思ひ出となつて、慰める術もない
人心に、今こそ偉大なる藝術の慰めを吹き込むべき秋である。
黒く荒んだ都の人々の魂に、憧憬の火を點することである。
けれど震災直前の事件が禍として私共の此企てがなかく、其筋
の語しを得られないのです。國民文藝會の結城氏のお骨折と幹
旋に頼つて、幾日か市廳の門前に佇みましたことやら。ある日
は連日の心勞と疲れに織るやうな人出入のはげしい其門前の

階に座つてすやくと惨めなまどろみに入るのでした。でも心だけは豊に輝かしく。やがて努力と意義深い企ては、あらゆる人の諒解を収得して、都下各新聞社後援、劇作家協会賛同、國民文藝會主催の名のもとに十月十七、八、九、三日間の野外劇が催されました。かうして私どもはいと朗らかな秋の日を浴びて、旅から旅と九州巡業の途に上りました。勿論着のみ着のままの姿で。

旅から歸つたのはその年も暮れ近くでした。が大震災後の帝都の地は、多く焼け爛れた姿のまゝで、まだまだ劇界の復興など、いふことは他の諸事業に比べて等閑視されてをりました。精神文化の復興こそ、一切の復興の力です。私はかく信じて、翌十三年正月一思ひ出深い公園劇場の焼土の上へ私自ら繩張りをし設計を立て母校から恩借した大天幕を張つて其陣を張りました。八月宇都宮大正座に出演中、長らく支配人として一切を委してゐた渡邊正剛、金井謙之助、田中介二、大山泰君外数名の脱退を見るに至りました。曩に大正八年冬、中田以下三名の脱退事件以來深く覺悟してゐた私は、別に驚くこともなく、順運に蝕まれた不穩氣分の一掃期と信じて、更に來る新努力、新奮闘の脚を決めました。その年初秋、私どもは市村座に『城山の月』外二狂言を上演して演伎座に歸り、こゝに我が歌舞伎劇の獨參湯として日本名曲の隨一と稱せられる『假名手本忠臣藏』を伊原青々園氏の舞臺監督で上演しました。この時一畑違ひ「氣紛れ」など、中には謬見非難の聲もありました

が、私どもの目的は一意誠心、燃え熾る一座の演出情操によつて、血と涙に湧く義士の衷情をいかし、そこに名曲の精髓を極めて萬代不川の國劇の粹を擱まうとする理想に外ならなかつたのです。幸ひに初日以後、連日の好評に私どもの過分の企劃もその幾分は報ひられたこと、自ら信じ喜びました。引續き同年冬、大阪寶塚大劇場に出演の際もこれを上演して阪神の見物の高評を得ました。

歸京と、もに憩ふ間もなく根城演伎座に大正十四年の初春興行の蓋を開けました。こゝにまたしても、私共の平和に付物の一大突發事件が出來ました。それは一月廿日の夜『次郎長と石松』の第二幕第三場、小松村閻魔堂の開幕中、突然劇場内休憩室より火を發し、バラック建ての同劇場は見る／＼火焔に包まれて僅か一時間の間、思出多い復興帝都の根城が烏有に歸してしまつたのです。

かく一夜にして根城を失つた私どもは、震災直後、劇場も稀な折柄、果していかに今後に處すべきでありませう。私はまたこゝで、暗黒な前途の彼方に大きな太陽を仰いだのです。果して、私の努力には八方の同情が集まりました。帝劇、邦樂座其他各劇場から續々出演の申出を受けました。これで私等の立つべき舞臺はできました。籠城より野戦へ。それよりも私どもは、直に兩國國技館に出演、演伎座救援の目的の爲に一座百廿餘名八日間僅かに三百圓の報酬で同狂言の上演に奮闘しました。その年も無事に暮れ、その餘力を利して東京朝日新聞社主催

『同情週間』の爲に兩國技館に四日間の寄附興行をいたしました。かくて一步一步、新國劇の存在は、苦難と、もに美事に向上の階段を上につれて、劇界の傾向は、いつしか私の形のみを模倣する剣道流行の巷となりました。劍劇——私は更にこれに代るよりよき何物かを見つねばなりません。二六時中私の脳中には、この模索の惱みの絶え間がありませんでした。こゝに發見されたのが、佛國文豪エドモン・ロスタン原作『シラノ・ド・ベルヂユラツク』であります。これを額田六福氏の國劇化によつて、『白野辨十郎』と題し邦樂座に上演して、大正十五年の新春劇壇に更新の氣を訴へました。果してそれは、文壇、演劇界ともに空前の大激賞を博すると、もに、廿四日間の興行連日立錫の餘地もない盛況を以て、藝術的にも、興行的にも稀有の大成功を収めました。

翌昭和二年の正月、先づ邦樂座に初春興行の旗を翻しました。



かくして四月、花見月の難興行を、久しぶりに東都市村座で蓋を開けました。上演狂言は、私がかねてから肚中に藏した明治藝界の風雲兒桃中軒雲右衛門の一生、藝術の苦惱と、愛慾の争鬭の悲痛な一生を、特に眞山青果氏に乞うて劇化して頂いた『桃中軒雲右衛門』(四幕六場)、これに小山内薫氏作『吉利支丹信長』と行友李風氏作『國定忠次』を加へて、新陣容の他を世に問ひました。果して八方の好評湧くが如き中に、廿四日の大入興行を終へました。

私どもは、更に一段の勇氣と決意をもつて五月上旬を更に市村座に籠城を續け二の替り狂言を出して、これを東都に於ける、私どもの苦闘十年の最終公演とし、神戸、高知、大阪、名古屋に巡業『桃中軒雲右衛門』を携けて十年苦闘の最終頁を飾り、六月廿四日歸京、次の險阻に向ふ門出を飾るべく、茲に新國劇創業十周年の記念興行を催すことになつたのでございます。

== 新國劇といふ名 ==

劇は一國の文化の程度を計る尺度である。國家はその國體に根ざした良風美俗の上に花咲けた國劇を持つてゐる。今日のそれではない、演劇は常に新であることに努めねばならぬ。

中村吉藏作 (浪速座十月興行)

芝居 星

加藤 亨 明

若き税關長星 享は、同年輩の神鞭知常と共にイヌに倚り一人は英書を讀み、一人は英譯された書類を見てゐる。窓越しには横濱の港を見はらされた景。

神鞭 — クキーンて云ふ字は、女皇が、女王

星 女王だ、女王でたくさんだ。
公文書に女王と譯されちや世界の大國の

權威にかゝるとでも云ふんだね。
星の頭裡には單なることに自己が正しきと思ふ處に走る、潔白にして端的である、血に燃えてゐる、熱意の男である、我れは正義の前に

大手を掀るげて、真正面に戦う男である。それの如く、嚴然と葉巻を煙らせてゐる。相手の神鞭知常は、星の性情を悉知してゐるため、内心

我れの方に對しては忍かに敬服してゐる態度にも見える、受附が来て、今日柳公使が出發する

について、便船の用意を命じて来たが、星はそ

れを命令として受ける譯がないと傳へ、問もなく、その言葉の返辭を持つて公使の屬官達が来た、星その人の言葉は直接でなきたため何れかの間違であらふと来たのである。されど星の言葉には二言が無かつた、彼れ等は星の態度に怒りて去る。

今まで黙つて、公使の出發に對して、便船をこ

とわりし者がなかつた。柳公使その他見送り人屬官達の怒りは一通りでない、正に本船は横濱より出港せんとする矢先であるため公使の内心

焦々として、一同を引連れて星の處へやつて来た。

柳 君が税關長か！
星 はア、何か用ですか。

柳 (公使の顔面神經はヒリツとして) 用事は判つてゐるぞだ……オセアニア號へ乗り込まれる様に用意をしてくれ給へ、時間が無いのだ。

關官達はじめ、公使に集まる人達は星のその態度の失しるを見て早く船の仕度をやせよとせめた。星はキツパリと、此れをこつわつた。古來

税關で公使の便船をすることは間違ひであつてその上税關には到底御氣分に満足さすわけの暇がない、仕事如山程ある、且つ命令としてはその意を金ふする譯けのもでない、と云ふ。時

間が来る、星の一言は正義である。ほとく弱りし柳公使も、茲に改めて殆んど哀願的に頼む。——頼まれて見れば、越後から米つきに来るとまで云はれてゐる例にも……星は早速公使の便船を出して芽出度本船オセアニア號へ乗り込ませる事になる。稀なる一事件が終つたが、星の年來の望みは、現在胸中にある税關の公均である、外來より来る物品に對して盛んに脱税を行つてゐることを星は早くも知つてゐる、だが、今までの關長は誰一人としてそれに正言を浴せる者がなかつた。それ程にも外國領事に對して一種の恐を抱ひてゐるのであつた。星は茲に極たんなる制裁を加へ様と、忍かに神鞭と語らつてゐた。眞な神鞭、星等はその機を待つてゐるのである、時は正に熱さんとしゐてる、海上にはかすかにインチアン號が波止場に這入らんとしてゐる。星、神鞭二人は、書生に其の意

を通じて波止場に走らせた。

波止場には支那人の物賣、波止場人足等が今か〜と、本船インヂアン號の着するをまちこがれてゐる。其處へ星の意を受けた書生が来て人足共を集めて何事かを駈いた。

沖合で汽笛が鳴ると、船客の人達は上着しはじめ、やがて人通りも稀れになつた。頭人足達は三三五五と散ばつて窺つてゐる。本船のかけから一つの荷物が運び上げられて上手に行きかけ、急に方面をかへて下手へ向つた、西洋人の番頭が飛び出して「ヘシツ、シツ……」と上手をさす、番頭は大股に走りかゝつていきなり人足の腰を蹴る、ついでに他の人足も荷物を下手へ運びかゝつて来るを向ふかけからBの西洋人の番頭が出て来てその人足を突き飛ばす、波止場人足の一角合圖の持の赤い小切れをふる、

此處に一大亂闘が開かれて西洋人番頭Aは海中へと落ちた。税關使の甲乙が来て此れを救つた、一同の顔には何事かの怒を現はして、税關長の方へと向つた。

脱税品をすつかり運びこませて星と、神鞭は内心喜び満ちてゐる。間もなくA、Bの番頭達が来た、物品を返してくれと怒鳴つて来た。

星 脱税品だから引渡す事はならん。

番頭 A エッ！脱税品！
同 B それでは困ります税金出しますから引渡して下さい。

同 A これまで此處の税關そんなむちやなことしません。
星 税關は、脱税品を見て見ぬふりをしてゐたのが間違つてゐたのだ、吾輩は條約の文面通り處置をする。

政道ききに正しかればこそ、その言語暴慢になるとも外人此れに柄つくの術なくして罵言を殘して入つた、だが、我等にも一つのたのみとするパーク公使が表はれて彼、星の横暴を訊した公使は附言して英譯された、女皇と女王との問題を持ち出し、加え、物品横取は、貴君の差圖であるだらふと詰めた。星は言下にノーと答へて口敷を利かす、焦立てるパーク公使は、星

をして強盜、泥棒と罵言を浴びせた、果ては日本人大泥棒と怒鳴る、流石の星もパーク公使をしたゝかに撥つた、喧騒に渡る税關内には、早くも大勢の係員が現はれて一大混亂に化した、正に正義か不正義、神は星をして公平なる裁きを與へ様としてゐる。

明治十七年九月、新潟、西堀通不動院に於て星は自由黨の巨頭として北陸大會に出場してゐる人物は、星享、加藤平次郎その他の辯士幹事有志者、壯士、刑部、巡查、嚴肅なる内に開かれたる此の演壇には星は流詞に天下の輿論を今傍聴者に對して論じてゐる。彼れの論旨は「政治の限界」と云ふのである。

星 あらゆる物に限界、即ち限りあるものであると主説する、例をロシアに取り、獨逸にかり、兵役にうつり、兵役は國民の義務であるとして、首つ玉へ繩をつけて引づり出すと云ふ強制度である、兵隊は成る可く少數に限る、なぜなれば兵士多ければ勢、外國侵略を目的となし、戦はんかと思はれ、かるが故に結果から論ずれば自ら滅亡する様な事になるかも知ん……

警部 辯士注意！
何處か注意をせられし星は、主論を弱めず思ふがま、に進めて行つた、

星 君が全體が悪いと云ふが、僕はまだ全體を論じてゐない、まだ半分位しか論じてないのだ、それが君にどうしてわかる。

最後に解散を命ぜられた星一黨は一單は反抗をして見たが法を外にして誰れが此れを正義と組みしやうぞ、只、星を敬する者の集團のみ相集つた。時の流れと共に星の一徹は天下の志士

問に問題となり、ある者は此れに組みし、或る者は、此れに反對をする者も世にまたある可きこと柄である。政道にあつて、只一筋の誠意も眞實知るものなく、不慮なると云はんか、明治二十二年二月十一日憲法發布大祝日、石川島禁獄舎に收容され、明らみの世界に飛躍する術なく、暗黒の一室にその天分を陽かげとしてゐたなれど、當日は大赦となつて、星亨はじめ、片岡圓吉、加藏平次郎、井上菊一郎、熊谷三平、石山眞澄、細川芳正、荒川高藏、天本彦一等は出獄するのである。典獄の涙ある言葉も星の耳には何んときゝしぞ、只、悲しむ可きは、友上野當左右の獄死である、出獄の喜びあらば若し昨日にして上野の死を悲しまずなられ様、鬼の眼に涙と云ふか、友を思ふ温き涙は星ならでは無き友情の誠意である。星は典獄にねがひ上野の死を白衣に包み、寂しく天にかへる死骸を闇より明天朗なる世界へと運び行く様こそ、天地、此れに涙なす者ばかりであるまいか遠くに響くカラクタ音楽は憲法發布の大祝の音楽か、將又、星一黨の出獄を祝せんとするか？四七年の星月は薊の道を通つたものゝ如く、額の浮かぶ皺も一刻の感あり、星その人の人格も輕重を答はず政界の巨星として動かせざる大

人物となつた、されど、四を滅して六の偉いに出づるは多くの犠牲と、倒れ行く者の血を吸つてゐる、吸血兇！、世人はその人を憎むとも、政道につくせし業成、誰れか此れに敬嚴に打たれざるを得ない、張切つた我れの四十年來の生涯は鋼鐵の如く風になびかす、岩石のすきまに生へし草の如く、生きんと、伸びんとする望みこそ、政治に全力を盡す念願より他ない。妻に對する心、伴、明に對す父としての心、舊友神祇に對する友情も、人生の何事かを悟らずして、今日あつて、明日なき生命と星に語らし得やう。

明治三十四年六月二十一日星邸にあつて、妻に向へる星は、伴を中に置き己が無き跡を語り伴の行末を案ずなどは、星の性格として何にか暗黒なる暗示をしめしてゐるのではあるまいか！且つて星邸に召かゝえし女中と、横山の問を星は婚約を整はせて、彼れは味方少なき市參事會議室へと出かけた。市參事會議室に來た星は市民を思ふ誠心より彼の港、彼の町と、便宜の配慮を諸氏と共に語らつてゐる。

神ならで知るよしもなく、星亨に近づきつゝある刺客は一刻／＼と迫まつてゐた。給仕が一枚の名刺を持つて星の前にあらはれ

た、星は今わずらはしきをまぎらすため友と將棋を打つてゐた。給仕の言葉は耳に入らない、おりから五十前後の羽織袴着の伊葉正太郎が現はれた。

伊葉 孔孟道德は勿れ主義だと罵倒しましたね
 舊い道徳なんか蹴飛ばして、何んでもやれ、彼んでも爲せて君は云ひましたね。

星 君は誰だ？
 伊葉 己れは伊葉正太郎……この國賊を倒しに來た。

伊葉の手にせる白刃は星の胸に深く突通された。國賊と罵られ星は倒れた、國賊とは！星その人に與へる言葉か！四十年の長き……されど彼れには望み大きければこそ短かき月日を只一言の國賊に依つて倒れた。

成す可きこともまたあつたであらふ、望みの果に輝く花の夢も見ずして？、市參事會議の板に一滴の血潮で染めし星の魂は、示怯に忘れ得ざる名残のうらみを抱きて示眠した。

空に輝く太陽は示遠に不變なるものなれば。星亨その人の人格は正義の言葉を與へる者何處に……

喫煙室

高橋 蓼雨

松竹座の新曲舞踊『保名物くるひ』は、竹本、長うた、常磐津、洋樂の合奏。

作曲ができるとそれを蓄音器へ吹き込み、林長三郎玉屋町の自宅へ閉ぢ籠りて二十一枚のレコードが吐き出す文句によつて不眠不休で踊る手を考案、二週日の興行に一ヶ月の稽古。

とりわけ、初日まへは、松竹座普通興行打出し後の十一時から拂曉まで、窓からさしこむ皎々たる月光の下にて瀧なす汗と戦ひつゝ女優相手に踊るさま、到底常人にては爲す能はざるどころ。

作歌者南北も感嘆。
「目下、自始自造の新舞師家とし

て帝國に誇るきの、東ん市川猿之助あり、西に我が林長三郎あり」
まるで日比谷の永井柳太郎。

浪花座の「三右衛門の賣出し」の壽三郎役の三右衛門を投げ込む池へ何か生やさねばならぬ。
あやめ、柳蓮、

と評議なかば五分刈あたまの粹さま陶然と入り来り。
「こゝは赤坂の丹前風呂といふて浮氣な女ばかり集まつてゐるところゆへ、絶対に蓮の葉に限る」
この人到底、内閣總理大臣になれぬ。

成駒家の「明暗縁染附」を上

演交渉のため、松竹の福井衣裳部長、愛知縣の瀬戸町へ出張。
なにがさて、土地の瀬戸物の古事來歴が芝居に脚色されて大阪道頓堀中座にて上演されるといふので、町長は臨時町會を召集して議し、福井部長を下へも置かぬでなし。

それはよかつたが、中央線の列車と名タクとに撞られて臀部がびりり、フワツ。
この、尻のもつて行きどころなし。

辨天座「雨の古沼」
多九郎がお秋を手ごめにしやうとする刹那、燒酎火に薄ドロにて小平次の亡靈が出て多九郎を悩まし、且、我は、この多九郎の毒切に掛れたのであるから仇討せよと妹へ告げる。
満場急眼の拍手。

「まだ、面白いのに検閲で削ら

れまして……」
「そのかはり、餘韻がのこりませう」
「濃厚篤實、恰も大宮人のごとき吉村主任も色をかへ。」
「ウダ」と、紅梅亭の考え落で
あるまいし」

樂天地の菊人形は。
燕手、生じめ、大白、鬢しか、ツブ、色茶釜、むしり、兵庫、結ひ綿、ふきわ、文金島田、その他いろ／＼の鬘を冠つてゐる。
案内の女給さん切禿のかづらを見つて。
あほくさ、モダンボーイで、昔からあつたんやし。

梅島昇は小織等と角座へたてこもり、湖落せる新派脚のために背水の陣を張り、捲土重來天下を風靡すべく、脚本も新らしいものがいゝとあつて、木村錦花作「眞景

果ケ淵」を撰むだ。
梅島、故遣りの薄白い烟の中で
鬚抜と首ツ引。

一素敵にいゝ役だが、この深見新
五郎がお圃を口説いて肘鐵を喰ひ
赫ツと怒るとこるを彼の女が顔に
來たら泣くであらう、あゝ、役者
には誰れがなる、チユツ」と風啼

◇

九月の中座にて粹一鶴が望外の
大役に、生母何子の心配一方なら
ず。

朝は星を戴て神社佛附へ一鶴
の成功をいのり。夜は穿屋へ詰切
つて間髪を容れぬ急はしき着替の
ひまにも冷やしたソーダ水を取
て溺いた咽喉を濕さす等、まこと
に涙ぐましいものがある。

「一鶴さんはいゝ母があつて幸福
です、生存中に早くスキートホー
ムをね」

一鶴、紅筆にて眉毛かきつゝち
よつと此方へ向いて白い齒をチロ

り。
寡言家坂東一鶴の返辭はたつた
これだけ。

◇

陶淵居主人、横綱の土俵入然と
大阪放送局へ巨艦を運び。
「芝居の離子と鳴もの」と思する
鳴もの入の講演放送。

「篠入合方、これは世話場の腹切
または手負の場合につかひます
禰の勤、は土手墓場等、物凄き場
に。琴明は金襴物の幕あきに。

早笛は、テンテレックと太鼓を
敲く時の笛、忠臣藏五段目の猪の
出等によくつかひます。
清瓶は女郎屋にて。在郷唄は百
姓家の幕あきとなり柿の木をこ
といつたもの。相の山は鼓弓入の
物語に。室神樂は菅原の車場等に
四ツ竹はお岩の髪梳等に。早舞は
大名が怒つて席を蹴立てる場合、
たとへば三段目の若狭之助のは入
り等に。

一聲は山または海の幕あきにピ
ユツと強く吹く笛。シヤギリは幕
の締る毎に止め柝からかゝる鳴も
の……

酒々數萬言、得意の講演最中に
ドタンと物凄き音響。
常陸山そのけの陶淵居主人、
眞奮になつて章駄天でかけ出した
が再びマイクロフオンの前に立つ
て。

「唯今ドタンと音がしたのは、私
の前へ山のやうな氷が落ちたので
した、これが、木か石なら大丈夫
ですか、何分相手は氷のこと、私
もひやりとしましたから放送はこ
れで中止します」 JOBBK
ずるい。

◇

松竹事務所には夕方に大勢居残
つて六角形筋入の平盤の上へ、赤
青、黄の瓢箪の木屑をのせてピヨ
ン／＼飛ばしてゐる。

來客があらうが、食べさしのラ

カスカレーの上へ颯が集らうが、
妻君に産氣がついたから歸れとい
ふて來やうが一切お構なしに頭か
ら湯氣立て、戦ふてゐる。

模綱は中谷選手、この堅壘を抜
くものなし。
まけた奴が佛頂面。
「お金儲けにあの手が出たら奥さ
んが嬉ぶのに。」

◇

同じ事務所の金網の中には。
「へい、お願ひましては一萬圓也
おさしが二萬圓、合はして三萬圓
也、御名算也」なんて、互に賞め
合つてゐる。

それは、魔法瓶のやうな太い足
へ、づなしの純白の靴下を穿い
た白粉、口紅コテぬりの耳かくし
連。

口の悪いのが。
「据へニユツとブラ下がつてゐ
る太い大根二本でなんばだす」

エドモン・ロスタン原作
小林宗吉訳案 (浪花座十月興行)

芝居
物語
劍客商賣

江戸主水

老いたる浪人卷田内膳と安達軍之助とは、土堀一重の隣同志に住んでゐた。

ところがこの兩人は日頃互に犬猿の不仲で一方が低脳と罵れば、一方は茶瓶と嘲り返すといふ、老人の一徹、互に譲らぬ唾み合ひはいつか兩家の下男同志へまで感染してこれも又主人以上の敵同志のやうに争ひ續けるのであつた。

『お前の家の櫻が散り込んで困る根元から伐るぞ』と、片方が怒鳴れば『散つた花片を皆返せ』と罵り返へすやうな始末である。誠に厄介極る隣同志ではある。

では仲々承知しない、其處でこの遊手に出て、子供同志の想ひを募らせやうと企んだのが兩老人のこの狂言である。

それとも知らぬ新之丞とお絹は何時しか葛の葉影の土堀の破れ目から人目を忍ぶ仲となつた新之丞 この前、この下にかくして置いた私の手紙、ごらんになりまして、

お絹 はい、拜見いたしましたいつも櫻の枝が落ちてゐる壁の下にお手紙が置いてあると前に知らせて下さいましたので毎朝、人知れずこゝをさがしてゐるので御座います。そしてお手紙は毎日肌身離さず持つて居ります。

新之丞 忝なる御座います。わたしは朝晩どれ程貴女のお聲に氣をつけてゐるか知れませぬ。

お絹 私の聲が聞えまして。新之丞 どうかすると風の具合で聞えます、そ

してあなたのお歌ひになる琴歌も。

お絹 まあ、恥かしい。

新之丞 いゝのです、聞えた方がいゝのです。わたしはそれを聞くのを楽しみに生きてゐるのであります。

お絹 愆うしてゐると悲しくなるばかりで御座います。

新之丞 さういへば、この前手紙で書きました、が、あの妹背山のお芝居、御らんになりましたか。

お絹 はい、父に伴れて行つて貰ひました。あんな悲しい芝居つていまだ見たことは御座いませぬ。

新之丞 丁度、貴女と私の身の上でゐます。とまるで妹背山氣取りで啖くのである。やがて二人はその夜五ツの鐘を合圖に同じ場所であふ約束をして別れる、この様を見て膝を打つたのは双方の老人である。

『首尾はよいぞ、二人の縁組は成立する善は急げだ、早くまとめてやらうではないか』と卷田内膳、勿論安達も異存はない。

『それは目出度いな、お互ひに男やもめで兩方とも親一人子一人だからな、二人をまとめたら既うこの壁を取り壊して仕舞はふぢやな

いか」と乗氣になる。

『然し今更狂言の底を割るのも拙いし、如何致してお互の仲直りをしたものでござらう』

『さればこゝに名案がゐる』

其處で卷田は、劍客鬼塚玄蕃を呼んで何事かを囁くのであつた。……さて、其夜の五つの鐘が鳴る頃、若い二人は件の土塀に忍び合つた。

新之丞 お絹様、へ。

お絹 お、新之丞様か。

新之丞 ようこそ来て下さいました。私はどれ程五つの鐘の鳴るのを待つて居たか知れませぬ。

お絹 私とても同じことでういます。

新之丞 今宵始めての嬉曳、こんなうらしいこととはういませぬ。

お絹 ほんとにこのまゝ、何時までも居たらうります。

新之丞 二人がこれほど戀してゐるのに二人の親は仇同志、今にも生命のとりにやりをしかねまじい争ひの仲。

お絹 このまゝ一緒になれぬ位ならいつそ二人は此世から……。

新之丞 死ぬることはいとやすけれど、死んだ

後から親達は、どんなに嘆くでういませう。

お絹 其れが口惜しゆうございます。人間の愛がどれ程強いか、あのかたくな、父どもに何故判らないのでういませう。

新之丞 其方の心のいちらしさ新之丞何と申してよいか判りませぬ。

お絹 お、新之丞様、と果ては感極つて抱き合ふのであつた……と突然暗に現はれた覆面の曲者！物を言はずお絹を淡つて行かうとする。新之丞は必死になつて刀を取つて立ち向ふ、意外、勝負は一人の新之丞が勝つて四人の悪漢共は雲を霞と逃げ去つた。

其處へ駈けつけて来たのは双方の親達であつた。安達は娘の無事な顔を見て狂喜する。

『お、娘怪我はなかつたか』

『すんでのことで曲者に淡はれるところを、隣りの新之丞様に助けられたのでういます』

とお絹はまだ身體をふるはせてゐる。

『何、隣りの御子息に救けられたと、となり御子息に……』

安達軍之助の眼は感謝にかがやいてゐた。

『うむ然うであつたか、さうであつたか。……卷田殿、今までのことはお忘れ下さい、

今日までの無禮はお詫び申す』

『お、安達殿、左様に仰せらるゝなれば拙者とても今迄でのことは水に流すでうと、卷田も狂言は仲々上手である。

『ついでには一つの所望がゐる兩家和合のしるしに御息女をお貰ひ申したい』とすかさず縁談を申込む、安達は意外な面持ちで、

『えつ……この不束な娘を』

『強つてお貰ひ申したい、これで兩家和合のしるし』

『うむ、これは御賢慮なとりなし様、何の異存がゐらう。娘喜べ、其方はよい婚を持つたぞ』

お絹と新之丞は顔見合はせて今更乍らにつこりと微笑む、斯うなれば天下晴れての仲である

若い二人は嬉しさうに手を取り合つて部屋へ去る。其處へ鬼塚の子分が今の覆面四人の手数料十五兩二分の請求書をおいてゆく、二老人は

『この金を賣つても拂ふ』おれは槍を賣る』と互に泣いて喜ぶのであつた。



「星亨」に就いて

中村吉藏

もう幾年か前の事である。自分は親戚の家の法要で、池上の本門寺に詣つた時、丘上の喬木の蔭ほの暗いところに、一基の巍然たる石塔が立つてゐて、その磨かれた石の面に「星亨之墓」と肉太な筆跡の鮮やかに刻みおされてゐるのに「星亨」と眼晴を射られるやうな感じとのした事が記憶される。その當時は、彼が「公盜」だの「悪魔」だのとといふ紛々たる世評に埋められてあまり時も経つてゐなかつたので自分は唯一個の泉雄の埋骨標をこゝに發見したいぐらゐにしか思はなかつた。敢て香華を供へて甲はふといふ程のしんみりとした氣持にもなれなかつた。

しかしこの頃になつて、この「星亨之墓」の因縁が知れて、自分は「チヨツ」と打たれた。それは外でもないが、彼の親戚や子の者の中には前衆議院議長だの、前逓信大臣だのといふ肩書で、墓碑面を飾らうと主張したものが多かつたが、彼の生前の無二の親友であつた神鞭知常が「自分は彼の志をよく知つてゐる」と云つてそんな虚飾を斥け、一個の自然兒たり、素朴漢

たる彼の面目を、そのままあつた墓碑に残したのだといふことである。

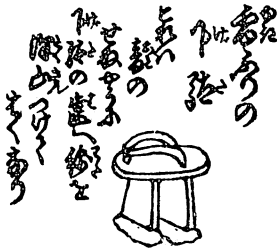
神鞭知常といへば、當時の政界に於ける正義剛直の士として許された人である。この人が星亨の無二の親友であつたといふのが、星亨を唯「公盜」であり「悪魔」であると罵つた敵に對する無言の鐵の楯の存在ではなかつたか？

家庭に於ける彼の孝行の極めて嚴正であつた事が彼を愈々謎の人物たらしめてゐる。彼は母に對しては至孝の子であり、その妻に對しては至純の夫であつた。實子がなかつたけれど、外妻を蓄へるやうな政治家仲間のあるふれた風習に染まらない。又所謂待合入りもやらない。毎日未明に起上つて、書齋に入り熱心に讀書をつゞけるのが十年一日でなく、實に二十年一日といふ有様であつた。彼が兇刃に斃れる數日前「自分は別に財産がないが、書物又は數萬圓のものがあるから、己れが死んでも當分心配もあるまい」と戯談まじりに云つたと傳へられる。彼

は稀有の藏書家であつたに違ひないが、貪つたと云はれる金銭を自分で藏してゐなかつたのである。

彼の素性は一個の疑問とされてゐる。甚いになると、彼の母が山中を通行する時、強盜に姦せられて、彼を産んだので彼は強盜の一夜兒だなどと云ふものもあるが、父は築地小田原町の左官徳兵衛といひ、母は相州浦賀の漁夫の娘お松であるといふのが事實であらう。

自分はこの戯曲を書くに際して印刷された材料だけでは物足らなかつたので、M代議士の紹介で、星の生前の恩顧を受けた人々に親しく面會していろいろの材料を得た。これらの諸材料を通じて、掴み得た星の面目と、當時の時代を背景の上に照し



「國定忠次赤城の月」上演に就て

川 村 花 菱

私の理想する演劇についてはいろいろの議論もある。度々上演される私の戯曲は必ずしも私の信する正しい演劇であると云へない事も勿論である。

更に之を現在の日本に照合して熟視したものがこの戯曲である。この劇中の、あのダンス場と、骸骨をどりの場とは、對話劇以外に「目に訴へる」劇的技巧を取り入れて見たつもりであるが、これは思つた程効果が上らなかつた、しかし、もつと精練して行つたら、よい見せ場となるものと思ふ、大體に於て、澤田君の星亨は豫期以上の演出効果を示し、豫期以上の好評を博した事は作者に於ても甚だ喜ばしい、中井君の神鞭が又ピツタリはまつて兩君の友情が十分に出てゐた、久松の星夫人も、その人らしく思はれ、その他の役々も、先づソツはなかつた、多少のアラは、ほじくり、出さずともよい、總合的效果に於て作者は満足してゐる次第である。

此度昭生座の舞臺に又「國定忠次赤城の月」が上演される。東京の帝劇では、「國定忠次御用」が上演される。友達の一人は私の事を「國定屋花菱」だといつてからかつたが、それは私が

忠次を題材にして書いた上演臺本が全部で五つあるから私で、
が國定ばかりを書いて喰べてるやうに思つて居る人もある、

が、私が國定忠次の一生のいろ／＼の事實に興味を持ちはじめたのは、そも／＼此の赤城の月を書いたのに初まつて、しかもその書きどろしは、昭生座の梅島君が観音劇場に居た頃の事であるのも何となく不思議な因縁のやうに思はれる。私は、これを書く時に、國定忠次は恐ろしい神經衰弱にかゝつて居ると解釋して見たのである、大體ばくちうち客と云ふものは、いづれもある種の神經衰弱であつて、クワツと怒るかと思ふとすぐ分る、あの位分りのい、俠氣な人はないかと思ふと、又反對に一ツまちがふとすぐに切つて仕舞ふと云ふ爆裂弾のやうな性格を持つ事によつて、常識のある他の人々から恐れられて居たり、傳説の如くんば單身數十人の及中に平氣で切り込んだり出来たのではあるまいかとさへ考へる殊に此の赤城山の忠次はその極端をあらはした生活であつたと云ふ處に愧ひ處を置いて書いて見たのである。

従つて私の演出は極く寫實的で、極くしづかにやる中に、此所が芝居だと思ふ處はあくまでも在來の芝居の坪にはめ込むと云ふやり方であつたが、幸にしてこれが處女上演に馬鹿な成切をしたので、引きつゞき座方の注文で「雪の信濃路」を書き又たのまれたので、無理にこんどは櫻の下の立ちまはりをつけ、「權堂の花」とやつつけて、そこで、雪月花の三部曲と云

ふものが出来上つたわけである。「赤城の月」では、忠次も淺太郎もい、役で、梅島君はいづれを取るかどだまつて居ると淺太郎をやつた。淺太郎の役者がよければ淺太郎の芝居になり、忠次の役者がよければ忠次の芝居になる、その點から見て此の脚本は出来そこねたものと自分では思つて居る。
此度いろ／＼重なる用件を帯びて下阪するので、此の本が出る時分には私も忠次の稽古に立ち合つて居る事と思ふが、はたしてどんな配役になるか私には興味のある問題である。

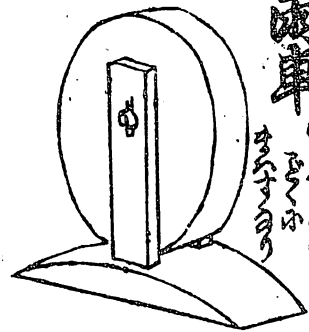
(九月二十日記)

(集募稿原) 部樂俱者讀

讀者俱 部は、松竹經營各座の老名優と言はず新 名題と言はず、あるひは劍劇、新劇、新派のあら ゆる俳優演劇を各自勝手に選んで、公開状になり 批評になり、御自由に投稿して頂きたいのです。 他誌並の口上で言へば紙面提供、さては新進劇評 家の引立て策といふところですが私共はそんな面 倒なことは言はぬ事、ただ諸彦と共に歡談一夕、 そのお積りでお平らにお平らに……
定規 狂言見たま、(四百字詰五枚以内) 劇評所感(四百字詰五枚以内) 俳優への公開状(四百字詰五枚以内)

新劇運動

新劇運動



新劇運動と「新國劇」

津村 京村

所謂、新劇運動といふ事が、このわが日本にはじめて誘起されてから、既に相當の年月を閲してゐる。そしてその間にあつて、幾多の新劇團、乃至、新劇演出者、又は新劇俳優といふものが、實に數多く簇出した。而も今日に及んでその成果が、果して、どれ程現はれてゐるだらうか。勿論、決して現はれてゐないとは言はない。何十年以年のわが劇壇に比べて、それは明らかに近代文明の洗禮は受けて來てゐる。あらう。幾分の新時代的進出の跡は見られない事もない。

然し、それは、決してわれわれの期待を満足させ得たもので無い事は、今更こゝに特筆するまでもないであらう。かくて、新劇運動といふ事が、如何に難いかといふ答案が、直ちにこゝへ投げ出されなければならぬ結果となる譯である

×

すべて何事に限らず、新興事業の運動といふ事が、決して一つの商業主義ではあり得ない事、勿論であるが、それだけに我が演劇の新興運動といふ事が、いかに難かしい事業であるかといふ事を考へなければならぬ。

何故ならば、演劇の運動といふ事は、常に資本といふ物と、絶對的に結び附いてゐなければならぬものだ。勿論、すべての事が然うで無いとは言へないが、然し物に依つてはその志を同化する者の堅固な團結に依つて、充分その遂行を完了する事が出来る場合がある。所が演劇にはそれがいけないどんなに些々たる運動を起すにも、直ちに必要とするものは大なり小なりの資本である。そしてその資本は、必ず一と運動毎に、消費してしまふ物と覺悟しなければならぬ。従つて次の資本を必要とする。次の資本が無くなつた場合ひには、更に又その次

の資本を用意しなければならぬ。幸ひにそれが無制限に湧出する事を許された無盡蔵の大資本であれば、この事業は不斷に繼續され、且つ又その目的地へも、存外早く行きつく事が出来るかも知れない。

だが、それは理想といふよりも寧ろ夢想である。殆ど絶對的にと言つてもい、程、非現實的不可能事である。

この事は、今まで幾多の新劇運動が、隨所に挫折した、その理由を、ひるがへつて探索して見れば、直ちに明らかになるであらう。

X

では何故に、新劇運動が、そんなにも資本ばかりを喰つてる動物の様なのか——とでもいふ問題が更にこゝへ飛び出して来る事になるであらうが、それは又餘りに分り切つた事で、今更事新しく書き立てるのも可笑しい様だが、要は商賣にならぬ芝居を見せて、而も客をウンと感心させなければならぬといふのが、即ち新劇運動といふ事の役目であるからである。更に言ひ換へれば、めつたに客の來ない料理屋を出して——と言ふよりも、はじめからお客の來ない事を承知して居り乍ら、——而も素晴らしい料理をウンと拵へて列べて置かなければならぬ。恰度それと同じである。一人でも二人でも、最初に寄り附いてくれたお客が、その料理を食べて、甘いといふ評判を立て、それがドン／＼他の多くの人々の間に傳へられて、追ひ追

お客の数が増して来る様になれば申分はない。少なくとも、もし新しく料理屋を開業しようといふ者があるとすれば、それは必ずかうした結果を期待しての出發でなければならぬ。

所が新劇運動といふ料理屋を開業するには、間違つてもそんなうまい考へは徹塵持ち合はず事を許されないのだ。開店してから何十年後、或ひは何百年後に、さうした盛況を呈す日があるかも知れない事を、遙かに楽しむ位の事は許されよう。

然しさうした樂しみの爲めに、何十年、何百年の、全損續きの料理屋が、管々として續けて行かれるだらうか。——所謂、知己を百年の後に求める、底の高遠の理想家、いや夢想家は別である。少なくとも現實に生活する事を以つて是とする我れ我れ我にあつては、到底考へられない事である。

X

では何故、新劇運動といふ料理屋には、それ程お客が附かない事が判つてゐるか。——と言ふ事になるだらう。それは日本人の、少なくとも現在の日本人の、口に合はない料理ばかりを拵へてゐるからだ。新劇運動といふ事が、歐米文化の移入を意味してゐる今日の狀態である以上、その列べられた料理は、すべて日本人の口に馴れない料理ばかりでなければならぬ。

判り易く言はう。

新劇運動といふ料理屋の料理は、すべてその味が辛い！ 或

ひは苦い!

ところが日本人は今まで甘い料理を喰ひ馴れてゐる。歌舞伎劇の甘さに馴れた口には、例へそれが如何に複雑な味があつても、辛かつたり、苦かつたりする料理には一寸喰ひつく氣持になれないのは、決して無理ではないだらう。もつと極端に言へば、十人が十人、苦いものより甘い物の方が、より喰ひつき易いといふ事である。

X

かうして考へて來る時、自ら私の頭に浮んで來るのは、既に「新國劇」といふ和洋折衷の料理屋を營んでゐる澤田廿二郎だ。彼が今日あるは、取りも直さず、この和洋折衷、苦甘の味を巧みに按配した、その料理人的庖丁の研えである。脚本の立て方、演出の仕方、すべてこの料理法に可つてゐる。

「築地小劇場」、「新國協會」さては某々の新國劇、さうした連中が、所謂西洋渡來の苦い物や辛い物を列べて、喘々として流行らない店を歎じてゐる時、彼は嶄然、その和洋折衷の料理法に依つて擡頭し、且つ今日の繁昌を招來した。

甘い芝居と辛い芝居——これを巧みに取り合はして見せたのが、即ち澤正の「新國劇」である。この位の機微は誰れにも判つて居さうな事であるが、それが不思議に判つてゐないらしい。それが證據に、所謂、苦い料理や辛い料理ばかりを列べて、そして新劇運動をしてゐるといふ美名だけを冠つて、得々として

ゐる、流行ない、そして無残に亡んで行く新國劇が、今日尙餘りに多い事か。

「良薬は口に苦し」といふ事はある、然し幾ら良薬でも、全然口にしなければ永久にその効果は現はれない。巧みに甘みを加へて、例へ半分、或ひは四半分の分量でも、それを人々の口に運ぶ事をしてゐる者は、結果として、一つの大きな事業を成し得るものと言はねばなるまい。

世人はよく、さうした行爲を「妥協」といふ名に依つて輕蔑したがるものだ。然し、い、意味の妥協は、潔癖にして、遂に全然相容れざる者よりも、より有意義である事を反省しなければならぬ。

さうした意味に於いて、私は澤田君の「新國劇」が、過去及び今日の組織と歩み方とに、少なからず賢明さを見出すものだ。と同時に、その他の劇團に於いても、かうした方法に依つて、更に可能にして、よりよき新劇運動が押し進められる事を期待してやまないものだ。

重ねて言ふ。

歌舞伎萬能の時代は過ぎ、——新派は凋落の非運を見、新劇運動又至難の聲頼りである今日、ひとり新國劇の全盛を極めつゝあるは、蓋し偶然でない事を、變に抽象的な物の言ひ方をして、了つた。判讀して貰へば至幸である。



一轉期に立つ新派

平野止夫

◇ 新派は苦悶してゐる。苦悶時代を惱んでゐる。——今頃こんなことを言つたら、大笑ひだらう。だが、私にはさう感じられてならない。

正に一轉期に立つ新派である、と言ふと、また天下の物識たちに冷笑されるかもしれないが、しかし、私はさう思はずにはゐられないのだ。

所謂新派の二頭目——三巨頭は苦悶してゐる。漢搔いてゐる。それは實に久しいものだ、行詰つたとの、死滅したとの

と、世間から嘲笑と慢罵を浴せかけられながらも、彼等はその裏にあつて、年々歳々苦悶してきた。實に久しい間である。あアでもない、かうでもない、右顧左盼しつゝ、彼等は苦悶してきた。その結果自ら一轉期に面してゐることを覺つた。それは私か今更事新しくこゝに言ふやうな、そんな最近の問題ではない。即ち「今に始まつたことではない」のである。新派に其人ありと謂はれた彼等三頭目である。そんなことぐらゐるとツクの昔自覺しないでどうしよう。

だが、其後彼等は今日まで、これぞといふドツシリした足跡を劇道に残してゐない。世に謂ふ如く、全く彼等は行詰つてしまつて、最早手も足も出なくなつたのだ、と思はせるやうな不鳴の状態におかれてゐた。久しいものだ。するうち、彼等は轉回し始めた。こゝ一二年、彼等は新しい努力を試み出した。捲土重來とまではいかなくとも、それは正しく自覺的努力である。今こそは新しい方向を指しつゝ、正しく一轉期に立つてゐるのだ。少なくとも

私はさう思ふ。従つて、無人の多くの如く私は彼等を全然見捨てようとするものではない。

◇

大阪における努力の跡は暫くおき、最近彼等二頭目——三巨頭は、五月に帝都八月に新橋演舞場、そして九月には本郷座の蓋をあけてゐる。帝都では河合、伊井の二頭目合同、演舞場では伊井、河合喜多村三巨頭の大合同であり、本郷ではまた喜多村と河合の合同となつた。最近數ヶ月に新派としては、兎に角これ華々しい奮闘振を見せた譯である。

それで、この三座における演物は「どんなものだつたか。更生したと稱する新派の華々しい門出の土産はと検討すると先づ帝劇では第一小酒井不木作「龍門黨異聞」第二平野止夫作「戀の受難」第三澤田無松作「都島原」の三種。新橋では第一谷崎潤一郎作「お艶殺し」第二正宗白鳥作「隣家の夫婦」第三伊原青々園作「寶を釣る男」の三種。本郷では第一小

酒井不木作「紅蜘蛛奇譚」第二南恵三作「黒牡丹社」第三瀬戸英一作「新四谷怪談」の三種である。

演物と世界の並べ方をちつと見てみると、更生した彼等がどういふ道をとつて進まうと志してゐるから、すぐ解るではないか。あアでもない。かうでもない。と、長年苦悶してきた結果遂にこゝへ辿り着いたといふ努力が、これで略ぼ了解されるだらうと思ふ。

流行の大衆物へ！ つまりさうだ。彼等はそこを覗つてゐるのである。小酒井氏も、瀬戸氏のものにしても、それから谷崎氏のものにしても、(廣い意味での)皆な大衆物である。彼等はその大衆物と、今一つ、在來の新派とは趣きの變つた、新らしい味のある現代ものをと目指してきてゐる。南氏の「黒牡丹社」と拙作「戀の受難」(これは原作の味をはきちかへて、あアいふ脚色ぶりをされたので、大分變なものだつたが、それでも幾

らかの新味はあつた)がそれであり、殊に正宗氏の「隣家の夫婦」に手をつけたのは、その攻敗は別として、一段の進歩と言はなければならぬ。

◇

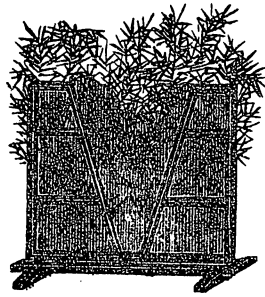
その成功と失敗とは懸つて將來に屬する。今は過程にあるのだ。一つ二つの大衆物に失敗したからといつて、直ちに「新派は所詮新派で駄目だ」と一口に冷殺すべきものではなからう。と云つて、私は現存の新派に人一倍囑望するものではない。同情はするが、そんなに大きな期待をかけてゐるものではない。が、あれだけの腕と頭とをもつてゐる三頭目のことだ。何かそこに局面を轉換して新らしいもの、詰り新生命の萌芽を見さうなものだと思ふのである。何か出来なくてはウソだと思ふのだ。

歌舞伎畑では無論不可、と云つて、在來の新派流では素よりいけない。詰り大衆を目標に、そこに新しい一展開を望みたい。在來の新派から一步踏み出した

ものを心にかけて貰ひたい。帝劇の時に聞
 聞いたことだが、あの三つの演物中観客
 には一戀の受難が一番うけてゐたやう
 だつた。あれでさへさうだあの種のも
 で、もつとい、脚本を提供したら、本當
 に彼等の更生を助長することは決して難
 事ではないと私は思ふ。

たゞ昔ながらの河合には多分の疑問を

初やぶりの
 裁たると
 裏の圖



『劍客商賣』は、エドモン、ロスタン
 原作ではありますが、實の處、翻案者の
 私は原作を讀んでゐないのです。

原本を搜したのですが、見當りません
 でした。勿論翻譯書はありません。私は

もつが、喜多村と伊井となら、なんとか
 出來さうに思ふ。本郷座の世界の立方に
 も勿論あれではと思つたが、しかし今は
 已むを得まい。『黒牡丹社』など、もつ
 と新味のある脚色ぶりを示すと、すつ
 とい、狂言になつたのだが。……『紅蜘蛛
 奇譚』なども寧ろ監物にせずと、現代
 劇にした方が効果があつたらうと思ふ。

「劍客商賣」に就て

小林宗吉

久しぶりに觀た喜多村は身體もよくな
 つてゐるし、この優なら新らしい大衆物
 が、不安氣なく樂々とやれさうに感じた
 伊勢子もお峰も實によかつた。——兎に
 角、三頭目は彼等それ自身が堅い新派真
 の説から抜け出て、白紙で新しいもの
 に向ひ、懸命の熱心と努力を注がなけれ
 ば駄目だと思ふ。
 (二六)

女子學習院を出たばかりのある女の友人
 から唯ストリーをきかされただけで書い
 たのですが、それだけ原作に捉はれずに
 自由に書いて氣持がよかつたと思ひます
 拙作が、帝國劇場で上演された後、小

山内薫氏にあひましたら、あの原作は、
 すつと昔し土井春曙氏達で一度演つたこ
 とがあると言はれました。勿論私は知ら
 ない前のことだし、その時の稿本など、
 とでも残つてゐやしないと思ひます。

帝劇關係の林和氏にあつた時も、あの原作が昔し土井氏等によつて上演されたが、その時の翻案ぶり、よりはこんどの方がはるかに面白いと言つてくれました。お世辭でないと思ひます。その證據にはこんどの私の作で、劍客をやる澤田君の派手な役を、昔演つた時には、芝居の道具方の役にしたと言ひますから、面白さが薄かつたに違ひありません。

「レ、ローマネスク」といふのださうであります。『空想家』とでも譯しませうか。原文は全文詩劇で、私が書いたやうに、普通の劇ではありません。殆んど、歌のやうな科白で出来てゐるのださうです。私も佛蘭西語は少しばかりかじりますので讀んで見たいと思ひますが、原本がありません。

一體に、ロスタンといふ人は、ネオ、ロマンティズムを高唱してゐる藝術家のやうです。シラノはもとより、この作ではことにその雰圍氣が眼はれます。私

は、ストーリーをきいただけで、『は、はあまたロスタンがロマンチズムをやつてるな』と思ひました。私はそれで、これを自分が創作する時にも、ネオ、ロマンティズムでゆきたいと思ひました。

私は、自分が創作を始めると、時代を限らなければならぬことに氣がついた時、私は文政末としましたが、それは、この劇の情緒、ロマンチズムが、同時に江戸頼廢期の錦繪の美に移されて欲しいと思つたからです。

果して、帝劇で上演して見ますと、装置の繁閑鑿一氏が、この私の心持を讀んで、美しい錦繪風の舞臺にしてゐられました。私はその時、藝術的満足が幾分充たされました。

日本のある作家が、劇のリアリズムの勝利を我勝利のもの、如く言つてゐますが、あれは、大きな間違ひです。リアリズム劇の勝利するところは小劇場だけ決して、大劇場でリアリズムは勝つことは出来ません。たまたまかに、リアリス

イクな芝居が評判になりますが、それはいつも、歌舞伎の三味線入りのにぎやかいものばかりやつてゐる時に、一寸、地味な氣取らない、静かなものをやるから見物はうれしがるのですが、いまこゝにそんなリアリズムの芝居ばかり集めて上演したとしたら、何ほどの客が來るでせう。來る人はありやしません。

一時リアリズムの芝居がもてはやされましたが、あれは、たゞ流行といふべきものです。流行は流行の終りを告げるだけです。

『劍客商賣』について、何か書けといはれて一寸したことを書くつもりで、こんな理窟めいたことになりました。一體私は理窟はきらいです。お暇の時、『劍客商賣』でも見て下さい。(終り)

新橋演舞場九月の印象

綿貫六助

菅原傳授手習鑑二幕——序幕、吉田社頭車引の場、おくれたので失禮しました。

二幕目、芹生里寺小屋の場、中車の松王丸は宗十郎の女房千代を好一對と云ふ感じで、殊に松王は、お手のものだけあつて、申分のない出来ばえでした。

菅相逕の恩に預りながら時平公に仕へる良心の苛責、女房千代と云合せて實子小太郎を菅秀才の身替りに立てる、その首實見、後の源藏夫婦との打あけ話、義と恩愛とに絡まつた強者の人間的な哀感が、遺憾なく出てゐた。

その悲哀を抑附けた泣笑ひ、とうとう、映なく死んだ櫻丸まで想出して小太郎の立派な死をヨロコブ段で、人前をも憚らずに涙に破裂する男らしい慟哭は、永く人の靈魂を突刺さずにはおかないもので御座います。

千代之助の春藤玄菴、結構な出来で御座います。訥升の御園養生の前、若過ぎる位で、おつと

りとした美しさで御座いました。

秀調の源藏女房戸浪、弟子兒を殺して身がはりに立て、迎への母語共と覺悟をす源藏の女房に相適しいのですが、奥で首打つ頃から首實見の場面では——どの芝居でもさうのやうですが——も一と息、緊張した表情がほしいと思ひます。

仁左衛門の武部源藏、老骨有聲でございませうけれど、松王からサグリを入られるあたり、グツと急きあげるだけの、内部から突き出す高調のカン癪がほしいと思ひました。

寺小屋——人の心を長らく支配してきたこの寺小屋、やはり、結構なもので御座います。松王夫婦の白装束、門火、全幕をギリツと括る繪畫的な印象を與へるので御座います。

中幕、新口村の場。冬枯れた吹雪く新口村は落人の忠兵衛櫻川を配して、かぶき的と謂ふかとても、藝術的な美しい印象を與へました。

高助の忠三娘は、滑稽味があり、親切氣があり、とりなりも結構で御座いました。やつぱりその俳優の忠底にあつて、そこから演出して行くものは、面白う御座います。

野道の薄氷の上に雪が積るなかを、お寺参りの忠兵衛實父孫右衛門(仁左衛門)、この人でなければできない、老哀のよわさが、荒れる雪景の裡に、忠兵衛(宗十郎)や櫻川(秀調)との邂逅に、追手を避けさせて落してやる親心に、よくはたらいいて、濃厚な音律と色彩とを點出したのは敬服で御座いました。

雪の野邊を、老父のテマネの指導に、落ちてゆく、遠見の忠兵衛(中丸)、櫻川(中尾)、濃過ぎるほどな美しい情調を出しました。舞臺装置も入念で、艶やかなものに、これも恩愛と義理との葛藤を絡めた、美麗なる畫的印象を與へました。

二番目は、みだれ余春二幕です。序幕、京都野屋奥二階の場、宗十郎の金春氏清は、藝人の氣魄をもつた優しさで、眞の妻——深い意味で——藝妓繁野(松菊)に對するおとなしさがよく、火事ときいて、大あわてで、突飛んでゆく金持町人大丸屋彦右衛門(壽美藏)とは

ずつと別な、たゞ二階からみて懊惱み苦しんでゐる、その藝術家らしさが、この戀仇の二人の境遇性格を、クツキリと色別けしたのは、御兩人の功で、そしてまた地盤原作者のはたらきだと感服致しました。

田之助の金春弟子太一郎、九藏の番頭文右衛門、千代之助の手代富五郎など、みなかなりなできばえと思ひます。

第二幕、金春住居の場、火災後新築した大丸屋の下屋敷祝儀の場から發展して、その場へ身請けをした繁野が来ないと云ふので、彦右衛門の大盡遊びが、狂氣の殺人ざたに變りますがまづ、手代の、繁野を連れて歸らぬ肺甲斐なさに立腹し、戀と意地と酒で打ちのめした揚氣、嵩じて、番頭を斬ります。夢中で一たちあひせて……血に倒れた番頭と手にある村正をみて、捨鉢になり、手當り次第に斬りまくる、あの町人らしき大刀使ひと、血をみて、更に狂する心理の経緯が、はつきりとうけとれました。物凄く、眞に迫つた印象で御座いました。人の斬殺されるのも、斬殺するのも、多く見てきた私から申しては不謙遜ですが一敬服致しておきます。

その血刀は、金春住居の場面にとびます。

氏清賢清之助が、狂へる父に、葵の上のかたを傳へてくれと強請むが、かひなし。脱走してきた繁野に呼び醒まされて我に歸つた金春が、葵の上のかたをトクさし舞ふ。そこへ、彦右衛門が斬込むので御座います。

斬られながら、かよわい恐怖の聲を洩しながら、鼓を打ちつゞける繁野、血刀をかくぐりつく舞の態度の動せず、藝術的氣魄の生き生きとした氏清、たゞ斬られんうちに轉げ込む女房おふさ(秀調)、この場面で幕になるのですが、實に結構でございました。

藝の偽には、あゝありたい、と思はせられます。

これほど迫つたものではありませんが、日外泉鏡花先生の「ラントウ場 天使」?にも、かうした、藝術的氣魄が、強い印象に残りましたが、あの能役者は、藝のために、その昔の戀人を冷視して酒になき、氏清は、葵の舞の前には、狂へる町人の白刃を黙殺して、藝術のダイゴ球に陶醉し、斬殺された二人の愛人を見て、卒然と、葵の上の衣裳をかむり、倒れてしまふので御座います。

新口村は、わりあひに、感覺的印象でした。みだれ金春は、冒すことのできぬ心的な印象とも云ふべきもので、人をうちました。(完)

澤正の「星亨劇」は

何しろ芝居には是れまで余り取扱はれぬ政治的場面が多いのでその演出には並々ならぬ苦心が拂はれたさうである。新國劇には幸現代議士商工省、參與といふ肩書いかめしい負担があるので直ちに同氏は舞台監督として連日、稽古に立合つて貰ひ、澤田の星亨は一言一動の末まで故人にそっくりと言はれる程の行届いた監督振りここに面白いのは第五議會の場面で鼻つまりの野次が飛び出すと、その鼻つまりをそのまゝに眞似て野次り返し観客も議員も満場吐笑といふところであるがこれは牧野省三氏が特に取り入れたもので、現に立派なモデルがあるのである。それは前者が民政黨の中林友信君、後者が海軍政務次官内田信也君でその由来は、朴烈事件當時大阪で政本の聯合演説會をやつた中林君が先づ登壇していつも内田君がしゃやべるさはりのところと手ぶり身ぶりやつてのけて大喝采、お蔭で内田君、すぐその後に登壇して大味噲、これにヒントを得た牧野君が取入れたのださうであるが、澤正及びその一黨はそれを知つてか知らずにか舞台の上に政争をそのまゝに演出してゐる譯である。

編輯後記

朝 郎 生

× 型にはまつた編輯振りも面白くないといふので、ぐつと調子を下けて見た、御覽の通りである。といつて決して自慢にはしてゐない。そればかりが、鳥渡間に合はせ過ぎた傾きがあるので、僕少々恐れ入つてゐる。調子を下けるなんて變りすぎた手柄話だがこれも營業政策なら仕方がない

× しかし内容記事は充分精選したつもりである、何しろ道頓堀は發行日の十日前邊りでなければ編輯方針が確定しないのだ。といつて紙面を潰すのが能ではないので、間に合

はせの記事で埋める譯にはゆかない、第一それでは雑誌の權威にかゝはる許りか讀者諸君にも甚だ御氣の毒である。とにかく原稿を集めるのには骨が折れる。

× 來月から、讀者俱樂部を設けることにした。俳優への公開状でも批評でもなんでもよい(但し人身攻撃にわたつては困る)どしどしと奇抜な氣焔を上げて欲しい。

大阪には芝居は澤山あるがよき劇評家があるない、といふよりも皆無である。とにかく芝居は諸君のものだ。現在の演劇を改革するには諸君の力をまつより外に方法はない。

× 編輯後記なんて月並だから止さうと思つたのだが、考へ

て見ると紙面の都合で矢張り書かなければならないことになつた。僕達は校正を三晩もつゞけたので、ぐつすりつかれてゐる。筆をとるのも厭になつてゐる。どうせ流言なら思ひ切つて並べやうと思つたがうつつかりしたことを辨言つては口が風を引く、何をいふにも、書くにも、程よくしなければならぬ、程よく、

寄贈雑誌

- 歌舞伎 劇と映畫
- 劇と評論 芝居とキネマ
- 劇 舞臺評論
- 演劇新潮 婦女界
- 人生創造 主婦之友
- 苦樂 映畫時代
- 女性 演藝叢報

昭和二年十月一日發行
雑誌刊『道頓堀』十月號
第十三輯

- 誌代は前金でお拂ひを願ひます。
- 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
- 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (四兩料)

昭和二年九月廿八日印刷
昭和二年十月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

編輯者 松竹合名社

發行者 鳥江 鏡也

印刷者 松本 米藏

大阪府東區鶴野天王寺町五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社

電話南(三〇六三番)

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社内
道頓堀編輯部

電話南(二四〇番)

電話南(六六六番)



香味共々
天下の逸品



品正小公認
社會共味油醬金丸

昭和二年九月二十八日印刷
昭和二年十月一日發行

若く明い顔になる

レイト白粉

阪大・京東
店商平賛尾平

金參拾錢
(四郵
錢稅)